

危険ヲ生ゼシメタル者云々ト規定シタルカ故ニ溢水罪ニ於テモ單ニ之ヲ模倣シ同様ノ文字ヲ使用シタルニ過キサレモノ、如シ。然レトモ斯ノ如キハ火力ト水力トノ作用ヲ混同シタル結果トシテ甚シキ誤謬ニ陥リタルモノナリ。即チ立法者カ斯ル規定ヲ爲シタル所以ハ放火罪ニ在テハ放火アリタルノミニテハ敢テ公共ノ危険ヲ生ゼス物ノ燒燬アリテ始メテ公共ノ危険ヲ發生スルモノナルコトヲ知リタルモ溢水罪ニ在テハ公共ノ危険ハ溢水其モノニ因テ生ス可キモノニシテ必スシモ物ノ浸害アルヲ待テ始メテ生スルニ非サル所以ヲ悟ラサリシニ基クモノ、如シ。且ツ況ンヤ物ハ浸害ニ因リ公共ノ危険ヲ生ゼシメタル例トシテ擧ケタル前述ノ場合ニ就テ之ヲ精確ニ觀察スルトキハ物ノ浸害ニ依リ公共ノ危険ヲ生ゼシメタルモノト謂ハンヨリ寧ロ溢水其モノニ依リ生シタル物ノ破壊力(公共ノ)カ物ノ倒塌又ハ抑流ニ依リ増大シタルニ過キスト解スルヲ相當トス。

往來妨害
即ノ法益

分類

第五章 往來ヲ妨害スル罪

陸路橋梁ヲ損壞シ又ハ河溝其他水路ヲ壅塞シ以テ公衆ノ通行若クハ船舶ノ通航ヲ妨害スルカ如キ汽車電車若クハ艦船ニ危険ヲ及ホスカ如キ又ハ人ノ乘リ居ル汽車電車若クハ艦船ヲ顛覆覆沒若クハ破壊スルカ如キハ社會公衆ノ利便ヲ害スルコト甚シキモノニシテ不定多衆人ノ生命身體若クハ財産ニ危険ヲ及ホスノ虞甚タ大ナリ。故ニ此罪モ亦社會ニ危険ナル罪中ノ一ナリトス。

我刑法ノ規定スル往來妨害罪ハ之ヲ分テ第一一般ノ往來妨害(刑一四)第二汽車電車若クハ艦船ノ往來妨害(刑一五)第三汽車電車若クハ艦船ノ顛覆覆沒若クハ破壊(刑一二六條一)第四往來妨害ニ因ル致死傷(刑一二四條二項一三)第五往來妨害ノ未遂(刑一二七條一)第六過失ニ因ル往來妨害(刑一二七條一)ノ六ト爲スコトヲ得。

第一節 一般ノ往來妨害罪

第二百二十四條 陸路、水路又ハ橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シテ往來ノ妨害ヲ生セシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス。

〔前項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス。〕

一般ノ往來
來妨害

此罪ハ陸路、水路又ハ橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シテ公衆ノ往來又ハ艦船ノ通航ヲ妨害スルニ依リ成立ス。左ニ之ヲ分説ス可シ。

第一 客體

客體

我刑法上ニ於テ此罪ノ客體タル可キモノハ陸路、水路及ヒ橋梁ノ三者ナリ。故ニ此三者ニ付キ略解ヲ試ム可シ。此三者以外ニ於テ尙ホ之ト同一視ス可キ物ト雖モ此罪ノ客體タルヲ得サルモノトス。

陸路

(一) 陸路。陸路トハ公衆ノ往來ニ供セラル、道路ヲ謂フ。苟モ公衆ノ往來ニ供セラル、道路ナル以上ハ其敷地カ國ニ屬スルト、公法人ニ屬スルト又

個人ニ屬スルト又工事費カ何人ニ依リ支出セラレタルトヲ問ハス總テ法律ノ所謂陸路ニ該當ス。故ニ陸路ノ意義中ニハ國道、縣道若クハ村道ノミニ限ラス廣ク公衆ノ往來ニ供セラル、道路ヲ包含ス(註二七)。然レトモ一個人カ其一個ノ私用ニ供スル道路ハ假令他人ノ通行スルコトヲ許シタル事實アリタルニモセヨ斯ノ如キハ法律ノ所謂陸路ニ非ス。

(註二七) 同趣旨 大審院判例、勝木、泉二、小崎、岡田、牧野諸氏。

判例ニ曰ク『刑法第六十二條(舊)ニ所謂道路トハ必スシモ國縣、村道ノミニ限ラス苟モ公衆ノ往來ニ供シタルモノハ總テ之ヲ包含セルモノトス』(四〇年大審院判決錄一九六頁)ト、勝木氏刑法新義上卷三〇六、三〇七頁、泉二氏日本刑法論六四四、六四五頁、小崎氏日本刑法論各論一九一、一九二頁、岡田氏刑法講義七〇頁、牧野氏刑法通義二三四頁參照。

水路

(二) 水路。之ヲ法文ヨリ解スレハ水路トハ頗ル廣クシテ海洋中ニ於ケル航路モ亦包含スルカ如クナレトモ茲ニ所謂水路トハ之ヲ損壞若クハ壅塞シ得可キモノニ限ル。故ニ艦船舟筏ノ通行シ得可キ河川、運河若クハ港口等損壞若クハ壅塞シ得可キ水路ヲ指稱スルモノナリ。

第五章 往來ヲ妨害スル罪 第一節 一般ノ往來妨害

(三) 橋梁。河川溝渠ニ架設セル普通ノ橋梁ヲ指稱ス。鐵橋、石橋、木橋ノ如キ完全ナルモノハ勿論寒村僻地ニ於ケル棧橋ノ如キモ亦橋梁ナリ。茲ニ橋梁トハ公衆ノ往來スル通常ノ橋梁ヲ謂フモノニシテ專ラ汽車、電車ノ通行ノ爲メ架設シタル橋梁ノ如キハ寧ロ第百二十五條ノ所謂鐵道ノ意義中ニ包含スルモノト解釋スルヲ以テ最モ權衡ヲ得且ツ法文ノ精神ニ合スルモノ、如シ。

我法律カ此罪ノ客體ヲ定ムルヤ列記的ノ方式ヲ採用シ例示的ノ方式ヲ採用セザリシヲ以テ此罪ノ客體タル可キモノハ前示ノ三者ニ限リタルモノニシテ其以外ノ物ハ假令前示三者ト同一視ス可キ價値アル物ト雖モ此罪ノ客體タルコト能ハサルモノトス。例ヘハ大ハ鉅萬ノ經費ヲ以テ築造シタル港埠ヨリ小ハ渡船工事ノ如キハ此罪ノ客體タルコト能ハサルモノトス(註二八)。故ニ港埠又ハ渡船工事ヲ損壞シ艦船若クハ公衆ノ往來ヲ妨害スルモノ之ヲ本條ノ罪ヲ以テ論スル能ハスシテ一般ノ毀棄罪ヲ以テ之ヲ問ヒ告訴ヲ待テ其罪

ヲ論ス可キモノトス(刑二六四條)。

(註二八) 同條旨。而シテ一般ニ法文ノ列記的ノ規定ヲ非難ス。勝本、小崎、泉二、牧野諸氏。

勝本氏曰ク「法律ハ道路橋梁……トアリテ損壞行爲ノ行ハル可キ目的物ヲ限定スルカ故ニ此以外ノモノ例ヘハ渡船等ニ係ルトキハ本罪ヲ構成セス」(刑法折衷上卷三〇七頁)ト。小崎氏曰ク「法文ニハ道路、橋梁等制限的ニ列記セラレタルヲ以テ此等以外ノ場所ニ關スルトキハ之ヲ處罪スルコトヲ得ス。然レトモ立法論トシテハ此等以外ノ場所ト雖モ之ヲ損壞シテ往來ヲ妨害ヲ爲ストキハ之ヲ處罪スルノ必要ハ此等列記ノ場合ニ關スルトモモ異ナルコトナシ。例ヘハ渡船場ノ踏板或ハ足場ヲ損壞スルカ如シ」(日本刑法論各論一九三頁)ト。泉二氏曰ク「本罪ノ目的物ハ法文ニ列記スルモノニ限ルカ故ニ例ヘハ水路ヲ壅塞シテ渡舟ノ往來ヲ妨害スルハ本罪ヲ構成スルモ渡舟其モノヲ破壞シテ人ノ通行ヲ妨クルハ本罪ヲ構成セス」(日本刑法論六四五頁)ト。牧野氏曰ク「新刑法ハ陸路、水路及ヒ橋梁ト規定シタリ(中略)。往來ノ安全ヲ保護スルノ法律趣旨ヨリ論スルトキハ例示的ト見ルコト妥當ナル可シト雖モ明文ハ文理解上制限的ニ解ス可キカ如シ」(刑法通義二三四頁)ト。

行爲及ヒ故意

第二 行爲及ヒ故意

法律ハ(一)陸路、水路又ハ橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シ(二)之ニ依リテ往來ヲ妨害スル行爲ヲ罰スルモノナリ。故ニ此二者中其一ヲ缺クトキハ此罪ヲ構成セス。故ニ例ヘハ道路若クハ橋梁ヲ損壞スルモノ之ニ依リテ往來ノ妨害ヲ來スニ至

陸路水路
梁ノ損壞

ラサルトキ又ハ現ニ往來ノ妨害ヲ來シタルモ道路又ハ橋梁ノ損壞又ハ壅塞ノ手段ニ依ラサルトキハ共ニ此罪ヲ構成セス。

(一) 陸路水路又ハ橋梁ノ損壞。陸路橋梁ハ之ヲ破壞シテ或ハ一部ノ存在ヲ失ハシムルコトヲ得可ク(損傷)又ハ其全部ノ存在ヲ失ハシムルコトヲ得可シ(毀滅)。又其效用ノ一部又ハ全部ヲ失ハシムルコトヲ得可シ(損傷若クハ毀滅)。自然ノ水路ノ如キハ之ヲ損壞スル能サル場合ナキニ非スト雖モ人工ヲ加ヘタル水流特ニ運河溝渠ノ如キハ水流ニ關スル工作物ヲ損傷若クハ毀滅シ以テ水路ノ往來ヲ爲ス能ハサラシムルヲ得ルモノナリ。然レトモ水路ヲ損壞ストノ文字ハ決シテ妥當ノ文字ト謂フ能ハスシテ寧ロ堤防水堰水閘其他水流ニ關スル工作物ノ損壞若クハ同様ナル文字ヲ以テ代フルノ適切ナルニ如カス。

陸路水路
梁ノ壅塞

(二) 陸路水路又ハ橋梁ノ壅塞。壅塞トハ廣ク通路ノ往來ヲ妨クル行爲ヲ總稱スルモノニ非スシテ獨リ有形ノ障礙物ヲ以テ通路ノ往來ヲ遮斷スルノ

行爲ノミナリト解スルヲ相當トス可キカ如シ。故ニ暴行ヲ以テ公衆ノ通行ヲ遮斷スル如キ又ハ欺罔ヲ以テ船舶ノ往來ヲ妨害スルカ如キハ法律ノ所謂壅塞ニ非ス。何トナレハ暴行又ハ欺罔ヲ以テ妨害ヲ爲スルカ如キハ人ニ對シ一定ノ行爲(通)ヲ爲スヲ妨クルモノニシテ(物)ノ損壞ト相對シ(物)ノ壅塞ト謂フ能ハサレハナリ(註二九)。

(註二九) 同趣旨 勝本、岡田、小崎、泉二、牧野諸氏。

勝本氏刑法新義上卷三〇七頁、岡田氏刑法講義七〇頁、小崎氏日本刑法論各論一九三、一九四頁參照。泉二氏曰ク「本罪ニ於ケル行爲ハ損壞又ハ壅塞ヲ爲スニ限ルカ故ニ其以外ノ行爲ヲ以テ往來ヲ妨害スルモノ本罪ヲ構成セス。例ヘハ往來止又ハ車馬通行禁止ノ立札ヲ爲スカ如キ是ナリ」(日本刑法論六四五頁)ト。牧野氏曰ク「詐欺ノ標識例ヘハ「往來止」ト謂フカ如キ立札ヲ設ケルカ如キ場合ハ本條ニ入ラサルコト、ナル」(刑法通義二三五頁)ト。

通路ノ損壞
壅塞ニ依ル
往來ノ妨害

(三) 通路ノ損壞若クハ壅塞ニ依ル往來ノ妨害。獨リ往來ヲ爲ス能ハサラシムル行爲ノミナラス往來ニ危險ヲ生セシムル行爲モ共ニ往來妨害ナリト謂フコトヲ得可シ。故ニ例ヘハ橋梁ヲ取去リ全ク通行スル能ハサラシムル場合ハ勿論橋梁ノ大部分ヲ損傷シ以テ全ク通行ヲ爲ス能ハサルニ至ラ

シメサルモ若シ通行スルトキハ河川ニ墜落スルノ危険アルカ如キ場合ハ
共ニ往來妨害ノ行爲アリタルモノト謂フ可シ。通路ノ損壞若クハ壅塞ニ
依リ通行不能若クハ通行危険ノ状態トナリタルトキ即チ抽象的妨害アリ
タルトキハ此罪ヲ完成スルモノニシテ何人カ之ニ依リテ妨害ヲ受ケタル
事實即チ具體的妨害アリタル事實アルコトヲ必要トセス(註三〇)。

(註三〇) 同趣旨ナルカ如シ。勝本、岡田、泉二、牧野、小崎諸氏。

勝本氏曰ク「道路ノ用ハ通行シ得可キニ在ルカ故ニ之ヲシテ通行シ得可キ状態ヲ失ハシメハ茲ニ往來ハ之ニ依テ阻
害セラレタルモノニシテ害ヲ生シタリト謂フ可ク必スシモ事實人ノ之ニ阻害セラレタルコトヲ待ツテ要スルノ理ナ
クレハナリ」(刑法新義上卷三〇八、三〇九頁)ト。岡田氏曰ク「妨害ト稱スルハ往來ノ不能又ハ重大ナル不便ヲ醸シ
タル状態ヲ謂ヒ現ニ之カ爲メニ害ヲ受ケタル者アルコトヲ要セス」(刑法講義七〇頁)ト。泉二氏曰ク「往來ノ妨害ヲ
生セシムルト謂フハ往來ノ障礙ト爲ル可キ状態ヲ生セシムルコトヲ意味ス必スシモ特定人カ往來ヲ阻止サレタル事
實ノ存スルコトヲ要セス」(日本刑法論六四五頁)ト。牧野氏曰ク「妨害トハ危険ヲ生スルノ謂ナリ。必スシモ實際ニ
交通ヲ阻止サレタル人アルコトヲ必要トセス」(刑法通義二三五頁)ト。尙ホ小崎氏日本刑法論各論一九四頁參照。

故意

(四) 故意。陸路水路又ハ橋梁ヲ損壞若クハ壅塞スル行爲ニ付キ故意ヲ要ス
ルノミナラス往來妨害ノ事實ニ就テモ故意ヲ要ス可キモノトス。

第二節 汽車、電車又ハ艦船ノ往來妨害

汽車、電車若クハ艦船ノ往來ノ危険ヲ生セシムルノ行爲ニ對シテハ法律ハ
特ニ重刑ヲ以テ之ヲ罰ス。此等ハ孰レモ重要ナル交通機關ニシテ其往來ノ
安全ノ如キハ特ニ厚ク保護スルヲ必要トスルカ爲メナリ。而シテ汽車及ヒ
電車ト艦船トハ之ヲ區別シテ説明スルヲ便トス。

第一款 汽車又ハ電車ノ往來妨害

第二百二十五條 鐵道又ハ其標識ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ汽車又ハ電車ノ往
來ノ危険ヲ生セシメタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス。

(燈臺又ハ浮標ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ艦船ノ往來ノ危険ヲ生セシメタル
者亦同シ。)

第一 客體

汽車トハ蒸汽力ノ作用ニ依リ電車ハ電流ノ作用ニ依リ鐵道ノ上ヲ往來ス
ル交通機關ナリ。而シテ常ニ標識若クハ信號ニ從ヒ獨リ鐵道ノ上ノミヲ往

汽車、電車
往來ノ妨害
客體

來スルモノナレハ鐵道又ハ其標識ノ損壞ハ汽車又ハ電車ノ往來ニ對シ大ナル危険ヲ及ホスモノナリ。汽車電車タル以上ハ(一)公衆ノ使用ニ供セラル、ト又ハ一個人ノ使用ニ供セラル、ト否トヲ問ハス、(二)人ノ運送ヲ目的トスルト貨物ノ運送ヲ目的トスルト否トヲ問ハス、(三)長距離ニ亙ルモノナルト又短距離ニ亙ルモノナルト否トヲ問ハス共ニ茲ニ所謂汽車又ハ電車ナリト謂フヲ得可シ。

第二 所爲及ヒ手段

汽車若クハ電車ノ往來ニ危険ヲ生セシム可キ行爲アルトキハ此罪ヲ構成ス。而シテ其危険ヲ生セシム可キ處アル行爲アレハ足ルモノニシテ之ニ因リテ特定人カ現ニ危険ヲ感シタル事實アルコトヲ必要トセス。鐵道ヲ損壞シ又ハ鐵道ノ標識ヲ損壞スルカ如キハ汽車又ハ電車ノ往來ヲ妨害スル一段ニ外ナラスシテ法律ハ適例トシテ之ヲ示シタルノミ。尙ホ其他ノ方法ニ依リ汽車又ハ電車ノ往來ノ危険ヲ生セシム可キ場合少カラス。其場合ハ之

所爲及ヒ手段

ヲ鐵道線路其標識等ニ就テ求ムレハ軌道ノ上ニ石ヲ横ヘ又ハ詐僞ノ標識ヲ掲ケ若クハ詐僞ノ信號ヲ爲シ汽車又ハ電車ノ往來ノ危険ヲ生セシムルカ如キハ共ニ本條ノ罪ヲ構成ス。又之ヲ汽車ニ就テ求ムレハ例ヘハ機關車、客車其他ノ附屬物ノ設備ヲ損壞シ其往來ヲ危険ナラシムル如キ又之ヲ電車ニ就テ求ムレハ電流ニ關スル裝置ヲ損壞シ其往來ヲ危険ナラシムルカ如キハ此罪ヲ構成スルモノナリ。

終ニ注意ヲ要ス可キハ法文ヲ一覽スルトキハ鐵道又ハ其標識ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ汽車又ハ電車ノ往來ニ危険ヲ生セシメタル云々ト規定セルヲ以テ獨リ積極的行爲ヲ爲スニ依リ汽車電車ノ往來ヲ危険ナラシメタル行爲ノミヲ罰スルカ如クナレトモ之ヲ法文ノ精神ヨリ考フルトキハ獨リ斯ル行爲ノミナラス一定ノ行爲ヲ爲スノ義務アル者カ故意ニ之ヲ怠リ爲サ、リシカ爲メ危険ヲ生セシメタル場合モ亦此罪ヲ構成スルモノト解ス可キナリ。故ニ汽車又ハ電車ノ運轉ニ關スル業務ニ從事スル者其職務上當然爲

ス可キ信號ヲ爲サ、ルニ依リ汽車若クハ電車ノ往來ニ危険ヲ生セシムルノ行爲モ尙ホ此罪ヲ以テ論ス可キモノニ屬ス(註三三)。

(註三三) 同趣旨 泉二氏曰ク「廣ク其他ノ方法ヲ以テ」スルコトヲ認メタルカ故ニ(中略)其他尙モ往來ノ危険ヲ生セシメ得可キ一切ノ行爲ヲ包含ス可ク而シテ其行爲ハ作爲ト義務違反ノ不作爲トヲ共ニ包含ス(日本刑法論六四七頁)ト。

第二款 艦船ノ往來妨害罪

第二百二十五條 (鐵道又ハ其標識ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ汽車又ハ電車ノ往來ノ危険ヲ生セシメタル者ハ二年以上ノ有期徒刑ニ處ス) 燈臺又ハ浮標ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ艦船ノ往來ノ危険ヲ生セシメタル者亦同シ。

第一 容體

法文ニ燈臺又ハ浮標ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ艦船ノ往來ノ危険ヲ生セシメタル者トアルヲ一覽スルトキハ茲ニ所謂艦船トハ海洋ヲ航行スル船舶、軍艦等ヲ指稱スルモノ、如クシテ燈臺又ハ浮標等ニ依ラスシテ往來ス

艦船ノ往來妨害容體

ルポート又ハ河川沼湖等ニ於ケル小舟等ハ此罪ノ容體タルヲ得サルモノト解シ得可キカ如シ。然レトモ(一)艦船ノ語中ニハ其海洋ヲ航行スルト、河川ヲ航行スルト又其大ナルト、小ナルトヲ問ハス總テノ船舶ヲ包含スル點及ヒ(二)往來妨害ノ手段タル燈臺又ハ浮標ノ損壞ハ之ヲ次ニ述フルカ如ク例示的ニ掲ケタル一ニ例ニシテ小舟ニモ適用セラル可キ手段ヲ除外シタルニ非スト解ス可キモノナレハ茲ニ所謂艦船中ニハ各種ノ船舶ヲ包含スルモノト解ス可キモノトス(註三三)。

(註三三) (一) 同趣旨 勝本、泉二兩氏。

勝本氏曰ク「船舶(新法ハ艦船)トアリテ大小形狀ヲ問ハサルカ故ニ尙モ船舶タル以上ハ如何ナル小船ト雖モ尙ホ本罪ヲ構成ス(刑法新義下卷四七七頁)ト。泉二氏曰ク「艦船ヲ海上航行ノモノニ限ルカ如ク解スルハ失當ニシテ江湖河川ヲ航行スル一艦船ヲモ包含スルモノト解スルヲ可トス。主トシテ標識ヲ以テ進行スル端舟ヲ包含スルヤ否ヤ一ノ疑問ナリト雖モ積極的ニ解スルヲ穩當ナリトス(日本刑法論六四八頁)ト。

(二) 異説 牧野氏曰ク「艦船ノ範圍ニ關シテ疑アリ。惟フニ第二百二十五條第二項ノ規定ハ第二百二十四條ノ水路妨害罪ノ規定ニ包含セラレザル場合ニ關スルモノナリ。故ニ河川航行及ヒ之ニ比ス可キ湖沼港灣ノ航行ヲ除外セザル可カラズ。從テ第二百二十六條第二項ノ船舶沒收罪ニ就テモ亦同様ノ制限ヲ認メサル可カラズ。船員法第一條ハ船員

第五章 往來ヲ妨害スル罪 第二節 汽車、電車又ハ艦船ノ往來妨害罪

法ヲ湖川港灣ノ船舶ニ適用セサル旨ヲ規定ス。同條ニ所謂湖川港灣ノ語ヲ以テ本條ノ解釋ニ資ス可シ(刑法通義二 三六頁)ト。

所爲及
手段

第二 所爲及ヒ手段

艦船ノ往來ニ危険ヲ生セシム可キ虞アル行爲アルトキハ此罪ハ完成スルモノトス。法文ニ燈臺又ハ浮標ノ損壞トハ艦船ノ往來ノ危険ヲ生セシム可キ手段中最モ重要ナル適例ヲ示シタルニ過キス。故ニ例ヘハ(一)燈臺ニ於ケル燈明ヲ消シ(二)詐僞ノ燈明ヲ掲ケ(三)浮標ヲ除去シ若クハ詐僞ノ浮標ヲ浮ヘ、(四)艦船ノ往來ス可キ箇所(海底岩等)ニ障礙物ヲ横フル如キ場合ハ勿論(五)艦船若クハ其附屬物ヲ損壞シ以テ艦船ノ往來ニ危険ヲ生セシムルトキハ此罪ヲ構成スルモノトス。而シテ危険ヲ生セシムトハ危険ヲ生スルコトアル可キ情況ニ至ラシムルヲ謂フモノトス。故ニ斯ル情況ニ在ルトキハ具體的ニ何人カ之ニ依リ害ヲ蒙ルノ情況ニ接シタルコトヲ必要トセス。

第三節 汽車、電車若クハ艦船ノ顛覆、覆没

若クハ破壊罪

第二百二十六條ノ第一、二項及ヒ第二百二十七條ハ共ニ汽車、電車又ハ艦船ノ顛覆、覆没又ハ破壊ヲ規定シタルモノナレトモ兩者ノ異ル所ヲ擧クレハ前者(一、二、六項)ノ場合ニ於テハ(一)故意ニ基キ(二)人ノ現在スル汽車、電車又ハ艦船ヲ顛覆、覆没又ハ破壊スル行爲ヲ規定スルモノニシテ後者(七、一、二)ノ場合ニ於テハ汽車、電車、艦船ノ往來ニ危険ヲ生セシムル故意アルモ(一)之ヲ顛覆、覆没又ハ破壊スルノ故意ナクシテ斯ル結果ヲ生シタル場合ニシテ(二)其之ニ人ノ現在スルト否トハ之ヲ問ハサルノ二點ナリトス。

第一款 故意ヲ以テ人ノ現在スル汽車、電車又ハ艦船ノ顛覆、覆没又ハ破壊罪

第二百二十六條 人ノ現在スル汽車又ハ電車ヲ顛覆又ハ破壊シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス。

第五章 往來ヲ妨害スル罪 第三節 汽車、電車若クハ艦船ノ顛覆、覆没若クハ破壊 一七五

入ノ現在スル艦船ヲ覆没又ハ破壊シタル者亦同シ。
前二項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス。

客體

第一 客體

此罪ノ客體タル可キモノハ人ノ現在スル汽車電車又ハ艦船ニ限ル。故意ヲ以テ人ノ現在セサル汽車又ハ電車ヲ顛覆セシムルモ之ヲ損壞セシムルニ至ラサルトキハ刑法典中ニ之ヲ罰ス可キ明文ナシ。若シ之ニ依リテ損壞シタルトキハ毀棄罪(刑二六四條)ニ照シ告訴アルヲ待テ其罪ヲ論ス可キモノトス。又故意ヲ以テ人ノ現在セサル艦船ヲ覆没スルモ之ニ依リテ艦船ヲ損壞シタル場合ニ限リ其現ニ人ノ住居ニ使用セラレタルト否トヲ問ハス毀棄罪(刑二六)ニ依リ處斷ス可キモノトス。

第二 所爲及ヒ手段

故意ヲ以テスル汽車電車又ハ艦船ヲ顛覆覆没又ハ破壊スルノ行爲ハ總テ第二百二十六條第一項及ヒ第二項中ニ包含ス。其顛覆覆没又ハ破壊スルノ手

所爲及ヒ手段

段如何ハ之ヲ問フ所ニ非サルナリ。故ニ例ヘハ或ハ第二百二十五條ニ規定スルカ如ク或ハ鐵道又ハ其標識ヲ損壞シ以テ汽車若クハ電車ノ顛覆又ハ破壊ヲ來サシメタル場合ノ如キ或ハ燈臺又ハ浮標ヲ損壞シ以テ艦船ヲシテ覆没又ハ破壊ニ至ラシメタル場合ノ如キ共ニ此罪ヲ以テ論ス可キモノトス。

艦船ノ覆没ナル意義中ニ坐礁(Strandung)ヲ包含スルヤハ疑問ナリ。之ヲ立法上ノ政策ヨリ言ヘハ之ヲ包含セシムルヲ可ナリトス可キコト論ヲ俟タスト雖モ余ハ我國慣用ノ字義ニ依リ覆没ナル文字中ニ坐礁ヲ包含セサルモノト解スルヲ妥當ナリト信ス。然レトモ覆没ナル文字中ニハ艦船カ全然水中ニ沈没スルヲ要セス既ニ幾部ノ没入ヲ見ルニ至リタルトキハ之ヲ覆没ト稱ス可キナリ(註三三)。

(註三三) 同說 フランク氏及ヒ獨逸帝國裁判所判例(Frank, Nr. 328; H. 8, 218.)

終ニ何故ニ我法文ハ往來ヲ妨害スル罪ニ限リ一般ニ使用セル損壞ノ文字ヲ避ケテ破壊ノ文字ヲ選ミタルヤハ余ノ解スル能ハサル所ナリ。

第三 故意

故意

人ノ現在スル汽車電車又ハ艦船ヲ顛覆覆没又ハ破壊スルノ故意アルヲ要ス。其過失ニ出テタル場合ハ第二百二十九條ニ依リ處斷ス可キモノトス。何人モ現在セサル可シト思料シ例ヘハ艦船ヲ覆没若クハ破壊セシメタルニ意外ニモ人ノ現在シタルトキハ前述第二ニ説明シタルカ如キ理由ニ依リ損壞アリタルトキハ刑法第三十八條第二項第二百六十一條第二百六十四條ヲ適用シ毀棄罪ニ依リ處斷ス可ク若シ覆没シタルニ止マルトキハ第三十八條第一項ニ依リ無罪トスルノ外ナキナリ。

第二款 汽車、電車又ハ艦船ノ往來ノ危

險ヲ生セシムルニ因ル其顛覆、
覆没又ハ破壊罪

第二百二十七條 第二百二十五條ノ罪ヲ犯シ因テ汽車又ハ電車ノ顛覆若クハ破壊又ハ艦船ノ覆没若クハ破壊ヲ致シタル者亦前條ノ例ニ同シ。

法文ニ單ニ汽車又ハ電車ノ顛覆若クハ破壊又ハ艦船ノ覆没又ハ破壊ヲ致シタル者ト記シテ汽車電車又ハ艦船ナル文字ノ上ニ何等ノ文字ヲ冠セサルヲ以テ之ニ人ノ現在シタルト否トヲ問ハサルモノト解スルヲ相當トス。又法文ニ云々ノ罪ヲ犯シ因テ云々ヲ致シタル者ト記スルハ行爲者カ豫期セサル結果ヲ生シタル場合ニ於テ其結果ニ付キ責ヲ負ハシムル場合ヲ規定スル文例即チ故意ナキ場合ヲ罰スルノ文例ナリ。此罪ト前條ノ罪ト異ナル所ハ(一)此罪ノ客體ハ人ノ現在スルト否トヲ問ハサルコト、(二)此罪ハ故意ヲ缺クコトノ二點ニシテ其他ノ點ニ關シテハ前條ニ説明シタル所ニ依リ明瞭ナレハ之ヲ再說セス。

第四節 往來妨害ニ因ル致死傷罪

第二百二十四條 陸路水路又ハ橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シテ往來ノ妨害ヲ生セシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス。
前項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス。

第五章 往來ヲ妨害スル罪 第四節 往來妨害ニ因ル致死傷

第二百二十六條 (入)ノ現在スル汽車又ハ電車ヲ顛覆又ハ破壊シタル者ハ無期又ハ三
年以上ノ懲役ニ處ス。

入ノ現在スル艦船ヲ覆没又ハ破壊シタル者亦同シ。

前二項ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ死刑又ハ無期懲役ニ處ス。

參照 第二百二十七條 第二百二十五條ノ罪ヲ犯シ因テ汽車又ハ電車ノ顛覆若クハ破
壞又ハ艦船ノ覆没若クハ破壊ヲ致シタル者亦前條ノ例ニ同シ

往來妨害罪ヲ犯スノ故意アリタルモ之ニ依リ殺人若クハ傷害ノ故意ナク
シテ人ヲ死傷セシメタル場合ニ於テ往來妨害ニ因ル致死傷ナルモノヲ生ス。
往來妨害ニ因ル致死傷ハ往來妨害ノ直接ノ結果タルコトアリ。例ヘハ橋梁
ヲ損壞シタルカ爲メ通行人カ河中ニ墜落シ溺死シタルカ如キ又汽車ヲ顛覆
シタルカ爲メ乗客カ死亡シタル場合ノ如シ。又間接ノ結果タルコトアリ。
例ヘハ汽車ヲ顛覆セシメタルカ爲メ傍人カ之ニ因テ死傷シタル場合ノ如シ。
往來妨害ニ因ル致死傷ノ各種ノ場合ヲ想像スレハ第一陸路水路又ハ橋梁
ヲ損壞又ハ壅塞シ以テ往來ヲ妨害スルニ因ル致死傷第二汽車電車又ハ艦船

ノ往來ノ危険ヲ生セシムルニ因ル致死傷第三斯ル危険ヲ生セシメタル結果
トシテ汽車電車又ハ艦船ノ顛覆覆没又ハ破壊ニ因ル致死傷第四人ノ現在ス
ル汽車電車又ハ艦船ノ顛覆覆没又ハ破壊ニ因ル致死傷第五人ノ現在セサル
(又ハ現在セサル)汽車電車又ハ艦船ノ顛覆覆没又ハ破壊ニ因ル致死傷ナリトス。
其中第一ニ就テハ第二百二十四條第二項之ヲ規定シ第四ニ就テハ第二百二十六
條第三項之ヲ規定スト雖モ第二第三及ヒ第五ニ至リテハ往來ヲ妨害スル罪
ノ條文中ニ其規定ヲ缺クモノト解セサルヲ得ス。

尤モ余ハ第二百二十七條ノ法文中ニ第三ニ對スル規定ヲ包含スルモノト解
スルヲ得可キヤヲ疑フ者ナキヲ保セサレトモ法文ヲ熟讀スルトキハ斯ル疑
問ノ餘地ヲ存スルモノニ非ス。何トナレハ第二百二十七條ハ汽車等ノ往來ニ
危険ヲ及ホスノ行爲ヲ爲シタル結果タル汽車電車又ハ艦船ノ顛覆覆没若ク
ハ破壊ノミヲ規定シタルコトハ法文上ニテ之ヲ認め得可シ。然ルニ若シ故
意ニ基カサル行爲ノ結果タル人ノ死傷ヲモ罰セントセハ法律上ノ明文ヲ要

ス。斯ノ如キ行爲ヲ罰ス可キ必要アルコトハ何人モ之ヲ認ムル所ナル可ク
余モ亦熱心ニ斯ル必要ヲ主張スルモノナレトモ法律ニ特別ノ規定ナキ場合
ニ於テハ之ヲ罰スル能ハサルハ最モ明白ナル事理ナリ。

第五節 往來妨害ノ未遂罪

第二百二十八條 第二百二十四條第一項、第二百五條及ヒ第二百二十六條第一項、第二項
ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス。

(一)陸路、水路又ハ橋梁ヲ損壞又ハ壅塞シテ往來ヲ妨害スル罪(刑一、二、四)ノ未
遂(二)汽車、電車、艦船ノ危険ヲ生セシムル罪(刑一、二、五)ノ未遂(三)人ノ現在スル汽
車、電車又ハ艦船ヲ顛覆覆沒又ハ破壊スル罪(刑一、二、六)ノ未遂ハ第四十三條ニ
依リ處斷ス可キモノトス。

第六節 過失ニ因ル往來妨害罪

第二百二十九條 過失ニ因リ汽車、電車又ハ艦船ノ往來ノ危険ヲ生セシメ又ハ汽車、電
車ノ顛覆若クハ破壞又ハ艦船ノ覆沒若クハ破壊ヲ致シタル者ハ五百圓以下ノ罰

金ニ處ス。
其業務ニ従事スル者前項ノ罪ヲ犯シタルトキハ三年以下ノ禁錮又ハ千圓以下ノ
罰金ニ處ス。

法律ハ(一)過失ニ因リ汽車、電車又ハ艦船ノ往來ニ危険ヲ生セシメタル者及
ヒ(二)過失ニ因リ汽車、電車又ハ艦船ヲ顛覆覆沒又ハ破壊セシメタル者ヲ罰ス。
此罪ニ付キ注意ス可キハ左ノ二點ナリトス。

(イ) 業務ニ従事スル者。法文ニ其業務ニ従事スル者トハ汽車、電車又ハ艦船
ノ運轉ニ關スル業務ニ従事スル者ヲ謂フ。行爲者ニシテ斯ノ如キ従業者
ナルトキハ常人ニ比シ其罪重シ。例ヘハ燈臺ヲ監守スル者カ點火ヲ忘レ
艦船ノ航行ニ危険ヲ生セシメタルカ如キ又汽車又ハ電車ノ信號ヲ誤リ其
衝突ヲ招キタル場合ノ如シ。

(ロ) 人ノ現在スル汽車、電車又ハ艦船タルコトヲ誤セス。法文ニ汽車、電車又
ハ艦船ノ文字ノ上ニ何等ノ文字ヲ冠セサルヲ以テ茲ニ所謂汽車、電車又ハ

第五章 往來妨害スル罪 第五節 往來妨害ノ未遂 第六節 過失ニ因ル 一八三

業務ニ従
事スル者

汽車、電車
人ノ現在
スルヲ要

艦船トハ人ノ現在スル汽車電車又ハ艦船ノミナラス人ノ現在セサル汽車電車又ハ艦船ヲモ包含スルモノナリト解セサルヲ得ス。故意ニ基キ人ノ現在セサル汽車電車又ハ艦船ヲ顛覆覆没スルモ其損壞ヲ來サ、ルトキハ之ヲ罰セサルニ拘ラス過失ニ基クスル行爲ヲ罰スルハ滑稽ニ近シ。

第七節 刑罰

一般往來妨害(即チ陸路水路又ハ橋梁ノ損壞)ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ該リ、汽車電車又ハ艦船ノ往來妨害ハ(一)汽車電車ノ往來妨害(即チ電車ノ往來ノ危險ヲ生シメタルトキ)(二)艦船ノ往來妨害(即チ燈臺又ハ浮橋又ハ其標識ノ損壞ヲ生シメタルトキ)ハ共ニ二年以上ノ懲役ヲ以テ處斷ス可ク、汽車電車若クハ艦船ノ顛覆覆没若クハ破壞ハ(一)故意ヲ以テ人ノ現在スル汽車電車又ハ艦船ノ顛覆覆没又ハ破壞(二)汽車電車若クハ艦船ノ往來妨害ニ因ル其顛覆覆没又ハ破壞ハ共ニ無期又ハ三年以上ノ懲役ヲ以テ處斷ス可キモノトス。往來妨害ニ因ル致死傷ハ(一)一般往來妨害ニ因ル致死傷ハ傷害罪ノ刑ニ比較

刑罰

シ重キニ從テ處斷ス可ク、(二)人ノ現在スル汽車電車又ハ艦船ノ顛覆覆没又ハ破壞ニ因ル致死(即チ汽車電車又ハ艦船ノ往來ノ危險ヲ生シメタルトキ)ハ死刑又ハ無期懲役ヲ以テ處斷ス可キモノトス。尙ホ(一)一般ノ往來妨害(二)汽車電車又ハ艦船ノ往來妨害及ヒ(三)汽車電車又ハ艦船ノ顛覆覆没又ハ破壞ノ三罪ノ未遂ハ總則ノ規定ニ從ヒテ處斷ス可キモノトス。過失ニ因ル往來妨害ハ(一)汽車電車又ハ艦船ノ往來妨害及ヒ(二)從業者ノ行爲ニ係ルトキハ三年以上ノ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ヲ以テ處斷ス可キモノトス。

第八節 評論

第一 法律ハ人ノ現在スル汽車電車又ハ艦船ヲ顛覆覆没又ハ破壞セシメ因テ人ヲ死ニ致シタル者ヲ死刑又ハ無期懲役ニ處ス可キ旨ヲ規定シナカラ(刑一三六條)鐵道又ハ其標識又ハ燈臺若クハ浮橋ヲ損壞シ因テ人ヲ死ニ致シタル場合ニ關シ斯ル行爲ニ依リ汽車電車又ハ艦船ノ顛覆又ハ覆没ヲ來シ因

評論

テ人ヲ死ニ致シタル場合ニ何等ノ規定ヲ設ケザリシハ缺點ニ非サルカ(一〇乃至一八)。法律ハ特別ノ規定ヲ設ケサルカ故ニ斯ル場合ハ過失致死ヲ以テ之ヲ罰スルノ外ナカル可シ。故ニ例ヘハ詐欺ノ信號ヲ爲シ不時ニ汽車ノ急運轉ヲ爲サシメタル結果トシテ意外ニモ鐵道線路ヲ修膳シ居タル人夫ヲ轢死セシメタル場合又ハ詐欺ノ信號ヲ爲シタル爲メ艦船カ平常艦船ノ出入セサル水面ニ進航シ來リ以テ意外ニモ漁業ヲ爲シ居リタル人ノ死傷ヲ來シタル場合ノ如キハ之ヲ過失致死ヲ以テ罰スルノ外ナシ。又例ヘハ鐵道線路ニ大ナル石ヲ横ヘタルカ爲メ汽車ノ脱線ヲ來シ乗客ヲ死傷ニ致シタル場合ノ如キモ同様ナリ。舊刑法第六十九條ニハ不完全ナカラモ此點ニ關スル規定ヲ存シタリ。然ルニ現行刑法ニ於テ之ヲ删除シ舊刑法ノ刑(刑死)ニ比シ遙ニ輕キ刑ヲ以テシタルカ如キハ其趣旨ヲ解スル能ハス。

第二 我刑法ハ故意ヲ以テ人ノ現在スル汽車、電車又ハ艦船ヲ顛覆覆没又ハ

破壊スルノ罪ヲ認メナカラ人ノ現在セサル艦船ヲ覆没スル罪ヲ認メサルハ不都合ニ非サルカ艦船ノ覆没ノ如キハ假令其損壞ニ至ラサルモ大ナル損害ヲ醸成スルコトナシト爲サス。余ハ此點ヲ規定シタル舊刑法第四百十六條ヲ删除シタル趣旨ヲ解スル能ハス。又行爲者カ艦船ニ人ノ現在セスト思料シタルトキハ假令人カ現在シタリトスルモ恰モ現在セサルモノトシテ處分セサル可カラサル場合アリ。又斯ル艦船ノ覆没ニ因リ人ノ死傷ヲ來スコトナキニ非ス。我刑法ニ在リテハ之ヲ過失ニ因ル致死傷トシテ僅ニ罰金刑ヲ以テ處罰スルノ外ナキハ甚シキ不都合ニ非サルカ。

第六章 飲料水ニ關スル罪

飲料水ハ人ノ生活上一日モ缺ク可カラサル必須品ナリ。故ニ各人ノ使用ス可キ飲料淨水ハ水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水又ハ水源ヲ汚穢シ又ハ之ニ毒物ヲ混入スルガ如キハ公衆(不定多)ノ生命、身體ニ對スル危険ヲ及

ホスモノナリ。又公衆ノ飲料ニ供スル淨水ノ水道ヲ損壞又ハ壅塞スルヲ如キハ公衆ニ對シ淨水ヲ得ルノ途ヲ杜絶シ以テ不定多衆人ノ不健康ヲ招クノ虞アルモノナリ(註三六)。

(註三六) 同題旨 泉二氏曰ク「抑々飲料ニ供スル淨水ハ公衆ノ衛生上一日モ缺ク可カラサル必須品ナルガ故ニ本罪ハ公衆ノ衛生ニ關スル罪ノ一種ナリト認メサル可カラズ。法律ハ他ノ公共的性質ヲ有スル罪ト相前後シテ本罪ヲ配置スルノミナラス一定ノ嗜好ヲ有スル人々ノミニ使用セラルル他ノ飲料品ヲ除外シテ各人ニ共通ナル飲料淨水ノミニ付キ本罪ヲ規定スルニ由テ之ヲ觀ルモ本罪ノ性質ヲ知ルニ難カラス(日本刑法論六五七頁)ト。

我刑法ノ規定スル飲料水ニ關スル罪ハ之ヲ分テ第一飲料淨水ノ汚穢又ハ之ニ有害物ノ混入(刑一四四條)第二水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水又ハ其水源ノ汚穢又ハ之ニ有害物ノ混入(刑一四四條)第三飲料水ニ關スル罪ヲ犯スニ因ル致死傷(刑一四四條)第四公衆ノ飲料ニ供スル淨水ノ水道ノ損壞又ハ壅塞(刑一四四條)ノ四ト爲スコトヲ得。

第一節 飲料淨水ノ汚穢又ハ之ニ有害物ヲ混入スル罪

第四百十二條 人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ六月以下ノ懲役又ハ五十圓以下罰金ニ處ス。
第四百十四條 人ノ飲料ニ供スル淨水ニ毒物其他人ノ健康ヲ害ス可キ物ヲ混入シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス。

客體

第一 客體

法文ノ所謂人ノ飲料ニ供ス可キ淨水トハ一般ニ人ノ使用ス可キ飲料淨水ヲ謂フモノニシテ例ヘハ他人カ飲料トシテ使用スル井水若クハ泉水又ハ河川若クハ貯水池等ニ於ケル淨水ノ如キヲ指稱ス。若シ他人カ飲用トシテ使用ス可キ淨水タル以上ハ其淨水ノ湧出スル井戸又ハ泉カ何人ノ所有ニ屬スルヤハ之ヲ問フノ必要ナシ。故ニ行爲者ハ其所有ニ屬スル井戸ニ汚物若クハ毒物ヲ投シタル場合ト雖モ其井水ニシテ飲料トシ一般ニ人ノ使用ス可キ淨水タル以上ハ此罪ヲ構成ス可キナリ(註三五)。之ニ反シテ淨水ニシテ人ノ飲料トシテ使用スルモノニ非サルトキハ假令其淨水ニシテ飲料ニ適スル場合ト雖モ此罪ノ客體タルモノニ非ス。例ヘハ清澄鏡ノ如キ山間ノ溪流ノ如キ

人ノ飲料水(又ハ水道)ニ非サルトキハ此罪ノ客體ニ非ス。又飲料トシテ使用
 ス可キモノナルモ特定セル一人ノ専用ニ供セラル、場合若クハ特定人カ飲
 料ノ爲メ汲取リタル一椀ノ水又ハ一桶ノ水ノ如キハ法律ノ所謂飲料淨水ニ
 非ス。若シ行爲者カ専ラ其飲料ニ供ス可キ淨水ヲ汚穢シ又ハ之ニ毒物ヲ投
 スルカ如キハ他人ニ何等ノ實害ヲ與フルコトナケレハ法律ハ干涉スル必要
 ナカル可シ。又若シ行爲者カ専ラ他ノ特定人ノ飲料ニ供セラル、淨水若ク
 ハ特定人カ飲料トシテ汲ミ取リタル一椀若クハ一桶ノ水ニ毒物ヲ投シタル
 場合ニ於テハ行爲者ニ人ヲ殺傷スルノ故意アリト認メ得可ク從テ別罪ヲ構
 成ス可キコトアル可キナリ。

(註三五)

同題旨 勝本、岡田、小崎、牧野諸氏。

勝本氏曰ク「飲料ノ淨水ハ一人ニ屬スルモノト公衆ニ屬スルモノトアリ。一般公衆ノ健康ニ關スル犯罪ノ一種ナ
 ルカ故ニ茲ニ所謂飲料ノ淨水トハ後者ヲ謂フモノトス」(刑法新義上卷六六〇、六六一頁)ト。岡田氏曰ク「人ト稱ス
 ルハ自己以外總テ人ニ相當シ淨水ノ淵源(井戸河川等)ノ自己ニ屬スルト否トハ論ナシ。而シテ本節ハ井戸ノ如ク
 專ラ不定多衆ノ人ノ日常使用ス可キ飲料水ノミヲ想像シ器ニ盛リテ茶ニ與フル飲水ノ類ヲ含マスト信ス」(刑法新
 義一五六頁)ト。小崎氏曰ク「法文ニ人ノ飲料ニ供スル淨水トアリテ苟モ他人タル以上ハ特定人ノ飲料ニ供スルモノ
 タルト公衆ノ飲料ニ供スルモノタルトナ區別セザルカ如キモ本節ノ罪タル公衆ヲ健康ヲ保護スル目的ニ出テタルチ
 以テ本節ニ規定スル所ノ淨水ハ井戸、水道又ハ水溜ノ如キ公衆ノ飲料ニ限ルモノト解スルチ至當トス」(日本刑法論
 各論四七六頁)ト。牧野氏曰ク「飲料ニ供スル淨水トハ不定多衆ノ人カ日常使用ス可キ飲料水ナリ。其流水タルト湧
 水タルトナ間フコトナシ。飲料ニ供スル目的ニ出ツルトキト雖モ茶碗ニ容レタル水ニ就テハ本罪ノ成立ナシ」(刑法
 通義二五〇頁)ト。

所爲

第二 所爲

此罪ヲ構成ス可キ行爲ニ二アリ。一ハ飲料淨水ヲ汚穢シテ因テ之ヲ使用
 スル能ハサラシムル行爲ニシテ其二ハ之ニ毒物其他人ノ健康ヲ害ス可キ物
 ヲ混入スル行爲ナリトス。

(一) 飲料淨水ノ汚穢ニ因リ之ヲ使用スル能ハサラシムル行爲。法律ハ淨水
 ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フル能ハサルニ至ラシメタル者ト規定スルカ故ニ汚
 穢ノ程度稍ヤ進ミ之ヲ使用スル能ハサル場合ニ限り之ヲ罰ス可キモノト
 ス。又法文ニ因テ云々ニ至ラシメタル者ト記スルヲ以テ汚穢スルノ行爲

飲料淨水
 汚穢ニ
 因リ之
 ヲ使用
 スル能
 ハサル
 行爲
 爲シム
 ルヲ

第六章

飲料水ニ關スル罪 第一節

飲料淨水ノ汚穢又ハ之ニ有害物ノ混入

ニ關シテハ故意ヲ要スルモ使用スル能ハサラシメタル結果ニ就テハ行爲者ニ故意アルヲ要セサルモノト解ス可キナリ(註三六)。淨水ヲ汚穢ストハ他物ヲ以テ淨水ヲ溷濁セシムルヲ謂フ。例ヘハ塵埃泥土其他之ニ類スル物ヲ淨水ニ投スルカ又ハ淨水中ニ於テ不潔物ノ附着シ居ル物ヲ投入シ不潔物ヲ洗ヒ落スカ如キ行爲ヲ爲スヲ謂フ。

(註三六) 同趣旨 江木、泉二兩氏。

江木氏曰ク「飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪ハ人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサラシムルニ至ラシムル(中略)ノ所爲ヲ指示シ凡テ其結果ニ對スル故意ノ有無ヲ問ハス」(現行刑法原論一〇九頁)ト。泉二氏曰ク「本案ノ罪ニ於ケル故意ノ觀念モ一般ノ觀念ニ從フ然レトモ茲ニ注意ス可キハ第四百四十二條及ヒ第四百四十三條ノ罪ハ結果ナルカ故ニ使用不能ノ結果ニ付テハ認識ヲ必要トセサルコト明カナルモ其認識アルカ爲メニ本罪ノ成立ヲ妨ケサルコト是ナリ」(日本刑法論六五九頁)ト。

(二) 飲料淨水ニ毒物其他人ノ健康ヲ害ス可キ物ノ混入。毒物トハ人體ニ吸收セラレ血液ニ混化シ化學作用ヲ起シ以テ著シク人ノ健康ヲ害シ又ハ人命ヲ絶ツニ適スル無機物ヲ謂ヒ又人ノ健康ヲ害ス可キ物トハ無機物ナル

飲料淨水ニ毒物混入
他人ノ健康ヲ害ス
可キ物ノ混入

ト微菌ノ如キ有機物ナルトヲ問ハス人カ之ヲ混入シタル水ヲ飲用スルトキハ其健康ヲ害ス可キ各種ノ物ヲ總稱ス。此罪ハ毒物又ハ其他人ノ健康ヲ害ス可キ物ヲ飲料淨水ニ混入スルニ依リ成立ス。而シテ往々之ニ由リテ水質ヲ變シ又ハ腐敗セシムルカ如キ結果ヲ發生スルコトアルヘキモ是ハ必スシモ此罪ノ成立ニ必要ナラス

第二節 水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料淨水又ハ其水源ノ汚穢又ハ之ニ有害物ノ混入

第四百十三條 水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水又ハ其水源ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ處ス。
第四百十六條 水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水又ハ其水源ニ毒物其他人ノ健康ヲ害ス可キ物ヲ混入シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス。因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス。

前節ノ罪ト本節ノ罪ト異ナル所ハ客體ニアリ。即チ前節ノ罪ノ客體ハ人

第六章 飲料水ニ關スル罪 第二節 水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料淨水又ハ其水源ノ汚穢又ハ之ニ有害物ノ混入

ノ飲料ニ供スル淨水ナレトモ本節ノ罪ノ客體ハ水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料淨水又ハ其水源ナリトス。

水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料淨水
水源

水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水トハ公衆ニ供給セラル可キ淨水ニシテ供給ノ途中ニアル淨水ヲ謂フ。例ヘハ潜水機又ハ鐵管若クハ鉛管ニ存スル淨水ノ如キヲ謂フ。既ニ何人カ供給ヲ受ケ茶碗若クハ桶在中ノ水ハ最早法律ノ所謂水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水ト稱ス可キモノニ非ス。水源トハ水道ニ流入ス可キ水ニシテ未タ水道機關ニ流入セサルモノヲ總稱スルナラン。其他前節ニ於テ爲シタル説明ハ本節ニ準用シ得可キヲ以テ之ヲ再說セス。

第三節 飲料水ニ關スル罪ヲ犯スニ因ル致死傷

第四百四十五條 前三條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ死傷ニ致シタル者ハ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス。

第四百四十六條 (水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水又ハ其水源ニ毒物其他ノ人ノ健康ヲ害ス可キ物ヲ混入シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス)。因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス。

殺人若クハ傷害ノ故意ナクシテ飲料水ヲ汚穢シ之ニ因リ意外ニモ人ノ死傷ヲ來シタル場合ヲ想像スレハ第一飲料淨水ヲ汚穢スル行爲(刑一四)ニ因ル死傷第二水道ニ由ル飲料淨水又ハ水源ヲ汚穢スル行爲(刑一四)ニ因ル死傷第三飲料淨水ニ有害物ヲ混入スル行爲(刑一四)ニ因ル死傷第四水道ニ由ル飲料淨水又ハ其水源ニ有害物ヲ混入スル行爲(刑一四)ニ因ル死傷ノ四アリトス。法律ハ此四種ニ付キ區別ヲ設ク其中第一乃至第三ノ致死傷ハ比較的輕キ刑ヲ以テ之ヲ罰ス可キ旨ヲ定メ第四ノ致死ハ普通ノ殺人罪ヨリ重ク罰ス可キ旨ヲ定メ其傷害ニ付キ何等ノ規定ヲ設ケス。

第四節 公衆ノ飲料ニ供スル淨水ノ水道ノ損壞又ハ壅塞

第六章 飲料水ニ關スル罪 第三節 飲料水ニ關スル罪ヲ犯スニ因ル致死傷 第四節 公衆ノ飲料ニ供スル淨水ノ水道ノ損壞又ハ壅塞

第四百十七條 公衆ノ飲料ニ供スル淨水ノ水道ヲ損壞又ハ壅塞シタル者ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス。

茲ニ水道トハ水道ニ關スル一切ノ機關ヲ謂フ。故ニ例ヘハ潜水機械、濾過機械、其他鐵管、鉛管等ハ總テ水道中ニ包含スルモノト解ス可キナリ。故ニ例ヘハ潜水機械、濾過機械、其他鐵管若クハ鉛管ヲ損壞シタルトキハ此罪ヲ成立ス。水道ノ壅塞トハ妥當ノ文字ニ非サルモ水道機關ヲ通過スル水ノ流下ヲ壅塞スル行爲ト解ス可キナリ。

第五節 刑罰

飲料淨水ノ汚穢又ハ有害物ヲ混入スル所爲ノ中(一)汚穢シテ用フルコト能ハサルニ至ラシメタルトキハ六月以下ノ懲役又ハ五十圓以下ノ罰金ニ該リ、(二)有害物ノ混入ハ三年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス。水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料淨水又ハ水源ノ汚穢又ハ有害物ヲ混入スル所爲中(一)汚穢シテ用フルコト能ハサルニ至ラシメタル所爲ハ六月以上七年以下ノ懲役ニ該リ(二)有害

刑罰

物ノ混入ハ二年以下ノ有期懲役ヲ以テ處斷ス可キモノトス。飲料水ニ關スル罪ヲ犯スニ因ル致死傷罪ハ(一)飲料淨水ノ汚穢又ハ有害物ノ混入若クハ水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料淨水又ハ其水源ノ汚穢ニ因ルトキハ此等ノ罪ノ各本條ト傷害罪ノ規定トヲ比較シ重キニ從テ處斷ス可ク、(二)水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料淨水又ハ其水源ニ有害物ヲ混入シタルニ因ル致死ハ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス可キモノトス。公衆ノ飲料ニ供スル淨水ノ水道ノ損壞又ハ壅塞ハ一年以上十年以下ノ懲役ニ處ス可キモノトス。

第六節 評論

第一 水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料ノ淨水又ハ水源ニ毒物其他人ノ健康ヲ害ス可キ物ヲ混入シ因テ人ヲ死ニ致シタル者ヲ死刑又ハ無期若クハ五年以上ノ懲役ニ處ス可キ旨規定シ其刑ヲ殺意ヲ以テ人ヲ殺シタル罪即チ殺人罪ヨリ重クシタルハ不權衡ナリトノ非難ハ蓋シ之ヲ免ル能ハサル可シ。而シテ人ノ飲料ニ供スル淨水ニ毒物其他人ノ健康ヲ害ス可キ物ヲ混

評論

入シ因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ第四百四十五條ニ依リ傷害ノ罪ニ比較シ重キニ從テ處斷ス可キ旨規定シタルハ之ヲ前者ニ比較シ果シテ權衡ヲ得タルモノト謂フヲ得可キカ。勿論小數人ノ飲料ニ供スル淨水ニ毒物ヲ混入スル罪ト多數人ノ使用スル水道ノ淨水ニ毒物ヲ混入スル罪トヲ比較スルハ前者ハ輕ク後者ハ重キコト言フ要セサレトモ均シク淨水ニ毒物ヲ混入スル行爲ヲ爲シ因テ人ヲ死ニ致シタル結果ニ付キ甚タシキ輕重ノ差ヲ設クルカ如キハ之ヲ權衡ヲ得タル妥當ナル規定ト謂フコトヲ得可キヤハ大ニ感ナキ能ハス。

第二 公衆ノ飲料ニ供スル淨水ノ水道ヲ損壞又ハ壅塞スル行爲ヲ罰スルハ相當ナラン。然レトモ水道ノ水源ノ損壞壅塞(法文ノ用例ニ從フハ斯即チ水道ノ水源タル水流ヲ決潰其他水源ニ關スル工作物ヲ損壞シ若クハ壅塞スルカ如キ行爲ヲ禁スルニ非スンハ第四百四十七條ヲ規定シタル目的ハ之ヲ貫徹スル能ハサルカ如シ)。

第三 我刑法カ飲料水ニ關スル罪ノ未遂罪ヲ罰スル規定ヲ設ケサリシハ失當ニ非サルカ。故ニ例ヘハ人ノ飲料ニ供スル淨水又ハ水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料淨水ノ水源ニ將ニ毒物ヲ投入セントスル行爲アルモ他人ノ爲メ發見セラレ其目的ヲ達セサリシ場合ノ如キ又例ヘハ公衆ノ飲料ニ供スル淨水ノ水道(抽水機、濾過機、其他鐵管等)ヲ損壞若クハ之ヲ壅塞セント欲シ既ニ其實行ニ著手シタルモ他人ノ爲メニ發見セラレ其目的ヲ達セサリシ場合ノ如キハ法律カ未遂罪ヲ罰スル規定ヲ缺如スル結果トシテ之ヲ處罰スル能ハサルヘシ。斯ノ如キハ實際ノ必要ニ應ズル能ハサルノミナラス特ニ現行法カ飲料淨水ニ關スル罪ヲ重要視シ重刑ヲ以テ本罪ヲ律セントスルノ趣旨ヲ貫徹セサルモノト謂フヘシ。

第七章 爆發物ニ關スル罪

刑法カ規定ヲ設クル以外ノ行爲ニシテ公共ノ生命、身體若クハ財産ニ對シテ危險ヲ加フ可キ虞アル行爲少カラス。而シテ此等ノ行爲ニ對シテハ多ク特別法ニ於テ之カ規定ヲ設ク。而シテ特別法ニ於ケル公共ノ生命、身體若クハ財産ニ危險ナル罪ノ主ナルモノヲ爆發物ニ關スル罪ト爲ス。故ニ左ニ爆發物ニ關スルノ罪ノ梗概ヲ説明ス可シ。

爆發物ニ關スル罪ハ明治十七年十二月太政官布告爆發物取締罰則之ヲ定ム。爆發物其レ自體ハ非常ナル破壊力ヲ有スルヲ以テ之ヲ不適法ニ使用スルカ如キハ獨リ直接ノ被害者ノミナラス牽テ社會一般ノ公安ヲ害スルコト大ナリ。又既ニ之ヲ使用シテ犯罪ノ目的ニ供シタル場合ノミナラス其製造輸入所持若クハ注文モ亦其適法ナルコトカ證明セラレサル以上ハ社會一般ノ公安ヲ危ウスルモノナリ。故ニ法律ハ嚴罰ヲ以テ之ニ臨ム。之ヲ前述ノ

罰則ニ依リ爆發物ニ關スル大綱ヲ指示スレハ左ノ如シ。

第一 爆發物ヲ不適法ニ使用スルノ罪即チ公安ヲ妨ケ又ハ人若クハ物ヲ害スルカ爲メ爆發物ヲ使用シ又ハ使用セシムル罪(刑罰、死刑、第一條)。

第二 爆發物使用罪ノ未遂罪即チ使用セントシテ遂ケサル罪(刑罰、無期徒刑、有期徒刑、第二條)。

第三 爆發物使用罪ノ豫備罪即チ不適法ニ使用スル目的ヲ以テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造、輸入、所持若クハ注文ヲ爲ス罪(刑罰、重懲役、第三條)。

第四 爆發物ヲ不適法ニ使用ス可キコトヲ以テ脅迫シ又ハ斯ル使用ヲ爲ス可キコトヲ教唆若クハ煽動シ又ハ爆發物ヲ不適法ニ使用セント共謀ヲ爲スノ罪(刑罰、重懲役、第四條)。

第五 爆發物使用罪ノ從犯即チ爆發物ヲ不適法ニ使用スル者ノ爲メ情ヲ知テ爆發物若クハ其使用ニ供ス可キ器具ヲ製造、輸入、販賣、讓與、寄藏ヲ爲シ又

ハ其約束ヲ爲ス罪(刑罰、重懲役、第五條)。

第六 不適法ノ使用ノ爲メニ非サルコトヲ證明スル能ハサル爆發物ノ製造、輸入、所持又ハ注文スル罪(刑罰、二年以上五年以下ノ重禁錮五圓以上五十圓以下ノ附加罰金、第六條)。

尙ホ何人ト雖モ第一乃至第五ノ犯人アルコトヲ認知シタルトキハ直ニ警察官吏若クハ危害ヲ蒙ル可キ人ニ告知ス可ク又爆發物ヲ發見シタルトキハ直ニ警察官吏ニ告知スルノ義務アリ。前者ニ背クトキハ六月以上五年以下ノ重禁錮ニ處セラル可ク、後者ニ背クトキハ五圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處セラル可シ。且ツ又第一乃至第五ノ犯罪ニ付キ犯人ノ藏匿及ヒ罪證湮滅ニ付キ特ニ嚴罰ヲ科ス(第七條乃至第九條)。

第三編 交通取引ニ於ケル誠實 及ヒ信用ニ對スル罪

第一章 一般觀念及ヒ分類

人文ノ進歩發達シタル今日ニ在リテハ吾人ハ個々孤立シ獨力ニテ生存ヲ全ウシ得可キモノニ非ス。吾人カ今日ノ社會ニ於テ圓滿ナル生存ヲ全ウシ得ル所以ハ吾人ハ相互ニ相交通取引シ有無相通シ長短相濟フコトヲ得ルカ爲メニ外ナラス。而シテ吾人カ安シテ交通取引ヲ爲シ得ル所以ノモノハ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ナルモノ存スルカ爲メナリ。換言スレハ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ノ存スルアリテ始メテ人類社會ニ於ケル交通取引ノ安全ヲ期待スルコトヲ得可シ。左レハ交通取引ニ於ケル誠實ハ義務ナ

交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ニ對スル一般觀念

ルカ如クニシテ其實交通取引ニ關與スル者ノ利益即チ社會一般ノ利益ナリ。交通取引ニ於ケル誠實ナルモノ存在スルトキハ其當然ノ結果トシテ交通取引ニ於ケル信用ナルモノ成立ス。此信用アリテ始メテ圓滿ナル交通取引ヲ望ムコトヲ得可シ。故ニ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ハ相合シテ吾人ノ交通取引ニ於ケル必要ナル條件ヲ構成スルモノナルコトヲ知ルヲ得可シ。之ヲ要スルニ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ヲ保護スル所以ハ即チ交通取引其モノヲ保護スル所以ナリ。而シテ交通取引其モノヲ保護スルハ人類社會ノ健全ナル狀態秩序ヲ維持スル所以ニシテ吾人ヲシテ圓滿ナル生存ヲ全クシ得セシムル所以ナリ。左レハ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ハ人類社會ノ法益中最モ價值アルモノ、一ナル所以及ヒ各國刑法カ厚ク之ヲ保護スル所以ヲ了解スルコト敢テ難カラサル可シ。

我刑法ニ於テハ交通取引ニ於テ最モ重要ナル任務ヲ有スル物ノ偽造、變造又ハ偽造若クハ變造シタル物ヲ行使スルノ行爲ヲ罰シ以テ交通取引ニ於ケ

交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ニ對スル罪ノ分類

ル誠實及ヒ信用ヲ保護ス。即チ(一)交通取引ニ於ケル最モ重要ナル媒介物タル貨幣(二)交通取引ニ於ケル媒介若クハ證據タル可キ文書、證券、印章ノ偽造、變造又ハ偽造若クハ變造シタル文書、證券、印章ヲ行使スルノ行爲ヲ罰シ以テ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ヲ保護ス。

我刑法ノ認ムル交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ニ對スル罪ハ之ヲ分テ第一通貨偽造ノ罪、第二印章偽造ノ罪、第三文書偽造ノ罪、第四有價證券偽造ノ罪、第四ト爲スコトヲ得。

通貨偽造ノ罪ハ之ヲ分テ(一)内國通貨ノ偽造、變造ノ罪(刑一四八)(二)偽造、變造ノ内國通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ罪(刑一四八)(三)内國ニ流通スル外國ノ通貨ノ偽造、變造又ハ偽造若クハ變造シタル内國ニ流通スル外國ノ通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ罪(刑一四九)(四)偽造、變造ノ通貨收得ノ罪(刑一五〇)(五)通貨ノ偽造、變造又ハ偽造ノ行使、交付若クハ輸入ノ未遂罪(刑一五一)(六)收得後偽貨ノ知情行使若クハ知情交付ノ罪(刑一五二)(七)通貨ノ偽造、變造準備ノ罪(刑一五三)ノ七ト爲ス

コトヲ得。

印章偽造ノ罪ハ之ヲ分テ(一)御璽、國璽、御名偽造ノ罪(刑一六)、(二)公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名偽造ノ罪(刑一六)、(三)公務所ノ記號偽造ノ罪(刑一六)、(四)私印、私署偽造ノ罪(刑一六)、(五)偽造ノ印章署名記號ノ使用又ハ印章署名記號ノ不正使用ノ未遂罪(刑一六)ノ五ト爲スコトヲ得。而シテ更ニ分テ御璽、國璽、御名偽造ノ罪ハ(甲)御璽、國璽、御名ノ偽造、(乙)偽造シタル御璽、國璽、御名ノ使用、(丙)御璽、國璽、御名ノ不正使用ノ三ニ、公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名偽造ノ罪ハ(甲)公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ノ偽造、(乙)偽造シタル公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ノ使用、(丙)公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ノ不正使用ノ三ニ、公務所ノ記號偽造ノ罪ハ(甲)公務所ノ記號ノ偽造、(乙)偽造シタル公務所ノ記號ノ使用、(丙)公務所ノ記號ノ不正使用ノ三ニ、私印、私署ノ偽造ハ(甲)私人ノ印章又ハ署名ノ偽造、(乙)偽造シタル私人ノ印章又ハ署名ノ使用、(丙)私人ノ印章又ハ署名ノ不正使用ノ三ニ各之ヲ區別スルコトヲ得可シ。

文書偽造ノ罪ハ之ヲ分テ(一)詔書其他天皇ノ文書偽造罪(刑一五八條)、(二)公文書偽造ノ罪、(三)公務員其職務ヲ濫用シ公文書ヲ作製シ又ハ之ヲ變造スル罪、(四)公務員ヲシテ公文書ニ不實ノ記載ヲ爲サシムル罪、(五)私文書偽造ノ罪、(六)診斷書、檢案書若クハ死亡證書ヲ偽作スル罪(刑一六〇條)ノ六ト爲スコトヲ得可シ。而シテ更ニ分テ公文書偽造ノ罪ハ(甲)印章又ハ署名アル公文書偽造ノ罪(刑一五八條)、(乙)印章又ハ署名ナキ公文書偽造ノ罪(刑一五八條)、(三)ノ二ニ、公務員其職務ヲ濫用シ公文書ヲ作製シ又ハ之ヲ變造スル罪ハ(甲)公務員カ印章又ハ署名アル其職務ニ關スル文書ヲ偽作シ若クハ變造スル罪(刑一五八條)、(乙)公務員カ印章又ハ署名ナキ其職務ニ關スル文書ヲ偽作若クハ變造スル罪(刑一五八條)ノ二ニ、公務員ヲシテ公文書ニ不實ノ記載ヲ爲サシムル罪ハ(甲)權利義務ニ關スル公正證書ノ原本ニ不實ノ記載ヲ爲サシムル罪(刑一五七條)、(乙)免狀、鑑札又ハ旅券ニ不實ノ記載ヲ爲サシムル罪ノ二ニ、私文書偽造ノ罪ハ(甲)印章又ハ署名アル私文書偽造ノ罪(刑一五九條)、(乙)印章又ハ署名ナキ私文書偽造ノ罪(刑一九

六條三項一ノ二ニ各之ヲ區別スルコトヲ得可シ。

有價證券偽造ノ罪ハ之ヲ分テ(一)有價證券ヲ偽造、變造シ又ハ之ニ虛偽ノ記入ヲ爲ス罪(刑一六)(二)偽造ノ有價證券ヲ行使、交付若クハ輸入スル罪(刑一六)ノ二ト爲スコトヲ得。以上ノ分類ヲ圖示スレハ左ノ如シ。

第一、通貨偽造ノ罪

- (一) 内國通貨ノ偽造、變造ノ罪(刑、一四八條二項)
- (二) 内國ニ流通スル外國通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ罪(刑、一四八條二項)
- (三) 外國通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ罪(刑、一四九條)
- (四) 偽造ノ通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ罪(刑、一五〇條)
- (五) 偽造ノ通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ未遂罪(刑、一五一條)
- (六) 取得後偽造ノ通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ罪(刑、一五二條)
- (七) 通貨ノ偽造、變造準備ノ罪(刑、一五三條)

第二、印章偽造ノ罪

- (一) 御璽、國璽、御名偽造ノ罪(刑、一六四條)
- (二) 公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名偽造ノ罪(刑、一六五條)
- (三) 公務所ノ記號偽造ノ罪(刑、一六六條)
- (四) 私印、私署偽造ノ罪(刑、一六七條)
- (五) 偽造ノ印章、署名、記號ノ使用又ハ印章、署名、記號ノ不正使用ノ未遂罪(刑、一六八條)

交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ニ對スル罪

第三、文書偽造ノ罪

- (一) 詔書其他天皇ノ文書偽造ノ罪(刑、一五四、一五八條)
- (二) 公文書偽造ノ罪
 - (甲) 印章又ハ署名アル公文書偽造ノ罪(刑、一五五條一、二項一五八條)
 - (乙) 印章又ハ署名ナキ公文書偽造ノ罪(刑、一五五條三項一五八條)
 - (丙) 公務員印章又ハ署名アル其職務ニ關スル文書ノ偽作若クハ變造ノ罪(刑、一五六、一五八條)
 - (丁) 公務員印章又ハ署名ナキ其職務ニ關スル文書ノ偽作若クハ變造ノ罪(刑、一五六、一五八條)
 - (戊) 公務員ニ關スル公正證書ノ原本ニ不實ノ記載ヲ爲サシムル罪(刑、一五七條一項一五八條)
 - (己) 免狀、罷札又ハ旅券ニ不實ノ記載ヲ爲サシムル罪(刑、一五七條二項一五八條)
 - (庚) 印章又ハ署名アル私文書偽造ノ罪(刑、一五九條一、二項一六一條)
 - (辛) 印章又ハ署名ナキ私文書偽造ノ罪(刑、一五九條三項一六一條)
- (三) 公務員ニ關スル公正證書ノ原本ニ不實ノ記載ヲ爲サシムル罪(刑、一五七條一項一五八條)
- (四) 公務員ニ關スル公正證書ノ原本ニ不實ノ記載ヲ爲サシムル罪(刑、一五七條一項一五八條)
- (五) 私文書偽造ノ罪
- (六) 診斷書、檢案書又ハ死亡證書偽作ノ罪(刑、一六〇、一六一條)

第四、有價證券偽造ノ罪

- (一) 有價證券ヲ偽造、變造シ又ハ之ニ虛偽ノ記入ヲ爲ス罪(刑、一六二條)
- (二) 偽造ノ有價證券ヲ行使、交付若クハ輸入スル罪(刑、一六三條)

第二章 通貨偽造ノ罪

第一節 通貨偽造罪ノ觀念

通貨偽造ト言ヘハ一見明白ナルカ如クニシテ其實際ニ於テハ斯ノ如ク簡單ナルモノニ非スシテ諸種ノ難問ヲ包含ス。故ニ通貨偽造ノ各罪ニ對スル説明ニ入ルニ先チ第一通貨ノ意義第二通貨偽造ニ關スル行爲第三通貨偽造罪ノ法益ニ關シ大體ノ觀念ヲ説明スルノ必要アリ。

第一 通貨ノ意義

通貨ニハ廣狹ノ二義アリ。狹義ニ於ケル通貨トハ金錢トシテ強制通用ノ效力ヲ有スル貨幣、紙幣、銀行券ヲ指稱ス。故ニ此意義ニ於ケル通貨トハ獨リ我國法ニ於テ通貨ナリト認メタル貨幣、紙幣、銀行券即チ法律上強制通用ノ效力ヲ有スル通貨ノミヲ指稱スルモノニシテ假令事實上金錢トシテ流通セラ
ル、ニモセヨ強制通用ノ效力ナキ外國貨幣ノ如キハ之ヲ包含セス(民四〇條兌換銀

通貨ノ意

例四條條)。之ニ反シテ廣義ニ於ケル通貨トハ獨リ法律上金錢トシテ強制通用ノ效力アル内國ノ通貨ノミナラス事實上金錢トシテ流通スル外國ノ貨幣、紙幣、銀行券並ニ内國ニ於テ流通セス獨リ外國ニ於テノミ流通スル貨幣、紙幣、銀行券ヲモ包含スルモノトス。

人文ノ進歩發達ト共ニ交通取引ノ發展擴大ヲ來シ世界各國ノ人ハ相往來スルコト、ナリ民事及ヒ商事ノ取引ハ世界各國人ノ間ニ締結セラル、ニ至レリ。是ニ於テカ昔時内國ノ通貨ノミヲ以テ通貨ナリト思料シタル思想ハ漸次打破セラレテ各國人間ニ通貨ナリトシテ流通セラル、モノハ悉ク之ヲ通貨ナリトスルノ思潮ハ先ツ開港場若クハ都市ニ起リ漸次全國ニ及ハントスルニ至レリ。而シテ法律モ亦獨リ狹義ノ通貨ヲ以テ通貨ナリト認メ之ヲ保護スルニ止ラス廣義ノ通貨ヲモ之ヲ通貨偽造罪ノ客體ナリト認メ之ヲ保護スルニ至レリ。其中刑法ノ規定ヲ以テ保護スル通貨ハ(一)強制通用ノ效力アル内國ノ貨幣、紙幣、銀行券及ヒ(二)内國ニ流通スル外國ノ貨幣、紙幣、銀行券

二者ニシテ外國ノミニ流通スル貨幣、紙幣、銀行券等ノ保護ハ之ヲ特別法ニ讓
レリ(明治三八年法律第六六號外國ニ於テ流通スル貨幣、紙幣、銀行券、証券偽造、變造及ヒ模造ニ關スル制)。

近時ノ交通取引ハ世界的ナリ。從テ交通取引ノ主要ナル媒介物タル通貨
ノ信用ノ保護ハ世界的ナラサル可カラサルハ近時ノ法制ノ通例トスル所ナ
リ。左レハ通貨ノ交通取引ニ於テ獨リ真正ナル通貨ノミカ流通セラル、コ
トハ獨リ一國ノ一社會ニ於ケル法益ナルノミナラス廣ク各國ノ各社會ヲ通
スル共同ノ法益タルニ至レリ。左レハ通貨ノ偽造罪ニ依リ保護スル法益ハ
之ヲ萬國的法益(Internationales Rechtsgut)ト稱ス。近世ノ立法例多クハ内外貨
ヲ問ハス等シク之ヲ保護スルノ主義ヲ採用ス(註一)。

(註一) 獨逸刑法草案第四條第二號、第五百九條、獨逸刑法第四條、第四百六條、那威刑法第一七四、一七五條、
瑞西刑法草案第四百十二條以下、和蘭刑法第二百八條以下。

上述スル所ニ依リ明カナル如ク通貨ノ意義ハ之ヲ狹義ニ解センヨリ之ヲ
廣義ニ解ス可キモノトス。之ヲ民法上ヨリ謂フトキハ獨リ強制通用ノ效力

刑法上ノ
通貨

アル通貨ノミヲ以テ通貨ト指稱ス可キモノナレトモ之ヲ刑法上ヨリ謂フト
キハ内國ノ通貨ナルト外國ノ通貨ナルトヲ問ハス等シク之ヲ通貨ナリト解
ス可キモノトス。故ニ刑法上通貨ノ定義ヲ與フレハ左ノ如シ。

刑法上ノ通貨トハ國際法上ノ國家若クハ之ニ依リ認許セラレタル者ニ
依リ認證セラレタル價格ノ明記アリテ支拂ノ手段ニ供セラル、物ヲ謂
フ。

價格ノ明記アルコトヲ要スルカ故ニ假令一定ノ物カ價格ヲ有シ支拂ノ手
段トシテ使用セラル、モ之ニ一定ノ權力者ノ認證シタル價格ノ明記ナキト
キハ之ヲ通貨ト謂フ能ハス。故ニ金塊、銀塊若クハ古昔行ハレタル寶石、貝殼
象牙等ハ假令價格ヲ表ス物トシテ交通取引ノ媒介物タルコトヲ得ルモノト
スルモ之ヲ以テ通貨ト謂フ能ハス。又國際法上ノ國家又ハ之ニ依リ認許サ
レタル者ニ依リ認證セラレタル物タルコトヲ要スルカ故ニ國際法ノ承認ヲ
受ケサル團體例ヘハ會長等ニ依リ認證セラレタル通貨ハ之ヲ法律上保護ス

可キ通貨ト解スル能ハス。又例ヘハ一銀行カ國際法上ノ國家ヨリ之ヲ通貨トシテ流通セシムルコトヲ得可キ認證ヲ受ケスシテ發行シタル無記名債券ノ如キハ之ヲ通貨ト謂フ能ハサルモノトス。既ニ國家ニ依リ認メラレタル通貨タル以上ハ事實上流通力ナキニ至ルモ尙ホ通貨タルヲ妨ケス。例ヘハ破産ニ瀕シタル邦國ノ紙幣カ事實上流通力ナキニ至リタルモ之ヲ偽造スルトキハ通貨偽造ノ罪ヲ構成スルカ如シ。之ニ反シテ國家カ通貨タルノ認證ヲ取消シタルトキ例ヘハ通用ヲ廢止シタル場合ニ於テハ最早之ヲ通貨ト稱スル能ハサルモノトス(註二)。

(註二) 通貨ノ意義如何ニ關シ諸說區々ニシテ一定セス。左ニビンチング、フランク及ヒフオシリストノ三氏ノ說明ヲ摘示シ參照ニ便ナラシム。

ビンチング氏曰ク『外國通貨ハ國法學上及ヒ私法上通貨ニ非ス。然レトモ刑法上ニ於テハ外國通貨モ亦通貨ナラン。刑法上ニ於テモ外國通貨ノ流通ヲ禁セラレタル場合ニ於テハ通貨ニ非ス。通貨ナリヤ否ヤハ區別ス可キ境界ハ一定ノ物カ有效ナル支拂方法トシテ國家カ認證ヲ與ヘタルヲ否ヤニ在リ。而シテ一般ニ銘價ノ如キ似アルモノトシテ受取ルノ義務アルヲ通例トス可シト雖モ必スシモ之ヲ必要トスルモノニ非ス』(Binding, II, 311)ト。フランク氏曰

ク『刑法上ノ意義ニ於ケル貨幣ノ概念ハ一定ノ承認セラレタル權力者ニ依リ明カニ認證セラレタル價格ノ標準ナリ』(Frank, Vorb. zu s. Abschnitt)ト。フオシリスト氏曰ク『通貨(金錢)トハ國家ニ依リ價格ノ標準及ヒ價格ヲ有スル物(Wermesser und Wertiger)トシテ認メラレタル支拂手段ナリ』(V. Liszk, § 159, III)ト。然レトモ此定義ハ内國ノ通貨ニ對スル定義トシテハ兎モ角一般ニ通貨ノ定義トシテ完全ナラス。尙ホ本邦學者ノ貨幣ノ定義トシテ與フル所ヲ見ルニ

勝本氏曰ク『貨幣トハ價格交換ノ用ニ供センカ爲メ法律ノ特ニ制定シタル物件ナリ』(刑法概論上卷三六四頁)ト。岡田氏曰ク『貨幣トハ交換ノ手段トシテ國家ノ認ムル物件ナリ』(刑法講義九一頁)ト。小野氏曰ク『貨幣トハ價格ノ度量ニシテ而カモ價格ヲ有シ國家カ認メテ以テ交換ノ手段ニ供スル所ノ物件ヲ總稱ス』(日本刑法論各論二四八、二四九頁)ト。泉二氏曰ク『貨幣トハ價格ノ標準ニシテ國家ノ公認ニ依リ一般取引上ニ於ケル交換手段トシテ通用ス可キモノヲ謂フ』(日本刑法論六六一頁)ト。谷野氏曰ク『貨幣トハ當時ノ有權者カ其物自體ニ於テ價格ノ標準タルコトヲ證明シタル物ヲ謂フ』(刑法各論講義二六四頁)ト。

第二 通貨偽造ニ關スル所爲

茲ニ所謂通貨偽造トハ獨リ通貨ヲ偽造スル行爲ノミナラス其變造、模造又ハ偽造、變造若クハ模造シタル通貨ノ行使、交付、輸入及ヒ偽造、變造ノ豫備ノ所爲ヲモ包含スルモノトス。其中通貨ノ模造及ヒ模造通貨ノ行使、交付、輸入ハ

通貨偽造ニ關スル所爲

特別法之ヲ規定シ(明治二八年法律、通貨及ヒ證券模造取締法、明治三八年法律、外國ニ於テ流通スル貨幣、紙幣、銀行券、偽造、變造)其他ハ刑法之ヲ規定ス。

第三 通貨偽造罪ノ法益

通貨偽造罪ヲ制定シ以テ保護セントスル利益ハ通貨ノ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用即チ通貨ノ交通取引ノ安全ニ在リ。而シテ通貨ノ交通取引ハ之ヲ一國ノ一社會ニ限定ス可キモノニ非スシテ各國ニ通シ各社會ニ涉リ等シク享有スル利益ナレハ之ヲ萬國的法益ト稱ス可キコト既ニ之ヲ述ヘタル如シ。從テ通貨偽造罪ノ法益ヲ以テ國家ノ造幣權ニ在リト謂フカ如キハ探ルニ足ラス(註三)。若シ此法益ヲ以テ國家ノ造幣權ニ在リト謂ハ、外國政府若クハ外國政府ノ認許シタル銀行カ製造發行シタル貨幣、紙幣、銀行券ヲ保護スルノ所以ヲ説明スル能ハサル可シ。又通貨偽造罪ハ偽貨ノ行使若クハ其着手タル行爲ナキモ通貨ノ偽造、變造又ハ偽貨ノ交付、輸入若クハ收得等ノ行爲ノ如ク個人ノ財産上ノ利益ニ何等關係ナキ行爲ト雖モ犯罪ヲ構成スルカ

通貨偽造
罪ノ法益

故ニ此罪ノ法益ヲ以テ個人ノ財産上ノ利益ナリト謂フカ如キハ相當ナラス。

(註三) (一) 同註 フォン・ビルクマイヤー、ヘルシナー、ベルチル等諸氏(V. Birkeneyer, S. 1186; Hilscher, II, S. 572; Berner, S. 420.)

(二) 異説 フォン・リスト氏曰ク「通貨偽造罪ニ依リ侵害セラル可キ物體ハ所謂公ノ信用ナル法益ニ非ス。又法律上重要ナル事實ニ關スル一定ノ證明方式ニ對スル信用ニ非ス(メルケル)。何トナレハ立法者カ刑罰ヲ定メタルハ通貨ノ標識ノ不可侵ヲ保護センカ爲メニ非スシテ寧ロ通貨ノ標識ヲ侵害スルニ依リ他ノ法益即チ一個人ノ財産上ノ利益、法律上ノ取引ニ對スル公共ノ利益竝ニ國家ノ貨幣大權ニ侵害ヲ加フルモノアルニ基ク」(V. Liszt, S. 159 II.)。尙ホメルケル氏カ通貨偽造罪ニ依リ侵害セラル可キ物體ハ法律上重要ナル事實ニ關スル一定ノ證明方式ニ對スル信用ナリトノ説ニ賛成スルモノナキニ非ス。

此點ニ關スル我邦ノ學者ノ説ハ左ノ如ク被ル。

(一) 同題旨 江木、泉二諸氏。同題旨ニ近シ 勝本氏。

江木氏曰ク「貨幣ヲ偽造スル罪ハ往々之ヲ政府ノ造幣權ヲ害スルモノト爲シ之ヲ國家ニ對スル犯罪中ニ列スルノ學者ナキニ非ス。然レトモ是レ單ニ外形上ヨリ此犯罪ヲ觀察シタルモノニシテ法律ニ反スル犯罪ヲ以テ悉ク之ヲ國家ニ對スルモノトスルノ偏見ト伯仲ス。現ニ外國ノ貨幣ニシテ内國ニ其流通ヲ許シタル金銀貨ヲ偽造スルモ尙ホ偽造罪ヲ構成スルノ一事ヲ以テ推論スルモ實際上ニ於テハ公ノ信用(Publica Fides)ヲ害スル罪トセサル可カラサルヲ知ル可シ」(現行刑法原論一、二二頁)ト。泉二氏曰ク「通貨ハ國家若クハ國家ノ承認ヲ得タル者ニ於テ之ヲ發行スルノ權利ヲ有ス。從テ通貨偽造ノ罪ハ此發行權ヲ侵害スルノ結果ヲ有スト雖モ引續キ發行權ヲ有セサル通貨モ亦本罪ノ目

第二章 通貨偽造ノ罪 第一節 通貨偽造罪ノ概念

的ナルコトヲ得ルカ故ニ本罪ノ本質ハ寧ロ通貨ノ一般取引上ニ於ケル信用(Contiance publique)ヲ損シ一般取引ノ安全ヲ害スル點ニアルモノト爲ス可シ(日本刑法論六六三頁)ト。勝本氏曰ク『貨幣ヲ偽造シ變造スル罪ハ如何ナル性質ヲ有スルヤト謂フニ余輩ノ見ル所ニ依レハ貨幣ヲ偽造、變造スル所爲ハ之ヲ其犯人ニ於テ財物詐取ノ目的アルト同時ニ(假令其物件ハ幾人ノ手ニ轉讓スルモ)常に終局ノ受取者即チ財產ヲ與ヘテ之ヲ收受スルト同時ニ眞貨ニ非サルコトヲ發見シタル者ヲ害スル所爲タルノ點ヨリ觀察スルトキハ純乎タル詐欺取財ニ過キスト雖モ眼ヲ轉シテ其所謂詐欺取財ノ行爲ハ性質上公ノ信用ニ依テ流通セラル可キ貨幣ノ上ニ行ハレタルモノニシテ畢竟其受取者力貨幣ノ上ニ匿キタル公ノ信用ヲ誤ラシメタル結果遂ニ一般社會公衆ヲシテ貨幣ノ眞偽ヲ疑ハシムルノ結果ヲ生スルモノタル點ヨリ觀察スルトキハ公ノ信用ヲ害スル所爲タリト謂ハサル可カラス』(刑法新義上卷三六〇、三六一頁)ト。

(二) 異說 本罪ノ法益ヲ以テ政府ノ獨占權即チ通貨製造發行ノ特權ナリト爲ス。岡田、牧野兩氏。

岡田氏曰ク『貨幣偽造罪ノ實質ニ付テハ古昔ハ貨幣ノ鑄造權ヲ以テ其國主權ノ一部ナリト信シタル結果トシテ主權ニ對スル犯罪ナリト認メタル時代アリト雖モ現今ノ學說ニ於テハ一國ノ經濟上ノ理由ニ因リ貨幣ノ鑄造權ヲ以テ政府ノ獨占權ト爲シタルニ過キスシテ例ヘハ鐵道ヲ國有ニ限ルト爲シ又ハ標章、鹽等ノ賣買ヲ政府ニ獨占セシムルト全ク同性質ノモノニシテ主權ノ實體ト無關係ナリトノ意見通説ト爲レリ。故ニ今日ノ思想ヨリ之ヲ言ヘハ政府ノ獨占權ヲ侵犯スルヲ以テ本罪ノ實質ト認メサル可カラス』(刑法講義九七、七八頁)ト。牧野氏曰ク『偽造トハ通貨製造發行ノ特權ヲ害スルノ謂ナリ。貨幣ニ就テハ眞貨ヲ偽ハルノ謂ナリトスルノ說アルモ余輩ハ探ラス』(刑法通義二五五頁)ト。

(三) 一種ノ異說 小崎氏曰ク『法律力貨幣ニ關スル罪ヲ認メテ保護スル所ノ利益ハ單ニ個人ノ財產上ノ利益ニ止

ラス法律的通用ニ於テ貨幣ニ對スル公衆ノ信譽殊ニ製造發行ニ關スル國家ノ特權ヲ保護スルニ在リトス』(日本刑法論各論二四七、二四八頁)ト。

第二節 內國通貨ノ偽造、變造ノ罪

第四百四十八條 行使ノ目的ヲ以テ通用ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ偽造又ハ變造シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス。

(偽造、變造ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ輸入シタル者亦同シ)

內國通用ノ貨幣、紙幣、銀行券ハ之ヲ行使スルノ目的ヲ以テ偽造若クハ變造スルノ行爲アルトキハ通貨ノ偽造若クハ變造ノ罪ヲ構成スルモノトス。左ニ之ヲ客體、所爲及ヒ故意ノ三ニ分テ説明スルヲ便トス。

第一 客體

本罪ノ客體ハ強制通用ノ效力ヲ有スル本邦ノ貨幣、紙幣若クハ銀行券タルコトヲ要ス。法文ニ所謂通用トハ強制通用ノ效力アルモノタルコトヲ示シタル意義ニシテ事實上ノ通用即チ流通ト同シカラス。通用ナル文字ハ貨幣

法第七條兌換銀行券條例第四條民法第四百二條ニ使用シタル通用ナル文字ト同シク強制通用ノ意義ニ解ス可キモノトス。又法文ニ貨幣、紙幣、銀行券トアルハ之ヲ第四百四十九條ノ法文ト對照シテ考フルトキハ本邦ノ貨幣、紙幣、銀行券タルコトヲ示シタルモノナルコト明カナリ。本邦ノ貨幣、紙幣、銀行券ニシテ法令ヲ以テ其通用ヲ廢止セラレタルトキハ最早強制通用ノ效力アルモノニ非サレハ本罪ノ客體タルコト能ハサルモノトス(註四)。

(註四) (一) 同趣旨 勝本、谷野、牧野、泉二諸氏。勝本氏刑法折衷上卷三七二頁、谷野氏刑法各論講義二六六頁、牧野氏刑法通義二五四頁、泉二氏日本刑法論六六二頁參照。

(二) 異說 岡田氏曰ク「交換期限中ノ通貨ハ其通用ノ範圍ヲ狭少セラレタルニ過キスシテ尙ホ納稅其他ニ對シ貨幣トシテ使用ヲ爲スコトヲ得ルナリ。故ニ余ハ之ヲ偽造ニ關シテハ多ク反對說アリト雖モ貨幣偽造罪ナリトノ說ヲ正當ナリト信ス」(刑法講義九五頁)ト。

貨幣

(一) 貨幣。本邦ノ貨幣ハ明治三十年法律第十六號貨幣法ノ定ムル所ナリ。

貨幣ノ製造及ヒ發行ノ權ハ政府ニ屬スルモノニシテ(貨幣法)貨幣ノ種類ハ金貨幣(二十四、十)、銀貨幣(五十、十、十)、白銅貨幣(五)、青銅貨幣(五、五)ノ四類九種ト爲

ス(貨幣法)。故ニ貨幣ハ硬貨ノミニ限ルモノトス。尙ホ從來發行ノ五錢銀貨幣及ヒ二錢青銅貨幣ハ從前ノ通り通用ス可キモノトス(貨幣法一)。

金貨幣ハ純金ノ量目二分ヲ以テ價格ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ス。故ニ十圓ハ純金ノ量目二匁ヲ有シ二十圓ハ四匁ヲ有ス。左レハ金貨幣ハ一面價格ヲ表スルト同時ニ他ノ一面ニ於テハ其表スルガ如キ銘價ト一致スル實價ヲ有スルモノナリ。金貨幣ハ其額ニ制限ナク法貨トシテ強制通用ノ效力ヲ有ス(貨幣法二)。之ニ反シテ銀貨幣、白銅貨幣及ヒ青銅貨幣ハ補助貨幣ニシテ銀貨幣ハ十圓マテ白銅貨幣、青銅貨幣ハ一圓マテ法貨トシテ強制通用ノ效力ヲ有ス。

紙幣

(二) 紙幣。紙幣ハ貨幣ノ代用トシテ發行セラル、モノナレトモ我邦ノ現在ニ於テハ強制通用ノ效力ヲ有スル紙幣存スルコトナシ。然レトモ將來紙幣存在スルニ至ラハ其紙幣ハ本罪ノ客體タルコトヲ得可キモノトス。

銀行券

(三) 銀行券。本邦ノ銀行券ハ特定ノ銀行カ法令ノ認許ニ依リ一定ノ條件ニ

從ヒ發行スル一種ノ無期限且ツ無記名ノ債券ニシテ所持人ハ之ニ基キ之ト引換ニ何時ニテモ法貨ヲ銀行ニ請求スルコトヲ得可キ權利アルモノトス。左レハ銀行券ハ約束手形ノ如キ性質ヲ有セス。故ニ支拂期日一覽拂若クハ定期後一覽拂等ノ規定ヲ適用スルニ由ナク又裏書ヲ以テ讓渡スルコトヲ得ス。銀行券ハ我領域内ニ於テ一般ニ租稅其他公私一切ノ取引ニ對シ強制通用ノ效力ヲ有スルモノアリ。日本銀行カ發行スル兌換銀行券ノ如キハ是ナリ(兌換銀行券)。又一定ノ地域ヲ限リ公私一切ノ取引ニ對シ強制通用ノ效力ヲ有スルモノアリ。橫濱正金銀行カ發行シタル銀行券カ關東洲及ヒ清國ニ於テ公私一切ノ取引ニ對シテ強制通用ノ效力ヲ有スルカ如キ是ナリ(明法三九年勅令第二七九號橫濱正金銀行ノ關東洲)。又特定ノ場所ニ於テ特定ノ事項ニ限リ通貨トシテ通用スルモノアリ。臺灣銀行ノ發行スル銀行券カ臺灣總督府ノ管轄區域内ニ於テ政府ノ收納ニ充ツルコトヲ得ルカ如キ是ナリ(臺灣銀行)。然レトモ橫濱正金銀行ノ發行スル銀

行券ハ獨リ關東洲並ニ清國ノミニ強制通用ノ效力ヲ有スルニ過キスシテ我邦土ニ於テ強制通用ノ效力ヲ有スルモノニ非サレハ外國ノ銀行券カ外國ニ於テ流通スル場合ト異ナル所ナシ。左レハ之ヲ法文ノ所謂内國通用ノ銀行券ト謂フ能ハス。從テ強制通用ノ效力アル本邦ノ銀行券偽造罪ノ客體タル能ハス。斯ル場合ニ於テハ外國ニ通用スル外國ノ銀行券ヲ我國ニ於テ偽造シタル場合ト同シク明治三十八年法律第六十六號(外國ニ於テ幣紙幣銀行券證券ノ偽造變造及ヒ模造ニ關スル制一條)ヲ以テ處斷スルノ外ナシ。又臺灣銀行ノ發行スル銀行券ハ本來租稅其他官署ニ對スル收納ノ目的タルコトヲ得ルモノ一般ニ強制通用ノ效力ナキモノナレハ本罪ノ客體タル能ハサルモノナレトモ明治三十八年法律第五十一號(臺灣銀行發行ノ銀行券)ニ依リ臺灣銀行發行ノ銀行券ノ偽造變造ハ刑法ノ通貨偽造ニ關スル規定ヲ準用ス可キモノナレハ本罪ノ客體タルヲ得可キモノトス。

第二一、所爲

所爲

通貨ノ偽造

偽貨ノ物
質カ眞貨
ト同一又
ハ優等ナ
ル場合

本罪ヲ構成ス可キ所爲ハ之ヲ分テ偽造及ヒ變造ノ二ト爲スコトヲ得。通貨ノ偽造及ヒ變造ハ之ヲ文書ノ偽造及ヒ變造ト比照シテ之ヲ説明スルヲ便トス。即チ通貨ノ偽造ハ之ヲ文書ノ偽造ニ比ス可ク通貨ノ變造ハ之ヲ文書ノ變造ニ比スルヲ得可シ。

(一) 通貨ノ偽造。通貨ノ偽造ハ文書ノ偽造ト同シク其作製セラレタル物ニシテ法定ノ發行者ニ依リ發行セラレタル眞貨ニ非サル偽貨ナリト謂ハサル可カラサルコト恰モ文書ニシテ署名者ノ承認ニ係ラサルトキハ之ヲ偽造文書ト稱ス可キト其意義ヲ同ウス。故ニ作製セラレタル物質ニシテ眞貨ト同等若クハ之ヨリ一層優等ナル實質ヲ有スル場合ト雖モ敢テ偽造タルヲ失ハス。而シテ學者或ハ偽貨ニシテ眞貨ト同等又ハ其以上ノ實價ヲ有スルトキハ之ヲ流通セシムルモ何等實害ヲ生スルコトナキカ故ニ之ヲ罰スルコトヲ得スト論スル者アレトモ眞貨ハ眞貨タルノ信用ヲ有シ且ツ強制通用ノ效力ヲ有スレトモ偽貨ハ假令其實質ニ於テ眞貨ニ優リタル價

値アリトスルモ眞貨タルノ信用ヲ有セス又強制通用ノ效力ヲ有セサルモノナレハ偽貨ヲ眞貨ナリト信シ受取リタル者ニ於テ必スシモ何等ノ損害ナシト謂フヲ得サレハ此說ノ正鵠ヲ失スルヤ論ヲ俟タス(註五)。

(註五) (一) 同感言ニ近シ 谷野、泉二諸氏。

谷野氏曰ク『模造トハ模倣シテ製作スルコトヲ謂フ。故ニ偽造シタル貨幣カ眞正ノ貨幣ニ比較シ同等又ハ優等ナル貨幣タルト劣等ナル貨幣タルトハ模造タルニ於テ何等ノ影響ナシ』(刑法各論講義二六七頁)ト。泉二氏曰ク『偽貨ノ實價カ眞貨ノ實價ニ同等若クハ優等ナルモ亦偽造タルヲ妨ケス。蓋シ通貨ノ信用ハ其發行者ノ信用如何ニ係ルモノニシテ其實價カ名價以下ニ存スル場合ト雖モ尙ホ通貨タルヲ妨ケサルニ反シ偽貨ノ存在スルコト其自身カ眞貨ノ信用ヲ害スレハナリ』(日本刑法論六六七頁)ト。

(二) 第一異說 斷定ニ於テハ本文ト同一ニ出ツルモ理由ヲ異ニス。江木、小崎、岡田、牧野諸氏。但シ江木氏ト小崎、岡田及ヒ牧野三氏トノ間ニ於テモ亦同シカラス。

江木氏曰ク『設令ヒ眞正ノ貨幣ヨリ尙ホ一層純正ナル金銀ヲ用フルモ之ヲ偽造トセサルヲ得ズ。何トナレハ貨幣ノ價値ハ聲價トノ符合ニ於テハ毫モ其害ヲ蒙ルコトナキモ該貨幣自身ハ決シテ政府ノ現ニ製造シタルモノニ非サレハナリ』(現行刑法原論二二四頁)ト。小崎氏曰ク『貨幣偽造ハ貨幣ノ製造發行ニ關スル國家ノ特權ヲ侵害スル行爲ナルカ故ニ其偽造貨幣ノ實價カ眞正ノ貨幣ニ比シテ優ルト同等ナルト將タ劣ルトハ敢テ問フ所ニ非ス』(日本刑法論各論二四九、二五〇頁)ト。岡田氏曰ク『貨幣偽造ハ政府ノ獨占權ヲ侵犯スルモノナルカ故ニ偽造貨幣カ眞貨ヨリモ其實價

ニ於テ劣レル場合ハ得テ俟タス。同等又ハ夫以上タリトモ罪ト爲ルヲ妨ケスト謂ハサル可カラス。(刑法講義九八頁)
ト。牧野氏曰ク『偽造トハ發行ノ特權ヲ害スルモノナルカ故ニ真正ノ貨幣ト同一又ハ以上ノ價格アル貨幣ヲ製造スルモ亦偽造ト爲ル』(刑法通義二五五頁)ト。

(三) 第二異說 擅ニ貨幣ヲ作製スルモ其材料ニシテ眞價ト同一ナルトキハ罪ト爲ラス。勝本氏

氏曰ク『假令ヒ眞價ト同一ナル價格アル材料ヲ有スル偽造貨幣ヲ製作スルモ、尙ホ政府ノ特權ヲ侵犯スルモノナリ。若クハ政府カ其鑄造ニ依テ得キ利益ヲ竊取スルモノナルカ故ニ貨幣偽造タルヲ失ハスト謂フカ如キハ、畢竟一方ニ於テ政府カ貨幣ノ鑄造ヲ其特權トシテ一私人ニ委テサル利益ヲ得ンカ爲メニ非スシテ、貨幣ノ鑄造ニ伴フ可キ詐偽ヲ防遏セントスルニ在ルト他ノ一方ニ於テ財物ヲ詐取スルト信用ヲ害スルトハ其間因果ノ關係アリテ離ル可カラサルモノタルヲ忘却シタルニ職由スルモノニシテ、余ハ斯ノ如キ所爲ハ財物ヲ詐取スルモノニ非ス、隨テ公ノ信用ヲ害スルノ結果ヲ生スルモノニ非サルカ故ニ公ノ信用ヲ害スル罪ノ下ニ規定セラレタル我現行法(舊)ノ規定ノ下ニ於テハ(格段ノ明文ナキ限り)、決シテ之ヲ罰スルコトヲ得サルモノト確信ス』(刑法新義上卷三六二、三六三頁)ト。

偽造ト模
別トノ區

通貨ハ一定ノ物質(例ハ金銀銅若クハ紙幣)ヨリ成立シ一定ノ形式(例ハ明治三
四)ヲ有ス。通貨ヲ偽造ストハ眞貨ノ同一外觀ト同一形式ヲ有スル偽貨
ヲ作製スルヲ謂フ。故ニ偽貨ハ眞貨ニ類似ス可キ筈ナリ。然ルニ眞貨ノ

外觀ニ模擬シタルモ其形式ニ模擬セサルカ又ハ大體ニ於テ眞貨ノ外觀形
式ニ模擬シタルモ其模擬ノ程度粗雜ナル場合ニ於テハ之ヲ偽造ト謂フ能
ハスシテ模造ト稱ス可キモノナリ。通貨ヲ模造スルノ行爲ハ本罪ヲ構成
ス可キ所爲ニ非スシテ明治二十八年法律第二十八號(通貨及ヒ證券)ニ依リ
處斷ス可キモノトス。是ニ於テ模造ト偽造トノ區別ヲ爲スコト最モ必要
ナリトス。偽造ト模造トノ區別ハ其模擬ノ程度ニシテ偽貨ト眞貨トノ區
別ハ金錢取引ニ常用セラル、注意ヲ用ヒタル場合ニ限り之ヲ發見シ得ル
カ如キ程度ニ達シタルトキハ之ヲ通貨ノ偽造ナリト謂フヲ得ク之ニ反
シテ模擬ノ程度粗雜ニシテ何人モ一見眞貨ニ非サルコトヲ認ム可キカ如
キ場合ニ於テハ之ヲ通貨ノ模造ナリト解ス可キナリ(註六)。

(註六) 同說 獨逸帝國裁判所判例及ヒフランク氏(De. 6. 149. Frank, zu § 146)。

同說ニ近シ。江木、岡田、小崎、谷野、牧野諸氏。

江木氏曰ク『其模造トハ如何ナル點ニ違スルヲ要スルカ。巧拙甚ダシク其度ヲ異スルモノアル可キヲ以テ豫メ萬端
ノ場合ヲ決定スルコト能ハスト雖モ真正ノ貨幣トシテ尋常一般ニ通用シ得キ程度ニ至ルヲ必要トスルハ今日學者

ノ定論ナリ」(現行刑法原論一二四、一二五頁)ト。岡田氏曰ク『偽造ニ係ル貨幣カ通貨ヲ模擬シ得タリト謂フ標準ニ付テハ貨幣ノ取扱ニ熟達シタル者ト又極メテ經驗熟ナキ者トナ比較スレハ實際ニ於テ非常ノ相違アリ。然レトモ刑法カ偽造及ヒ偽造貨幣ノ行使ヲ處罰スル精神ハ極メテ貨幣ノ取扱ニ熟達セル者又ハ其反對ニ極メテ之ニ熟達セサル者ヲ保護スル趣旨ニ出テスシテ普通ノ人ノ害ヲ受クルノ虞ヲ防カントスルニ在リ。故ニ此類似シタル程度ノ如キモ通常ノ注意ヲ基礎ト爲ス外ナシ』(刑法講義九八、九九頁)ト。小崎氏曰ク『真正貨幣ニ類似スルコトヲ要スル程度ニ付テハ確然之カ限界ヲ定ムルコト雖シト雖モ苟モ普通ノ取引ニ於テ用ヒラル、注意ヲ標準トシテ人ヲシテ真正貨幣ト誤信セシムルニ足ルモノタル以上ハ假令一時ノ誤信ニ假スルニ過キスト雖モ偽造貨幣タルニ於テ缺クル所ナキナリ』(日本刑法論各論二五〇、二五一頁)ト。谷野氏曰ク『余輩ハ偽造トハ眞貨ニ模倣シテ製作スルノミナラス又其眞價ニ類似スルコトヲ必要トシ其類似ハ一般世人ヲシテ眞貨ト錯誤セシムル程度ニ達スルコトヲ必要ナリト信ス』(刑法各論講義二六七、二六八頁)ト。牧野氏曰ク『偽造ニ必要ナル模擬ノ程度モ亦一般人ヲシテ眞貨ナリト思惟セシムルノ程度ノモノタルヲ以テ足ル』(刑法通義二五五頁)ト。

茲ニ疑問トス可キハ法定ノ眞貨ノ外觀ト形式トニ從ヒ偽貨ヲ作製スルモ之ニ該當スル眞貨ナキトキハ之ヲ通貨偽造ナリト謂フヲ得ルヤ否ヤニ在リ。例ヘハ現行法ニ從ヘハ一圓若クハ二十五錢ノ銀貨幣ハ存在スルコトナシ。然ルニ五十錢若クハ十錢銀貨幣ノ形式ニ從ヒ之ニ比例スル外觀

偽貨ニ該當スル眞貨ナキ場

ト容積ヲ有スル一圓若クハ二十五錢ノ銀貨幣ヲ偽造シタルトキハ之ヲ通貨ノ偽造ト謂フヲ得ルヤ否ヤニ在リ。通貨ノ偽造ノ場合ニ於テモ文書又ハ印章ノ偽造ノ場合ト同シク必スシモ模擬セラレ可キ眞物ト正確ニ適合スル場合ニ限り之ヲ偽造ナリト稱ス可キモノニ非スシテ其模擬ノ程度ニシテ人ヲシテ一見眞物ナリト信セシムル虞アル場合ニ於テハ之ヲ偽造ナリト稱スルニ於テ何等ノ支障アル可キ筈ナシ。故ニ前例示ノ場合ニ於テ形式、外觀及ヒ容積ニ於テ人ヲシテ眞正ノ一圓銀貨幣若クハ二十五錢ノ銀貨幣ナリト信セシム可キ程度ノ偽貨ヲ作製スルノ行爲ハ之ヲ貨幣偽造ナリト解ス可キナリ。若シ夫レ假ニ反對論者ノ說ニ從ヒ此場合ハ通貨ノ偽造ニ非スト謂ハンカ之ト同一理ニ依リ通貨ノ模造ニ非スト謂ハサルヲ得ス。從テ斯ノ如キ所爲ハ之ヲ不問ニ付セサルヲ得サル可シ。而シテ通貨ノ形式、外觀、容積ハ一般ニ人ノ知ル所ナル可シト雖モ我現行ノ貨幣カ四類九種ナルコト、日本銀行ノ兌換銀行券カ七種ナルコト其他臺灣銀行及ヒ橫

濱正金銀行ノ銀行券ノ種類等ハ専門家ニ非サル者ニシテ之ヲ正確ニ知了スル者少カル可シ。左レハ通貨ノ形式外觀容積ヲ精密ニ模擬シテ偽貨ヲ作製スルモ之ニ符合スル銘價ヲ有スル眞貨ニシテ現存セサルトキハ其所爲ハ罪ト爲ラスト決セラル、曉ニハ其弊甚々大ナルモノアルヲ想像スルヲ得可シ。之ヲ要スルニ偽造ノ一般的法理ヨリスルモ又處罰ノ必要ヨリスルモ反對論者ノ見解ハ之ヲ相當ナリト謂フ能ハス(註七)。

(註七) 此説ハ獨逸ニ於ケル通説ニシテフォンリスト、ビンギンゲン諸氏之ヲ主張ス。(V. Liszt, § 159, Bindung, Lehrb. II, 315.)之ニ反對スルハアルフェルト、マイヤー、ゲラント諸氏ナリ(Allfeld-Meyer, 615; Gerland, GS, 59, 145.)我邦ノ學者ノ所説ハ左ノ如ク峻ル。

(一) 同聲言 勝本、小崎、牧野諸氏。

勝本氏曰ク「偽造ニ付キ事實存在シタル貨幣ヲ模擬スルニ非スルハ偽造ト謂フヲ得サルヤ。此問題ハ偽造ハ如何ナルコトヲ模擬セハ偽造タル可キヤニ歸シ凡ソ貨幣ハ豫メ其形狀ヲ公示セラル可キカ故ニ官印ノ偽造ト區別セサル可カラサルカ如キモ他ノ貨幣ト酷肖シ銀行者又ハ當該官吏等ニ非スルハ知ルヲ得サル場合等ニ於テハ官印偽造ノ場合ニ於テ實際存在セサル官印ヲ製造スルモ偽造トセサル可カラサルニ依リテ之ヲ觀レハ本問モ亦之ヲ極權ニ解スルヲ以テ至當トス可キカ如シ」(刑法各論講義二二二頁)ト。小崎氏曰ク「貨幣偽造ハ眞貨カ實在セサルニ拘ハラズ實在スル

カ如ク作製シタルトキニ於テモ成立シ得可シ」(日本刑法論各論二五〇頁)ト。牧野氏曰ク「通貨偽造ハ實際ニ存在スル通貨ノ偽造ナルコトヲ要スルヤ否ヤニ關シテ議論アリ。余輩ハ之ヲ要セスト解ス。即チ一般人チシテ實際ニ存在スルモノナル可シト思惟セシムル程度ノモノナルヲ以テ足ルナリ」(刑法通義二五五頁)ト。

(二) 異說 岡田、谷野、泉二諸氏。

岡田氏曰ク「其現ニ存スル通貨ノ外觀ヲ有スルコトヲ必要トスルカ又ハ單ニ人チシテ通貨ト信セシムルニ足ル外觀アルヲ要スルニ止マルカ議論ノ峻ル所ナリト雖モ余ハ通貨ヲ偽造シタル者ト謂ヘル法文ノ解釋トシテ其模擬セラレタル標本ハ必スヤ法令ノ認ムル通貨ナラサル可カラスト解スルモノナリ」(刑法講義九五、九七頁)ト。谷野氏曰ク「貨幣偽造トハ眞貨ノ模造ヲ謂フ。故ニ必ス眞貨ヲ模範ト爲シ眞貨ニ模倣シテ作成シタルコトヲ必要トス」(刑法各論講義二六七頁)ト。泉二氏曰ク「抑モ偽造ノ一般的概念ヨリ論スレハ必スシモ模擬セラル可キ眞物ノ存在ヲ要件トスルモノニ非スシテ人チシテ眞物ナリト誤信セシムルニ足ル可キ程度ノモノタルヲ以テ足ルト雖モ通貨ノ如ク樂村僻地タルト繁華ノ都會タルトナ間ハ老幼貴賤ノ別ナク一般世人ノ間ニ流通スルモノハ其品質及ヒ形式等ニ於テ眞貨ニ類似スルニ非サレハ普通一般人チ欺クニ足ル可キ程度ヲ有スルモノト認ムルヲ得サルノミナラス(明治二八年法律第二八號通貨及ヒ證券取締法參照)實際ノ眞貨ニ模擬セサル物ハ假令特定ノ人チ欺クノ手段ニ供セラレタリトスルモ實在ノ眞貨ニ對スル公ノ信用ヲ害ス可キモノニ非サルカ故ニ通貨偽造罪ノ本質ヲ具備セサルモノト謂フ可シ」(日本刑法論六六六頁)ト。

然レトモ茲ニ注意ス可キハ偽造ト謂ヒ模造ト謂フハ其行爲終了ノ後ニ

偽造未遂
ト模造ト
ナ區別ス
可キ標準

於ケル成績如何ニ依リ判斷ス可キモノニ非スシテ行爲者ノ爲サントシタル行爲ニ依リ決ス可キモノトス。故ニ行爲者カ偽造セント欲シテ偽貨ヲ作製シタルモ技能拙劣ニシテ偽造タルノ程度ニ至ラシムル能ハサリシ場合即チ偽貨カ眞貨ニ類似スルノ程度甚タ少キ場合ニ於テハ通貨偽造ノ未遂罪ナリ。之ニ反シテ通貨ノ模造トハ行爲者カ最初ヨリ偽造ノ意思ナク通貨ヲ模造セントスルノ故意ヲ以テ眞貨ニ類スル物ヲ模造スル行爲ヲ謂フ。

通貨ノ變

(二)

通貨ノ變造。通貨ノ變造トハ文書ノ變造ト同シク既存ノ通貨ノ實價若クハ銘價ニ變更ヲ加ヘ同種ノ偽貨ヲ作製スルヲ謂フ。若シ變更ヲ加フルニ依リ同種ノ偽貨ヲ作製セスシテ別種ノ偽貨ヲ作製スルトキハ是レ既存ノ通貨ノ變造ニ非スシテ既存ノ通貨ヲ材料ニ使用シテ爲シタル通貨ノ偽造ナリ。恰モ私文書ノ内容ニ變更ヲ加ヘ以テ同種ノ私文書ヲ作製スルトキハ之ヲ文書ノ變造ト稱シ得可キモ若シ變更ヲ加フルニ依リ別種ノ私文

既存ノ實價ノ減少ニ依ル變造

書若クハ官文書ト爲ルトキハ是レ變造ニ非スシテ偽造ナルト例ヲ同ウス。而シテ通貨ノ變造ハ左ノ二ノ場合ニ區別シテ之ヲ説明スルコトヲ得可シ。

(甲)

既存ノ通貨ノ實價ヲ減少スルニ依ル變造。斯ノ如キ變造ハ貨幣ノミニ付キ適用ヲ見ル可キモノニシテ紙幣、銀行券ノ如ク元來實價アリト謂フ能ハサル物質ニ對シテハ此適用ヲ見ル能ハサルモノトス。貨幣ノ内部又ハ外部ノ幾部ヲ除去シ其實價ヲ減少シ以テ貨幣實價ニ變更ヲ加ヘ之ヲ變造前ノ貨幣トシテ通用セシメントスルカ如キハ既存ノ通貨ニ變更ヲ加ヘ偽貨ヲ變造シタルモノト謂フ可シ。斯ノ如キ變更ハ銘價ト實價ト符合スル本位貨幣タル金貨幣ニ對シ適用ヲ見ルノミナラス銘價ト符合セサル補助貨幣ニ對シテモ適用ヲ見ル可キナリ。

(乙)

既存ノ通貨ノ銘價ヲ變更スルニ依ル變造。斯ノ如キ變造ハ貨幣、紙幣、銀行券ニ付キ適用ヲ見ルヲ得可キナリ。故ニ十錢銀貨幣ヲ二十錢新銀貨幣ニ變造スルカ如キ又一圓紙幣ヲ十圓紙幣ニ變造スルカ如キ又十圓

既存ノ銘價ノ變更ニ依ル變造

兌換銀行券ヲ二十圓兌換銀行券ニ變造スルカ如キハ皆變造ナリト謂フ可シ。然レトモ今日ノ實際ニ就テ之ヲ見レハ本位貨幣(金貨)ニ就テハ此方法ニ依リ變更シ得可キ餘地ナク補助貨幣(銀貨、銅貨、白銅貨)ニ就テモ之ヲ變造シ得可キ場合甚タ少シ。殊ニ紙幣ノ如キハ現今通用ノ紙幣ノ存スルモノナケレハ現今變造シ得可キ紙幣アルコトナシ。又銀行券ニ於テモ現今存在スル物ニ就テ之ヲ見レハ是レ亦變造シ得可キ餘地ナシ。斯ノ如キ變造ノ餘地ナキ貨幣若クハ銀行券ノ銘價ニ變造ヲ加フルモ眞貨ト酷似スル偽貨ヲ作製スルコト能ハサレハ結局斯ノ如キ貨幣若クハ銀行券ハ之ヲ變造スル能ハサルニ歸ス。然レトモ之ヲ以テ貨幣、銀行券ハ之ヲ變造シ能ハサル如ク思考スルカ如キハ重大ナル誤謬ナリ。前述ノ如ク變造ノ餘地ナシト言ヒ又變造スル能ハストハ現今存在スル貨幣及ヒ銀行券ニ就テ言フヲ得ルノミ。法律ハ獨リ現今存在スル通貨ニ對シテ定メタルニ非スシテ將來存在スルコトアル可キ通貨ニ對シテモ適用ヲ

既存ノ基礎
トシテ別種
ノ貨幣ヲ
作製スル
ハ非スニ
非ス

見ル可キモノナレハ例ヘハ紙幣ハ現今存在セサルモ將來存在スルコトアル可キヲ以テ紙幣偽造ノ規定ヲ以テ空文ト看做ス能ハサルカ如ク將來變造ノ餘地アル貨幣、銀行券ヲ見ルコトナシト謂フ能ハサレハ貨幣、銀行券ノ變造ノ規定モ亦實際ニ適用スル場合ナシト論スル能ハス。且ツ通貨ノ變造ハ獨リ内國通用ノ貨幣、紙幣、銀行券ニ對シテ適用ヲ見ルノミナラス世界各國ノ貨幣、紙幣、銀行券ニ對シテ適用ヲ見ル可キモノナリ(二〇乃至二一五頁及ヒ二五乃至二五九頁參照)。而シテ何人モ世界各國ノ既存ノ貨幣、紙幣、銀行券中變造シ得可キモノナシト斷言スルヲ躊躇スルナル可シ。

之ニ反シテ既存ノ貨幣ヲ基礎トシ之ニ工作ヲ加ヘ別種ノ貨幣タルノ外概テ有セシムルノ行爲ハ貨幣ノ變造ニ非スシテ眞貨ヲ材料トシテ偽貨ヲ製造スルノ行爲即チ偽造ナリ。故ニ五厘銅貨幣ニ工作ヲ加ヘ二十錢銀貨幣ノ如キ形體ヲ有セシメ之ニ鍍銀シテ二十錢銀貨幣ヲ作製スルハ行爲ハ變造ニ非スシテ五厘銅貨幣ヲ材料トシテ二十錢銀貨幣ヲ偽造

シタルモノナリ(註八)。若シ之ヲ變造ナリトセンカ之ヲ銅貨幣ノ變造ト稱ス可キヤ又ハ銀貨幣ノ變造ト稱ス可キヤノ新ナル困難ナル疑問ヲ生ス。假ニ之ヲ銅貨幣ノ變造ナリト解センカ工作ヲ加フルニ依リ製造セラレタル偽貨ハ銅貨ニ相當スル銘價及ヒ銅貨タルノ外觀ヲ有セサルカ故ニ之ヲ銅貨幣ノ變造ナリト謂フカ如キハ不相當ノ感ナキ能ハス。又之ニ反シテ銀貨幣ノ變造ナリト謂ハンカ銅貨幣ニ變造ヲ加ヘ製出シタル偽貨即チ銅貨幣ヲ基礎トスル偽貨ヲ以テ銀貨幣ノ變造ナリト謂フカ如キハ不相當ノ感ナキ能ハス。

(註八) (一) 同趣旨 大審院判例、岡田、牧野諸氏。同趣旨三近シ 江木氏。

判例ニ曰ク『銅貨ヲ用ヒテ銀貨ヲ作製シ又ハ銀貨ヲ用ヒテ金貨ヲ作成シタル所爲ハ刑法第百八十二條(舊)ニ所謂内閣通用ノ金銀貨ヲ偽造シタルモノニ該當ス(三十九年大審院判決第七六八頁)ト。同主旨(二十八卷五卷八五頁、三十八年二三五頁)。岡田氏曰ク『貨幣ハ變造トハ真正ナル貨幣ノ上ニ實價又ハ銘價ノ變更ヲ加フルヲ謂フ。材料ノ真正ナル貨幣ノ上ニ採ルコトヲ要スルハ變造ノ特色ナリト雖モ變更ヲ加ヘテ成立シタル物件ハ又貨幣ノ外觀ヲ有シ且ツ其外觀ヲルヤ現ニ存スル某通貨ニ酷似スルコトヲ要スルハ偽造ノ場合ト致テ異ナル所ナシ。以上ノ說明ト現行貨幣制度(特

ニ金屬貨ニハ實價アルモ紙幣ニハ銘價アルニ過キサレ點)トチ斟酌シテ偽造、變造ニ關スル應用ヲ例示セハ(一)金屬貨幣ノ内部又ハ外部ノ幾部ヲ除去(Mutilated)シ其實價ヲ減スルハ變造ナリ。除去ノ部分多キニ失シ通貨ノ體ヲ失フトキハ變造ニ非ス破壊ナリ。(二)劣等金屬貨ニ鍍金銀ヲ施シタルニ止マルトキハ尙ホ他ノ某通貨ニ酷似スルニ至ラサルヲ以テ變造ニ非ス。他ノ通貨ニ酷似スルマテノ加工ヲ施ストキハ偽造ト爲ル場合ノミナル可シ。(三)紙幣ハ實價ナキガ故ニ銘價ノ變更ハ即チ變造タル可キモ現在スル紙幣ノ文字、紋章ノ相違ヲ比較スルトキハ實際銘價ノ變造ノミニ依リ他ノ通用紙幣ニ酷似スルニ至ル場合ナシ(刑法講義九九、一〇〇頁、法學協會雜誌二四卷四號四二九乃至四三四頁參照)ト。牧野氏曰ク『變造トハ眞貨ヲ基礎トシテ新貨ヲ製出スルヲ謂フナリ。但シ眞貨ノ原形即チ其特長ヲ破壞シテ新貨ヲ製出スルトキハ單ニ眞貨ノ實質ヲ材料ニ供シタルモノニ過キサレカ故ニ變造ニ非スシテ偽造ナリ。變造ノ最モ著クシテ且ツ最モ廣ク行ハル、モノハ貨幣ノ邊邊ヲ削リ其量僅ノ一部ヲ奪フ場合ナリ(刑法通義二五五、二五六頁)ト。江木氏曰ク『變造トハ真正ナル貨幣ノ價直ヲ害スル所爲ヲ謂フ。語ヲ換ヘテ之ヲ謂ハ、實價ト聲價トノ符合ヲ破ルモノナリ。設例ヘハ金銀貨ノ線ヲ削リ若クハ其一部ヲ切取リタルトキハ實價ヲ減少シテ聲價ト符合スルコトヲ妨ケ可シ。之ヲ變造ト謂フ。然レトモ紙幣ニ至リテハ其性質聲價アルモ實價ナキモノタルヲ以テ之ヲ偽造スルコトヲ得可キモ之ヲ變造スルコトヲ得ス。貳拾錢ノ紙幣ヲ改メテ五拾錢トスル者ハ五拾錢ノ偽造ナリ。又紙幣ハ其實價ナキヲ以テ其紙片ノ一部ヲ削リ取ルモ聲價ト符合ヲ破ルコトヲ得ス。故ニ紙幣ニ偽造アルモ變造ナカル可シ。(中略)然レトモ單ニ鍍金ヲ爲スニ止ラス仍ホ貨面ノ文字ヲ改メ或ハ其形狀ヲ變更スル等ノ事ヲ爲シ通常人ハ鍍金シタル銅貨ヲ金銀貨トシテ通用スル度ニ至ラシメタルトキハ是レ通貨ノ真正ヲ模擬スルモノニシテ貨幣偽造ナリ。決シテ變造ニ非サルナリ。語ヲ換ヘテ之ヲ言ハ、鍍金ノ所爲ハ往々偽造タルヲ得可キモ決シテ變造タルコ

トチ得サルナリ。(現行刑法原論二二五、二二六頁)ト。

(二) 異説 既存ノ眞貨ヲ基礎トシ之ニ工作ヲ加ヘ別種ノ貨幣タルノ外觀ヲ有セシムルノ行爲ハ變造ニシテ偽造ニ非ス。勝本、谷野、小崎、泉二諸氏。

勝本氏曰ク『之ヲ要スルニ貨幣ノ偽造トハ實質以外ノ物件若クハ一旦實質ノ原體(換言スレバ實質カ他物ヨリ區別セラル、要點例ヘハ方圓等ノ形狀ハ勿論其他記額及ヒ紋章等總テ一見實質ト認ムルコトヲ得可キ部分)ヲ失ヒタル物件ヲ材料トシテ新ニ實質ニ酷似シタルモノヲ製造スルヲ謂ヒ變造トハ貨幣ノ外觀ヲ存シテ之カ實質ヲ減殺シ以テ無垢ノ貨幣ト想像セシメ若クハ劣等ノ實質ニ鍍金、着色其他總テ詐欺ノ工作ヲ施シ以テ原貨幣ヨリモ高價ナル實質ノ外觀ヲ裝ハシムルモノ即チ眞正ノ實質ヲ利用シテ他ノ實質ヲ作り出シタルモノヲ謂フ』(刑法新義上卷三八七乃至三九七頁)ト。谷野氏曰ク『貨幣ノ變造トハ眞貨ヲ基礎トシテ他ノ眞貨ヲ模造スルコト又ハ眞正ノ鑄造貨幣ノ原質ヲ削減スルコトヲ謂フ。(中略)(一)眞貨ヲ基礎ト爲ス他ノ眞貨ノ模造。此種ノ變造ニ付テモ其模倣ハ一般世人チシテ眞貨ト錯誤セシムル程度ニ達スルコトヲ必要トス。故ニ貳錢銅貨ニ鍍金ヲ爲スト雖モ其名價ヲ變セサル行爲ハ余輩ノ所信ニ依レハ此種ノ變造ニ必要ナル類似ナキナリ。而シテ此種ノ變造ハ鑄造貨幣ニ付テ謂ヘハ拾錢銀貨ニ工作ヲ加ヘ名價ヲ變シ壹圓金貨ヲ模造スル行爲ヲ謂フ。然レトモ眞貨ヲ製作ノ基礎ト爲スコトハ此種ノ變造要件ナリ。故ニ事實上眞貨ヲ引用シテ製作スルモ眞貨ト謂フテ得サル程度ニマテ破壞セラレタル物ヲ利用シタルトキハ變造行爲ナリト謂フ能ハス。紙幣ニ付テ言ヘハ理論上眞正ノ紙幣ヲ基礎トシテ他ノ眞正ノ紙幣ヲ模造スル行爲ヲ謂フモ事實上想像スルコトヲ得ルハ單ニ名價ヲ變更スル行爲ノミナリ。(二)原質ヲ削除スルコト。此種類ノ變造ハ機械的又ハ化學的作用ニ依リ其原質ヲ削減シ因リテ其價格ヲ減損セシムル行爲ニシテ鑄造貨幣ニノミ付テ考フルコトヲ得可

シ』(刑法各論講義二六八乃至二七〇頁)ト。小崎氏曰ク『貨幣ノ變造トハ眞正貨幣ノ上ニ變造ヲ加フノ謂ニシテ眞正貨幣ノ外觀ヲ變更シテ更ニ高價ナル貨幣ノ外觀ヲ現出スルカ如キ或ハ眞正貨幣ノ縁邊ヲ剪取り又ハ摩消シ其他ノ方法ヲ以テ其定量ヲ減少スルカ如キ是ナリ。(中略)然レトモ其材料ヲ眞正貨幣ニ採ルモ之カ變造ノ程度ヲ超エテ一旦貨幣ノ原體(他物ト區別サル、要點)ヲ失フニ至リタルトキハ是レ變造ニ非スシテ偽造ナリ。而シテ其程度ヲ超過シタルヤ否ヤハ程度ノ問題ナリ』(日本刑法論各論二五二、二五三頁)ト。泉二氏曰ク『通貨ノ變造トハ或眞貨ノ一部ノ變更ヲ加ヘテ他ノ眞貨ニ模倣スルヲ謂フ。實質上ノモノト名價上ノモノトアリ。前者ハ例ヘハ硬貨ノ縁刻ヲ削取り又ハ其中實ヲ挾取ルカ如キ方法ヲ以テ眞貨ノ實質ヲ減損スルモノニシテ後者ハ銅貨ニ鍍銀シテ名價ヲ變造シ以テ銀貨ヲ模倣スルカ如キ場合ニ存スルモノナリ。一説ニ依レハ一種ノ硬貨ヲ基礎トシテ他ノ硬貨ノ外觀ヲ有スルモノヲ製出スルトキハ變造ニ非スシテ偽造ナリト爲スモ是レ變造ノ趣旨ヲ没却スルモノナリ』(日本刑法論六六七頁)ト。

第三 故意

通貨ノ偽造、變造ノ罪ヲ構成スルニハ單ニ故意ヲ以テ通貨ヲ偽造、變造スルノ所爲アルヲ以テ充分ナリト爲サス。此罪ヲ構成スルニハ行使ノ目的ヲ以テ通貨ヲ偽造、變造スルコトヲ必要トス。故ニ行使ノ目的ヲクシテ通貨ヲ偽造シ又ハ變造スルノ所爲ハ罪ト爲ラス。例ヘハ展覽會ニ備付クルノ目的ヲ以テ偽造ノ通貨又ハ變造ノ通貨ノ雛形ヲ製造スルカ如キ又各國ノ貨幣ノ見

行使ノ目的
アルヲ以テ
必要トス

本ヲ作ランカ爲メ通貨ト同一ナル形式、外觀、容積ヲ有スル偽貨ヲ作製スル所爲ハ罪ト爲ラサルカ如キ是ナリ。

行為者自身行使スル目的ヲ要ス

行使ノ目的ヲ以テ通貨ヲ偽造若クハ變造ストハ行為者自身カ行使スルノ目的アルコトヲ必要トセス、廣ク何人カヲシテ行使セシメント欲シ偽貨ヲ作製スル行為ヲモ包含ス。故ニ(一)行為者自身カ行使スル意思ヲ以テ偽造、變造スル場合、(二)特定ノ第三者ヲシテ行使セシムルノ意思ヲ以テ偽造、變造スル場合、(三)何人カヲシテ行使セシムルノ意思ヲ以テ通貨ヲ偽造、變造スル場合例ハ偽貨ヲ行使セントスル者ニ買却スルノ目的ヲ以テ之ヲ作製スル場合ノ如キハ共ニ行使ノ目的ヲ以テ通貨ヲ偽造、變造スルノ行為ナリト解ス可キナリ。行使ノ目的トハ如何ナル意義ヲ有スルヤハ行使トハ如何ナル意義ヲ有スルヤヲ明ニスルトキハ自然明白ト爲ルニ至ル可シ。而シテ行使ノ意義如何ノ説明ハ之ヲ次節ニ讓ル(二四二乃至二四五頁參照)。

第三節 偽造、變造ノ内國通貨ノ行使、交付

若クハ輸入ノ罪

第四百十八條 (行使ノ目的ヲ以テ通用ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ偽造又ハ變造シタル者ハ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ處ス)

偽造、變造ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ輸入シタル者亦同シ。

内國通用ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ偽造又ハ變造スルノ行為カ前節(刑一四)ノ罪ト爲ルノミニ止ラス其偽造又ハ變造シタル貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付スル行為又ハ他人カ偽造又ハ變造シタル通用ノ貨幣、紙幣若クハ銀行券ヲ其情ヲ知リナカラ(一)眞貨トシテ行使スルノ行為、(二)人ヲシテ眞貨トシテ行使セシムルカ爲メ之ニ交付スル行為、(三)人ヲシテ之ヲ眞貨トシテ行使セシムル爲メ之ヲ輸入スルノ行為ハ本節(刑一四)ノ罪ヲ構成スルモノトス。左ニ本罪ノ第一客體、第二行為、第三主體及ヒ故意ニ付キ之ヲ説明ス可シ。

第一 客體

第二章 通貨偽造ノ罪 第三節 偽造、變造ノ内國通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ罪 二四一

本罪ノ客體ハ偽造又ハ變造ニ係ル内國ニ於テ強制通用ノ效力アル内國ノ貨幣紙幣若クハ銀行券ナリトス。法文ニハ單ニ偽造變造ノ貨幣紙幣又ハ銀行券ト記載シ之ヲ一定ノ偽貨ニ限ルモノタルコトヲ明示スル文字ナシト雖モ(一)右法文ハ獨リ強制通用ノ效力アル内國通貨ニ付キ規定シタル前項(刑八)項(二)ヲ承ケテ之ヲ規定シタルト(二)偽造又ハ變造ニ係ル外國通貨ノ行使交付又ハ輸入ニ關シテハ第四百四十九條第二項ニ別ニ規定シアルトニ依リ之ヲ考察スルトキハ本罪ノ客體タル可キ物ハ偽造又ハ變造ニ係ル強制通用ノ效力アル内國ノ貨幣紙幣銀行券ニ限ル可キコトハ疑ヲ容レズ。

第二 所爲

所爲
偽貨ノ行

本罪ヲ構成スル行爲ハ(一)偽貨ノ行使(二)偽貨ノ交付(三)偽貨ノ輸入ノ三ナリトス。左ニ其個々ニ付キ之ヲ説明ス可シ。

- (一) 偽貨ノ行使。偽貨ヲ行使ストハ偽貨ヲ真正ナル通貨トシテ通貨ノ用法ニ從ヒ行使スルヲ謂フ。故ニ行爲者カ偽貨タルコトヲ知ラサル者ニ對シ

真正ナル通貨トシテ或ハ支拂方法トシテ交付スルカ如キ或ハ保證金トシテ差入ル、カ如キ或ハ小遣錢トシテ贈與スルカ如キ行爲ハ總テ偽貨ノ行使ナリト謂フヲ得可シ。又自働電話受錢器ニ偽貨ヲ投入シ電話ヲ爲スカ如キ行爲モ亦眞貨トシテ通貨ノ用法ニ從ヒ使用シタルモノナレハ之ヲ偽貨ノ行使ナリト謂フヲ得可シ。眞貨トシテ使用スル以上ハ之ヲ銘價以下ニ流用セシムルト否トハ之ヲ問フ所ニ非ス。是レ銀行券若クハ補助貨幣ノ如キハ眞貨ナル場合ト雖モ銘價以下ニ通用スル場合ハ必スシモ之ヲ想像スル能ハサルニ非サレハナリ。之ニ反シテ偽貨ヲ真正ナル通貨トシテ使用セス之ヲ偽貨トシテ交付スルカ如キ行爲ハ之ヲ偽貨ノ行使ト謂フ能ハス。例ヘハ偽貨ヲ通貨偽造ノ共犯者間ニ分配スルカ如キ又之ヲ偽貨タル情ヲ知レル者ニ賣却スルカ如キハ偽貨トシテ授受スルモノナレハ之ヲ以テ偽貨ノ行使ナリト謂フ能ハス。又眞貨トシテ交付スルモ之ヲ通貨ノ用法ニ從ヒ使用セサルトキハ之ヲ通貨ノ行使ト謂フコトヲ得ス。例ヘハ

偽造ノ金貨幣ヲ以テ襟留ヲ製シ之ヲ賣却又ハ贈與スルカ如キハ之ヲ金貨幣トシテ通貨ノ用法ニ從ヒ使用スルモノニ非サレハ之ヲ偽貨ノ行使ナリト謂フ能ハス(註九)。

(註九) (一) 同趣旨 大審院判例、江木、小崎、勝本、泉二諸氏。

判例ニ曰ク『偽造貨幣ヲ他人ニ交付シ其所有權ヲ移轉スルハ貨幣ノ用法ニ從ヒ之ヲ行使シタルモノトス。從テ偽造貨幣ヲ小遣錢トシテ贈與シタル所爲ハ偽造貨幣行使罪ヲ構成ス。而シテ其所爲ノ有價タルト無價タルトハ犯罪ノ成立ニ影響ヲ及ボサス』(三五年大審院判決録四卷四八頁)ト。又曰ク『偽造貨幣ノ行使トハ之ヲ眞貨トシテ其名價同額ニ使用スルヲ謂フ。而シテ之ヲ商品トシテ名價以下ニ賣買取引シタル所爲ハ行使ニ非ス』(二八年五卷九八頁)ト。同主旨(二八年五卷一七〇頁)。江木氏曰ク『行使トハ犯人爲メニ其目的ヲ達シ其利益ヲ獲得スルコトヲ要セス。其偽造シタル貨幣ヲ以テ貨幣トシテ通用セシメタルヲ以テ足ル』(現行刑法原論二二九頁)ト。小崎氏曰ク『行使トハ眞正ノ貨幣トシテ支拂ヒ其他流通ニ置クノ謂ヒニシテ其不正貨幣ハ眞正貨幣トシテ他人ニ引渡サレサル可カラズ。換言スレハ引渡ノ當時ニ於テ之ヲ收受スル者カ其眞正貨幣タルコトヲ覺知セサルコトヲ要ス。而シテ汎ク流通ニ置クコトヲ意味スルカ故ニ單ニ支拂方法トシテ他人ニ引渡シ場合ノミナラス贈與、供託スルコト等ヲモ包含スルモノトス』(日本刑法論各論二五二頁)ト。尙ホ勝本氏刑法新稿上卷四二一頁、泉二氏日本刑法論六六八頁參照。

(二) 異説 偽貨ヲ有用ニ行使スルトキハ貨幣ノ用方ニ從ヒ之ヲ行使セサルモ偽貨ノ行使ナリ。大審院判例。判例ニ曰ク『貨幣偽造行使罪ハ其貨幣ヲ有用ニ行使スルヲ以テ成立ス。而シテ偽造貨幣ヲ借金ノ擔保トシテ他人ニ

行使ハ流通ニ置ク
セトチ要

交付シタル所爲ハ即チ有用ニ行使シタルモノニシテ當然貨幣偽造罪ヲ構成ス(三〇年大審院判決録三卷三八頁)ト。同主旨(二八年二卷一三三頁)。

偽貨ノ行使トハ之ヲ眞貨トシテ通貨ノ用法ニ從ヒ使用スル行爲アルヲ以テ足ルモノニシテ必スシモ之ヲ廣ク流通セシムルコト即チ流通ニ置ク(Inverkehrbringen)ノ意思ヲ以テ之ヲ使用スルノ行爲アルヲ要セス。故ニ例ヘハ偽貨ヲ受領シタル者ハ其受領後直ニ偽貨タルヲ發見スルコトアル可シト行爲者ニ於テ確信シタル場合即チ其使用シタル行爲者カ流通スルコトナカル可シト確信シ之ヲ行使シタル場合ニ於テモ亦偽貨ノ行使ナリト謂フヲ得可シ。故ニ例ヘハ銀行カ検査役員ニ對シ金庫現在金額ノ不足ヲ隱蔽セシカ爲メ偽貨ヲ示スカ如キ行爲ハ之ヲ偽貨ノ行使ナリト謂フヲ得可シ。然ルニ學者或ハ廣ク流通セシムルコト即チ流通ニ置クコトヲ以テ偽貨行使ノ必要條件ナルカ如ク解スルカ如キハ徒ニ外國法ニ從テ我法文ヲ解スルノ弊ニ陥リタルニ非サルヤノ感ナキ能ハス。外國法例ヘハ獨逸

刑法第四百十七條ニ偽造又ハ變造ノ貨幣ヲ通貨トシテ流通セシメタル者 (Welcher das nachgemachte oder verfälschte Geld als echtes in Verkehr bringt) トノ法文ヲ有スル邦國ニ在リテハ前例ノ如ク銀行役員カ検査役員ニ對シ偽貨ヲ示シタル場合ニ於テ實際上之ヲ罰ス可キ必要アルニモ拘ラス法文ノ文理解釋上止ムコトヲ得ス之ヲ消極ニ解セサル可カラサルコト勿論ナリ。然レトモ我刑法ニ於テハ流通セシムルノ文字ヲ使用セスシテ行使ナル文字ヲ使用シタルカ故ニ之ヲ消極的ニ解シ之ヲ不問ニ付スル必要ナキモノトス。若シ假ニ反對論者ニ從ヒ行使ナル文字ヲ流通ノ意義ニ解セシカ我刑法ノ他ノ場所ニ於テ使用シタル行使ナル文字例ヘハ偽造文書ノ行使ナル文字ハ如何ニ解ス可キカ(註一〇)。

(註一〇) (一) 同聲言 岡田、牧野諸氏。

岡田氏曰ク「然リト雖モ本問ノ場合(検査ノ吏員ニ聞覽セシムル爲メ偽貨ヲ陳列シタルトキ)ニ於ケル展示ハ眞實ニ裝ヒテ偽造、變造ノ貨幣ヲ貨幣トシテ働カセタルモノナリ。(中略)故ニ其行使アリタリトスル説サ可トス」(法學協會雜誌二四卷五號五七五、五七六頁)ト。牧野氏曰ク「行使トハ眞實トシテ一定ノ使用ニ供スルヲ謂フ。必スシモ之ヲ

流通ニ置クノ必要ナシ。故ニ例ヘハ銀行家カ有金アルコトヲ示サンカ爲メニ検査官ニ對シテ偽造貨幣ヲ示スハ行使ナリ」(刑法通義二五六頁)。

(二) 異説 偽貨ヲ欺ニ他人ニ示スカ如キハ行使ニ非ハ。小崎傳、泉ニ新熊諸氏。

小崎傳氏曰ク「他人ニ引渡サル、コト即チ他人ニ處分權 (Verfügungsbefugnis) ナルコトヲ要スルカ故ニ若シ引渡シク單ニ自己ノ信用ヲ博センカ爲メニ或ハ金庫ノ藏納ヲ隱蔽センカ爲メニ不正貨幣ヲ他人ニ示ストモ行使ノ所爲アリト謂フコトヲ得ス」(日本刑法論各論二五三頁)。泉ニ新熊氏曰ク「信用ヲ得ルカ爲メニ偽貨ヲ金庫ニ入レ置キ之ヲ他人ニ示スカ如キハ本罪ヲ構成セス」(日本刑法論六六八頁)。

行使ノ目的ヲ以テ
ナル偽貨
ノ交付

(二) 行使ノ目的ヲ以テスル偽貨ノ交付。行使ノ目的ヲ以テ偽貨ヲ人ニ交付スル場合ニ付キ(甲)行爲者カ第三者ヲシテ自己ニ代テ偽貨ヲ行使セシムルカ爲メ之ニ偽貨ヲ交付スル場合及ヒ(乙)第三者カ偽貨ヲ行使スルコトヲ知テ之ニ交付スル場合ヲ想像スルコトヲ得可シ。例ヘハ雇人ヲシテ物ヲ購求セシムル爲メ之ニ偽貨ヲ交付スルカ如キハ(甲)ノ場合ノ適例ナリ。又例ヘハ偽貨タル情ヲ知テ之ヲ行使セントスル者ニ安ク偽貨ヲ賣渡スカ如キハ(乙)ノ場合ノ適例ナリ。之ヲ要スルニ行爲者自身ハ偽貨ヲ行使セサルモ他人カ偽貨ヲ行使シ又ハ行使スルコトアルヲ知テ之ニ偽貨ヲ交付スル所

爲アルトキハ之ニ依リ本罪ヲ成立ス(註一ノ一)。交付ヲ受ケタル者カ行使スルト否トハ本罪ノ構成ニ關係ナシ(註一ノ二)。

(註一ノ一) 同趣旨 大審院判例。判例ニ曰ク『刑法第四百十八條第二項ニ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ交付シトアルハ偽貨ヲ流通ニ置ク意思ヲ以テ他人ニ交付スルノ謂ナリ。從テ交付者カ被交付者ニ其偽貨ナル實ヲ告ケテ交付スルト他人ノ行使スル情ヲ知テ交付スルトハ問フ所ニ非ス』(四三年大審院判決録四〇二頁)。

(註一ノ二) 同趣旨 大審院判例。判例ニ曰ク『刑法第四百十八條第二項ハ偽貨ナル實ヲ告ケ他人ヲ行使セシムル爲メ之ヲ交付スル所爲ヲ以テ獨立罪ト爲シタルモノトス。故ニ被交付者カ行使ノ目的ヲ實行セサルモ交付者ハ尙ホ同條項ノ責任ヲ免ル、コトヲ得ス又之ヲ實行シタルトキト雖モ數條ノ法條ヲ適用スヘキモノニ非ス』(四三年大審院判決録四〇二頁)。

(三)

行使ノ目的ヲ以テスル偽貨ノ輸入。行使ノ目的ヲ以テ偽貨ヲ輸入ストハ他人カ偽貨ヲ行使シ又ハ行使スルコトアルヲ知テ輸入スル行爲ナリ。

偽貨輸入ハ陸上ニ在テハ之ヲ携帶若クハ輸送シテ我國境線ヲ踰越シタル場合ニ完成ス可ク海上ニ在リテハ之ヲ積込ミタル船舶ヨリ陸揚スルノ行爲ヲ完了シタル場合ニ完成ス可キモノトス。法文ノ所謂輸入ヲ斯ノ如ク解スルハ他ノ法令ニ使用シタル輸入ナル文字(例ハ關稅ニ使用シ)ノ意

行使ノ目的ヲ以テスル偽貨ノ輸入

義ト一致スルモノニシテ蓋シ法律ノ精神ニ合スルモノナラン。然ルニ若シ反對論者ノ如ク偽貨ヲ積込ミタル船舶カ我領海内ニ來リタルトキハ之ヲ以テ直ニ輸入ナリト解スル如キハ我領海ヲ通過シタルノミニテ我國ニ何等ノ影響ナキ場合ニ於テモ尙ホ輸入ナリトシテ之ヲ罰セサル可カラサル奇觀ヲ呈セン。且ツ輸入ヲ斯ノ如ク解スルハ普通一般ニ使用セラル、輸入ノ意義ト矛盾スルノミナラス他ノ法令ニ使用シタル輸入ノ意義(例ハ關稅ニ使用シタル輸入ノ意義)ト符合セサル嫌ナキ能ハス(註一ノ三)。尤モ行使ノ目的ヲ以テ偽造、變造ニ係ル内國通用ノ貨幣、紙幣、銀行券ヲ輸入スル行爲ニ着手スルトキハ其領海ニ來リタルト否トヲ問ハス此罪ノ未遂罪ナリトシテ之ヲ處罰スルヲ得可ク(參照)又内國ニ流通スル外國ノ貨幣、紙幣、銀行券ヲ輸入スル目的ヲ以テ我領水ニ來リタルトキハ行使ノ目的ヲ以テ外國ノ偽貨ヲ輸入スル罪ノ未遂罪(刑一四九、一五〇條)ナリトシテ之ヲ處罰スルコトヲ得可キヲ以テ輸入ナル文字ヲ特種ノ意義ニ解スルヲ以テ假ニ相當ナリトスルモ其實益ハ反

(註一ノ三) (一) 同意旨 大審院判例、勝本氏。

判例ニ曰ク『刑法ニ所謂輸入トハ陸上ニ於テハ國境線ヲ越シ海上ニ在テハ船舶ヨリ陸揚シテ外國貨物ヲ我國内ニ運ヒ入ル、行爲ヲ指示ス。從テ外國貨物ヲ積載シタル船舶カ我領海ハ勿論我港内ニ入ルモ之ヲ以テ直ニ貨物ノ輸入アリタルモノト謂フヲ得ス』(四〇年大審院判決第一〇〇七頁)ト。同意旨(三七年一九頁)。勝本氏曰ク『輸入トハ結局或物件ヲ我國土内ニ置ク目的ヲ以テ外國ヨリ其物件ヲ我國土内ニ運ヒ入ル、コトヲ謂フ。(一)結局或物件ヲ我國土内ニ置ク目的アルコトヲ要スルカ故ニ外國ニ輸送スル目的ヲ以テ一時我國ニ陸揚スルカ如キハ輸入ト謂フヲ得ス。(二)他國ヨリ運ヒ入ル、コトヲ要スルカ故ニ我國土内ノ甲地ヨリ乙地ニ運ヒ入ルカ如キハ亦輸入ニ非ス。(三)我國土内ニ運ヒ入ル、コトヲ要ス。凡ソ外國ヨリ内國ニ輸送セラル可キ物件ハ普通通商手續由ス可キモノニシテ外國ヨリ輸送セラル、物件ニ對スル所謂一國々境ハ税關設置線ナリトス。故ニ假令既ニ我領海内ニ運ヒ入ル、モ未タ税關設置線内ニ運ヒ入ラザレハ未タ以テ輸入既遂ノ行爲アリト謂フヲ得ス』(刑法析義上卷四〇七、四〇八頁)ト。

(二) 異説 我領海内ニ入りタルトキハ輸入ナリ。岡田、小崎、谷野諸氏。

岡田氏曰ク『余ハ二個ノ理由ニ據テ此判決(本註二行以下参照)ニ反對ス。(一)我大審院カ輸入ヲ陸揚ノ義ニ解シタルハ普通通商品ノ密輸入ト同一ノ意味ニ解シ彼此調和ヲ保ツノ趣旨ニ出テタルモノナラント雖モ尋常ノ商標ノ商品ハ之ヲ内地ニ輸送シ取引ノ目的トスル場合ニ限り徵稅ノ必要アリテ輸入ノ意義モ亦自ラ陸揚ノ義ニ限ラレ、ノ結果ト爲ル可シト雖モ之ニ反シテ阿片煙又ハ偽造貨幣若クハ軍用ノ銃、彈藥ノ如キ禁制品ノ輸入ヲ禁止スルハ我日本帝國

ノ境内ト同一視ス可キ總テノ區域内ニ此類ノ物品ノ私ニ存在スルコトヲ禁ズル精神ニ出ツルカ故ニ經今川語同一ナリトスルモ其内容ハ之ヲ區別シテ解釋セサル可カラス。普通通商品ヲ積載シタル船舶カ單ニ日本ノ某港ニ立寄リ次テ他國地ニ出帆シタルハ密輸入ニ非サルコト勿論ナリト雖モ禁制品ヲ携帶シテ内國ヲ通り抜ケントシタルハ禁制品ノ輸入罪ヲ以テ論ス可シト爲ス。是レ多數學者ノ一致スル所ナリ。(中略)(二)若シ又輸入ヲ陸揚ト解スルトキハ領海内ニ外國船ヲ浮ヘ貨幣、文書等ヲ偽造シタル者アルトキハ其陸揚ヲ爲スヲ待テ輸入罪ニ問フ可シト爲サ、ルヲ得サル順序ト爲ル可シ。斯ノ如キハ國內主權ノ原則ニ反シ國內犯罪、國外犯罪ノ區別ヲ際綱シ重大ナル不都合ヲ來サ、ラントスルモ得可カラス。余ハ斷然輸入ハ國內ニ入ルノ義ニ解セント欲スル者ナリ。某ノ犯罪カ内國ニ生シタルカ國外ニ生シタルカノ問題ハ國境ヲ標準トシテ論ス可ク決シテ陸上ニ於テシタルト否トナリテ區別セス。前例領海内ニ外船ヲ浮ヘテ貨幣又ハ文書ヲ偽造スルカ如キハ我日本帝國内ニ於テ貨幣又ハ文書ヲ偽造シタル罪ニ問フ可ク決シテ陸揚ヲ了ルヲ待テ輸入罪ニ問フ如キ愚ヲ學フ能ハサル以上ハ輸入ノ意義モ之ヲ調和ヲ保チ法理上我國境内ト同一視ス可キ總テノ區域内ニ入りタルヲ謂フト解セントス。一度此解釋ヲ是認スルトキハ其結果極メテ重大ナリ。帝國軍艦カ外國ノ港灣ニ碇泊スル間ニ禁制品ヲ持込ミタル者アルトキハ直ニ輸入ノ罪ト爲ル可シ。日本ノ商船ニ係ル場合ニハ禁制品ヲ積込ミテ外國ノ領海ヲ離レタルトキハ既ニ輸入ノ既遂ト爲ル可ク我領海ニ入ルヲ待タス。又大洋ニ於テ外國ノ軍艦ヨリ我艦船内ヘ禁制品ヲ移載シタルトキハ其移載ヲ了ル瞬間ニ輸入ノ既遂ト爲ル可シ。又阿片煙ヲ吸食スルコトヲ許サレタル國ノ商船カ其國ノ港灣ヲ出テ、日本ニ寄港シ再ヒ本國又ハ第三國ニ向ケ出帆セントシタルトキモ其日本ノ領海内ニ入りタル時阿片煙輸入ノ罪ノ既遂ト爲ル可シ』(法學協會雜誌二四卷第五號五八二乃至五八五頁)ト。小崎氏曰ク『明治三十七年(れ)第二五〇九號大審院判決ニ依レハ輸入スルトハ陸揚スルノ謂ニ

第二章 通貨偽造ノ罪 第三節 偽造、變造ノ内國通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ罪 二五一

シテ單ニ我領海ニ入りタリトテ未ダ陸揚セサルトキハ輸入シタリト謂フテ得スト解セルモ誤見ナリ。何トナレハ領海モ領土ト共ニ國內ノ一部タルハ疑ナキヲ以テナリ(日本刑法論各論四七四頁)ト。谷野氏曰ク「輸入トハ内國ニ荷揚スルノ目的ヲ以テ外國ヨリ内國ニ入ラシメタル行爲ヲ謂ヒ異説アリト雖モ領水内ニ入ラシメタル時ニ於テ既遂タル可シ(刑法各論講義三五九頁)ト。

第三 主體及ヒ故意

此罪ノ主體タルヲ得可キモノハ通貨ノ偽造者若クハ變造者本人タルコトアリ。又偽造者若クハ變造者以外ノ第三者タルコトアリ。

(一) 偽造者若クハ變造者ノ偽貨ノ行使、交付若クハ輸入。通貨ヲ偽造又ハ變造シタル本人カ偽貨ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ之ヲ輸入スル罪ヲ犯ス場合アリ。此場合ハ更ニ分テ(甲)行爲者カ始メヨリ行使ノ意思ヲ以テ偽造若クハ變造シタル場合ト(乙)行爲者カ行使ノ意思ナクシテ偽造若クハ變造シタル場合トノ二ト爲スコトヲ得。行使ノ意思ヲ以テ偽造若クハ變造シタル者カ偽貨ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ偽

主體及ヒ故意
偽造者又ハ變造者ノ行使、交付若クハ輸入

貨ヲ人ニ交付シ又ハ輸入シタルトキハ偽造又ハ變造ノ行爲ト偽貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ行爲トハ手段ト結果トノ關係ヲ有スルモノニシテ第五十四條第一項後段ニ依リ處斷ス可キモノトス。此場合ニ於テ偽貨ノ行使、交付若クハ輸入ニ着手シタルモ未タ之ヲ完成スルニ至ラサルトキハ通貨ヲ偽造若クハ變造スル罪ト偽貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ未遂罪ニ對シ同一條項ニ依リ處斷ス可キモノトス。之ニ反シテ行使ノ意思ナクシテ通貨ヲ偽造又ハ變造シタル者カ偽貨ヲ行使スルカ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ輸入スルトキハ獨リ偽貨ヲ行使、交付若クハ輸入スル罪ノミヲ構成スルモノトス。偽造、變造ノ罪ニ付キ既ニ有罪ノ確定判決アリタル後偽造者若クハ變造者ニシテ其偽造又ハ變造シタル偽貨ヲ行使、交付若クハ輸入シタルトキハ此場合ト同一ニ處斷ス可キモノトス(註111)。

(註111) 同種ノ説明 フランク氏(Frank, I. I. zu § 147)。

(二) 偽造者若クハ變造者以外ノ者ノ偽貨ノ行使、交付若クハ輸入。偽造者又

第二章 通貨偽造ノ罪 第三節 偽造、變造ノ内國通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ罪 二五三

偽造者又ハ變造者以外ノ者ノ行使、交付若クハ輸入

ハ變造者以外ノ者ニシテ偽貨ヲ行使スルカ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ之ヲ輸入スル場合ニ關シ(甲)偽貨タル情ヲ知テ之ヲ收得シ之ヲ行使、交付若クハ輸入スルトキ及ヒ(乙)偽貨タル情ヲ知ラスシテ之ヲ收得シ之ヲ行使、交付若クハ輸入スルトキノ二個ノ場合ヲ想像スルコトヲ得。本罪ハ獨リ(甲)ノ場合即チ偽貨タル情ヲ知テ之ヲ收得シ之ヲ行使、交付若クハ輸入シタル場合ニ成立スルナリ。而シテ(乙)ノ場合ニ於テハ第五百二十二條ノ罪ヲ構成ス可キナリ。

第四節 内國ニ流通スル外國通貨ノ偽造

變造又ハ偽造若クハ變造シタル

内國ニ流通スル外國通貨ノ行使、

交付若クハ輸入ノ罪

第四百十九條 行使ノ目的ヲ以テ内國ニ流通スル外國ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ偽

造又ハ變造シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス。

偽造、變造ノ外國ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シ若クハ輸入シタル者亦同シ。

内國ニ流通スル外國ノ貨幣、紙幣、銀行券ノ偽造、變造、行使ノ罪

通貨偽造罪ノ客體タルヲ得可キモノハ獨リ内國通用ノ貨幣、紙幣、銀行券ノミナラス外國ノ貨幣、紙幣、銀行券モ亦其ノ客體タルヲ得可キコトハ前既ニ之ヲ説明シタルカ如シ。而シテ茲ニハ内國ニ流通スル貨幣、紙幣、銀行券ヲ偽造、變造スルノ行爲及ヒ偽造、變造ニ係ル貨幣、紙幣、銀行券ヲ行使スルノ行爲、若クハ行使スルノ意ヲ以テ之ヲ人ニ交付スルノ行爲及ヒ行使スルノ意ヲ以テ之ヲ輸入スルノ行爲ヲ罰ス可キコトヲ定メタルナリ。而シテ通貨ノ偽造若クハ變造トハ如何ナル意義ヲ有スルヤニ付テハ第二節ニ於テ之ヲ説明シタルカ如シ。又通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ意義如何ハ之ヲ第三節ニ於テ説明シタルカ如シ。唯タ茲ニ説明ヲ要スルハ内國ニ流通スル貨幣、紙幣、銀行券トハ如何ナル意義ヲ有スルヤニアリ。内國ニ流通スル外國ノ貨幣、紙幣、銀行券

第二章 通貨偽造ノ罪 第四節 内國ニ流通スル外國通貨ノ偽造、變造又ハ偽造者 二五五

トハ事實上内國ニ流通スル外國ノ貨幣、紙幣、銀行券ヲ謂フ。既ニ事實上内國ニ於テ流通スル以上ハ假令内國ニ於テ強制通用ノ效力アルト否トニ關係ナク本罪ノ客體タルコトヲ得可キモノトス。通貨偽造罪ノ法益ハ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用即チ交通取引ノ安全ナルコト及ヒ同罪ノ客體タルコトヲ得可キ物ハ交通取引ノ主要タル媒介物タル通貨ニシテ其通貨ノ内外國何レニ屬スルヤハ之ヲ問ハサルコトハ前既ニ之ヲ説明シタルカ如シ(至二一六頁參)。法律ハ外國ノ通貨中事實上内國ニ流通スル貨幣、紙幣、銀行券ト内國ニ流通セス獨リ外國ニノミ流通スル貨幣、紙幣、銀行券トヲ區別シ前者ノ偽造、變造ハ之ヲ刑法中ニ規定シ後者ノ偽造、變造ハ之ヲ特別法ニ讓リタルコトモ亦前既ニ説明シタルカ如シ。唯タ内國ニ流通スル外國ノ通貨ハ之ヲ内國ニ事實上流通セサル外國ノ通貨ニ比スレハ前者ハ之ヲ厚ク保護スルノ必要アルハ何人モ異議ナキ所ナラン。是レ我法律カ前者ヲ偽造變造スル所爲ニ對スル刑罰ヲ後者ノ夫レニ對スル刑罰ニ比シ重カラシメタル所以ナランガ。尙

ホ法文ニ通用(強制)ナル文字ヲ避ケテ特ニ流通ナル文字ヲ用ヒタルニ由リテ之ヲ觀レハ事實上内國ニ流通スル外國ノ貨幣、紙幣、銀行券タル以上ハ總テ本罪ノ客體タルコトヲ示シタルモノト解ス可キナリ(註一三〇)。

(註一三〇) (一) 同條旨 勝本氏曰ク「第百八十三條(舊)以外ニ於テ通用ノトハ強制的通用ヲ第百八十三條(舊)ニ於テ所謂通用スルトハ強制的タルト任意のタルトヲ問ハズ事實上流通スルノ義ナリ。第百八十三條(舊)ノ通用スルテフ文字ヲ以テ強制的ノ通用ヲ意味スルモノナリト解シタル學者ハ(一)草案ト現行法(舊)トヲ比照スルニ現行法(舊)第百八十二條ト第百八十三條トハ内外國ヲ問ハズ總テ強制的通用力ヲ有スル金銀貨ニ對スル規定タリシ草案第百二十四條(舊法)ノ内外國ノ區別ニ從ヒ分離シタルモノナルカ故ニ第百八十三條(舊)ハ強制的流通力アルモノニ限ラサルヲ得スト謂フト雖モ草案第百二十五條(舊法)ニハ更ニ任意ニ流通セル外國ノ金銀貨ニ對スル規定アリ此規定ノ削除セラレタルコトヲ明カニ論定スルニ非サレハ學者ノ說ハ草案第百二十四條ノ現行法(舊)第百八十二條ト第百八十三條トニ分離セラレタルモノ、中第百八十三條ト爲リタルモノハ更ニ草案第百二十五條(即チ任意ニ流通スル外國ノ金銀貨ニ對スル規定)ノ規定ト結合シテ第百八十三條(舊)ヲ組成シタルモノナリトノ說ヲ排斥スルノ力ヲ有セス。(二)茲ニ於テ草案第百二十五條ハ削除セラレタルモノナルコトヲ論斷センカ爲メ學者ハ任意ノ通用アル貨幣テフ文字アル佛文草案第百二十五條ヲ翻譯シタル日本文草案ニハ普ク通用セラレテフ文字アリテ明カニ私入カ任意ニ通用セシムルモノタルニ過キサルコトヲ明示スルノ語アリシモ現行法第百八十三條(舊)ニハ此明文ナク却テ法律上ノ通用力アルコトヲ意味セル第百八十二條(舊)ノ通用ナル文字ヲ用ヒアルカ故ニ草案第百二十五條ハ全

第二章 通貨偽造ノ罪 第四節 内國ニ流通スル外國通貨ノ偽造、變造又ハ偽造者 二五七

ク削除セラレタルモノナリト謂フト雖モ佛文章案二百十四條ニモ亦此二百十五條ニ於ケルカ如ク法律上ノ通用又之ヲ反譯シタル日本文草案ニモ合法ノ通用ナル文字アリテ現行法第百八十二條(舊)ノ如ク單ニ通用トノミハ謂ハサリキ。然ラハ若シ夫レ學者ノ論法ヲ以テ至當ナリトセハ第百八十二條(舊)ニ對シテモ亦同一ノ筆法ニ依リ同條所謂通用ハ合法ノ通用タルヲ要セスト謂ハサル可カラサルニ至ラン(中略)。之ヲ要スルニ學者ハ自己ノ前提ニ合セル點ニ於テ草案ヲ採リ合セサル點ニ於テ漫然之ヲ排斥シタルモノナリ。之ニ反シ草案ニ於テハ内國ノ貨幣ニ付テハ明ニ法律上ノ通用ノ場合ノミヲ規定スルモ外國ノ貨幣ニ付テハ強制ト任意トノ場合ヲ規定スルノミナラス法文第百八十二條(舊)所謂内國ニ通用ノ貨幣ノノ字ハ通用ト貨幣トヲ連接シテ貨幣ヲ流通的貨幣ナリト謂フ一ノ名詞タルコトヲ示シ第百八十三條(舊)所謂内國ニ於テ通用スルノスルハ或ハ勸ヲ示ス文字ニシテ通用ト謂フ事實アル貨幣ト謂フ義タルヲ見レハ余輩ノ修正論ハ殆ト疑ヲ容レザルモノナリ。人或ハ内國ノ貨幣ニ付テハ強制力アルコトヲ要シ外國ノ貨幣ニ付テハ然ラサル所以ヲ疑フモノアル可シト雖モ畢竟内國發行ノ貨幣タル以上ハ當然強制力ヲ有スルモノニシテ是レ任意ノ流通テフコトアル可キ密ナキモ外國貨幣ハ任意ノ流通ヲ以テ原則トシ時ニ或ハ佛、伊、希ノ如キ貨幣同盟ノ行ハル、結果強制的流通貨幣ヲ生シ出ツルコトアルカ故ナリ(刑法析義上卷三六七乃至三七二頁)ト。

(二) 異說 強制通用ノ效用アル外國通貨タルヲ必要トス。泉二、牧野、兩氏。岡田、谷野、小崎三氏ハ舊刑法ノ解釋ニ關シテハ同一ノ結論。

泉二氏曰ク「國家ノ公認アルコトヲ要スルカ故ニ事實ニ於テ交換ノ用ニ供セラル、モ國家ノ公認セサルモノハ通貨ニ非ス。反之公認アル以上ハ外國ノ法令ニ依リ發行セラレタル通貨モ亦本罪ノ目的タルヲ得可シ(日本刑法論六六二頁)ト。牧野氏曰ク「余輩ハ單純ナル事實上ノ通用力ハ通貨偽造ノ保護ヲ受ケルニ足ラサルモノト解シ外國通貨カ

法定通用力ヲ有スル場合ニ限ルモノト解ス(刑法通義二五五頁)ト。岡田氏刑法講義九三頁(尙ホ法學協會雜誌二四卷四號四一八、四一九頁參照)、谷野氏刑法各論講義二七四頁、小崎氏日本刑法論各論二五七頁參照。

第五節 偽造、變造ノ通貨收得ノ罪

第百五十條 行使ノ目的ヲ以テ偽造、變造ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ收得シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス。

行使ノ目的ヲ以テ偽貨ヲ人ニ交付スルノ行爲ヲ罰スルノ必要アルカ如ク行使ノ目的ヲ以テ偽貨ノ交付ヲ受クル行爲ヲ罰スルノ必要アリ。是レ法律カ行使ノ目的ヲ以テ偽造、變造ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ノ收得ヲ罰スル所以ナリ。此罪ニ付キ説明ヲ要ス可キハ本罪ノ客體及ヒ所爲ノ二者ナリトス。

第一 客體

偽造又ハ變造ノ貨幣、紙幣、銀行券タル以上ハ其ノ内國通貨タルト又外國通貨タルトヲ問ハス總テ本罪ノ客體タルコトヲ得ルモノト解ス可キモノトス。法文ニハ單ニ偽造、變造ノ貨幣、紙幣、銀行券ヲ收得シタル者トアリテ其内國ノ

内國ノ通貨
外國ノ通貨
貨タルト
客體タル
コトヲ得

通貨ノミヲ指スヤ否ヤニ付キ何等ノ制限ナキコト及ヒ之ヲ通貨偽造罪ノ法益保護ノ點ヨリスレハ通貨ノ内國通貨タルト又ハ外國ノ通貨タルトハ之ヲ問ハス行使ノ目的ヲ以テ之ヲ收得スルノ行爲ヲ嚴禁スルノ必要アルコトノ二點ヨリ考フレハ此解釋ハ失當ナラサル可シ。

第二 所爲

法文ノ所謂行使ノ目的ヲ以テ偽造、變造ノ貨幣、紙幣、銀行券ヲ收得ストハ偽造、變造タル情ヲ知リ之ヲ行使スル目的ヲ以テ偽貨ヲ收得スルヲ謂フモノト解ス可キナリ。故ニ偽貨ノ賣買、讓與、交換等ニ依リ偽貨ヲ取得スル場合ハ勿論詐欺、恐喝等ニ依リ偽貨ヲ騙取スル場合ニ於テモ苟モ偽造、變造タル情ヲ知リ之ヲ行使スル目的ヲ以テ領得スルニ於テハ之ヲ法文ノ所謂偽貨ノ收得ナリト謂フヲ得可シ。尙ホ竊取、拾得等ニ依リ偽貨ヲ領得スル場合ニ於テハ其領得ノ當時ニ於テ偽貨タルコトヲ知テ之ヲ行使スルノ目的ヲ以テ領得シタルトキハ法文ノ所謂收得ナリト解スルヲ得可シ(註一四)。之ニ反シテ行爲者カ

取得

偽貨ヲ行使スルノ意思ナク單ニ偽貨ノ所持ヲ得ルノ行爲ノ如キハ之ヲ收得ト謂フニ足ラス。又單ニ偽貨ノ委託ヲ受ケ之ヲ預リタル者即チ行使ノ意ナクシテ他人ノ偽貨ヲ所持スル者カ後日之ヲ横領スル行爲アルモ此行爲ヲ以テ法文ノ所謂行使ノ目的ヲ以テ收得シタルモノト謂フ能ハス(註一五)。

(註一四) 同趣旨 大審院判例、勝本、小崎、泉二諸氏。

判例ニ曰ク「偽造、變造ノ情ヲ知テ貨幣ヲ收受シタルトアル意義(懲刑、一九〇條)ハ單ニ任意ニ授受ニ依テ取得シタルモノ、ミニ止ラズ廢カ奪取ニ依テ取得シタルモノヲ包含ス(一九〇九年大審院判決第一〇卷二四頁)ト。又曰ク「行

使ノ目的ヲ以テ偽造紙幣ヲ竊カニ取出シタル所爲ハ刑法第九十條第一項(竊)ニ所謂收受ナリ(三一年六卷四頁)ト。

勝本氏曰ク「收受(新法ハ取得)トハ(中略)取り又ハ受ケルノ義ナルカ故ニ單ニ受取りタル場合ノミナラス強竊

盜、拾得、遺失物等進シテ取ル場合ヲモ亦之ヲ包含スルノ語ナルコト疑テ答レズ(刑法新義上卷四二頁)ト。小崎氏日本刑法論各論二七八、二七九頁、泉二氏日本刑法論六六九頁參照。

(註一五) 異說 牧野氏曰ク「取得トハ自己ノ所持ニ移スノ一切ノ場合ヲ謂フ。贈與、交換、賣買、拾得、盜取、騙取等其方法ノ如何ヲ問ハス受託物ノ横領(第二五二條)モ亦所謂收得ニ入ル可シ(刑法通義二五七頁)ト。

又行使ノ目的ヲ以テ收得ストハ行爲者カ自ら行使シ又他人ヲシテ行使セシムル目的ヲ以テ偽貨ヲ領得セル場合ハ勿論行爲者カ他人ノ爲メニ偽貨ヲ

行使スル爲メ之ヲ收受スル場合例ヘハ行爲者カ他人ノ依頼ヲ受ケ偽貨ヲ以テ物ヲ購求スル爲メ情ヲ知テ偽貨ノ交付ヲ受クルカ如キ行爲モ尙ホ行使ノ目的ヲ以テ偽貨ヲ收得シタリト解ス可キナリ。

第六節 通貨ノ偽造、變造又ハ偽貨ノ行使、

交付若クハ輸入ノ未遂罪

第五百五十一條 前三條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス。

内國通用ノ貨幣、紙幣、銀行券若クハ内國ニ流通スル外國ノ貨幣、紙幣、銀行券ノ偽造若クハ變造ノ行爲ハ人ヲ欺クニ足ル可キ模擬ノ程度ニ達シタル偽貨ヲ作製シ得タルトキヲ以テ完成スルモノトス。故ニ斯ル通貨ノ偽造、變造ノ行爲ニ着手シタル時ヨリ人ヲ欺クニ足ル可キ模擬ノ程度ニ達シタル偽貨ノ作製ヲ終了セサル間ハ未遂ノ状態ニ在ルモノトス。行爲者カ多數ノ通貨ヲ偽造セント計畫シタル場合ト雖モ既ニ一個ノ偽貨ノ作製ヲ完了シタルトキハ此罪完成ス。又偽造、變造ノ行爲ヲ終了シタルモ模擬ノ程度拙劣ニシテ到

底人ヲ欺クニ足ラサルトキハ尙ホ未遂罪ヲ構成スルコトアル可キコトハ前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。

偽貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ未遂ニ付テハ前ニ行使、交付若クハ輸入ノ行爲ニ付キ説明シタル所ニ依リ之ヲ知ルヲ得可キヲ以テ改メテ茲ニ説カス。

第七節 收得後偽貨ノ知情行使若クハ知情交付罪

情交付罪

第五百五十二條 貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ收得シタル後其偽造又ハ變造ナルコトヲ知テ之ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ人ニ交付シタル者ハ其名假三倍以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス。但壹圓以下ニ降スコトヲ得ス。

交通取引ニ於ケル主要ナル媒介物タル通貨ニ關スル法益ヲ保護シ以テ交通取引ノ安全ヲ企圖セント欲セハ最初ヨリ偽貨ナルコトヲ知リテ之ヲ收得スル行爲又ハ之ヲ行使スルノ行爲ヲ罰スルヲ以テ足レリト爲サス尙ホ其始ニ於テハ偽貨タルコトヲ知ラス善意ニ收得シタル者(被害者タル)カ其後其偽

第二章 通貨偽造ノ罪 第六節 通貨ノ偽造、變造又ハ偽貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ未遂罪 第七節 收得後偽貨ノ知情行使若クハ知情交付罪

貨タルコトヲ覺知シ之ヲ眞貨ナリトシテ行使スルノ行爲及ヒ行使ノ目的ヲ以テ人ニ交付スルノ行爲ヲ處罰スルノ必要アルハ論ヲ俟タス。左ニ注意ス可キ諸點ニ付キ略説ス可シ。

本罪ノ客體タル通貨

(一) 本罪ノ客體タル通貨。法文ニ所謂貨幣紙幣、銀行券トハ第五節(刑一五)ニ於テ説明シタルト同一理由ニ依リ獨リ内國通用ノ貨幣紙幣、銀行券ノミナラス内國ニ流通スル外國ノ貨幣紙幣、銀行券モ亦之ヲ包含スルモノト解スルヲ相當トス。

本罪ヲ構成ス可キ行爲

(二) 本罪ヲ構成ス可キ行爲。偽造、變造タルコトヲ知ラスシテ偽貨ヲ收得シタル後偽貨タルコトヲ覺知シ之ヲ行使シ又ハ行使ノ目的ヲ以テ人ニ交付スルノ行爲アルニ依リ成立ス。而シテ偽貨ノ行使及ヒ行使ノ目的ヲ以テスル偽貨ノ交付トハ如何ナル意義ヲ有スルヤニ付テハ第三節ニ於テ之ヲ説明シタルカ如シ。而シテ行使ハ有償行爲タルコトアリ、無償行爲タルコトアリ又其他ノ行爲タルコトアルハ前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。然ルニ

詐欺罪ノ關係ト

若シ行爲者カ偽貨ヲ行使シ其對價ヲ受取リ其他財産上不法ノ利益ヲ得タル場合ニ於テハ偽貨ノ行使ヲ手段トシテ詐欺罪ヲ犯シタルモノナリ。故ニ此場合ニ於テハ第五十四條第一項ヲ適用シ詐欺罪ニ依リ處斷ス可キモノトス(尤モ行使カ有償行爲ナルトキナリ)。

第八節 通貨ノ偽造、變造ノ準備ノ罪

第百五十三條 貨幣、紙幣又ハ銀行券ノ偽造又ハ變造ノ用ニ供スル目的ヲ以テ器械又ハ原料ヲ準備シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス。

刑法上犯罪ノ豫備ノ所爲ハ之ヲ罰セサルヲ原則トス。之ヲ罰スルカ如キハ例外ニ屬スルモノニシテ皇室ニ對スル罪、内亂ニ對スル罪、外患ニ對スル罪、放火罪、殺人罪ノ如キ極メテ重キ罪ニ對シ之ヲ認ムルニ過キス。貨幣、紙幣、銀行券ノ偽造又ハ變造ノ用ニ供スル目的ヲ以テ器械又ハ原料ヲ準備スルノ行爲ヲ罰ス可キ旨ヲ定メタル本罪モ亦豫備ノ所爲ヲ罰スルノ一例ニ外ナラス。唯タ法律ハ他ノ場合ノ如ク抽象的ニ規定セスシテ偽造又ハ變造ノ用ニ供ス

ニ無期又ハ三年以上ノ懲役ニ該リ、内國ニ流通スル外國通貨ノ偽造、變造又ハ偽造若クハ變造シタル内國ニ流通スル外國通貨ノ行使、交付若クハ輸入ハ二年以上ノ有期懲役ニ該リ、偽造、變造ノ通貨收得ハ三年以下ノ懲役ニ該當ス。通貨ノ偽造、變造及ヒ偽貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ未遂ハ總則ノ規定ヲ適用處斷ス可ク、收得後偽貨ノ知情行使若クハ知情交付ハ其行使若クハ交付シタル偽貨ノ名價ノ三倍以下ノ罰金又ハ科料ヲ以テ處斷ス可ク但シ之ヲ一圓以下ニ降スコトヲ得サルモノトス。通貨ノ偽造、變造ノ準備ハ三月以上五年以下ノ懲役ヲ以テ處斷ス可キモノトス。

第三章 印章偽造ノ罪

第一節 印章偽造罪ノ觀念

印章偽造罪ノ各罪ニ對シ説明スルニ先チ印章偽造罪ノ性質並ニ法益及ヒ印章偽造ノ各罪ニ共通ナル客體及ヒ行爲ニ付キ略説ス可シ。

印章偽造
罪ノ性質
及ヒ法益

第一款 印章偽造罪ノ性質及ヒ法益

吾人ノ交通取引ハ相互ニ意思ヲ表示スルニ依リテ行ハル。意思表示ハ或ハ之ヲ口頭ヲ以テ爲シ或ハ之ヲ書類ヲ以テ爲ス。而シテ口頭ヲ以テ爲ス意思表示ハ直ニ消滅シテ其證據ヲ失フコト少シトセサレハ少シク正確ヲ貴フ事項若クハ後日ノ證據ヲ必要トスル事項ニ至リテハ之ヲ書類ヲ以テ明確ニスル必要アリ。

時勢ノ進歩ト交通取引ノ擴大トニ伴ヒ吾人ノ交通取引ニ書面ヲ必要トスル場合愈々益々増加スルニ及ヒテ書類ノ偽造ヲ罰シ書類ニ對スル信用ヲ保護シ以テ社會ノ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ヲ保護スル必要モ亦愈々益々大ナルニ至レリ。而シテ書類ハ之ヲ作製シタル者若クハ之ヲ承認シタル者ノ誰ナルヤカ明ナルニ依リ證據力ヲ有スルモノナリトス。而シテ若シ其書類ニ作製者若クハ承認者ノ印章又ハ署名ノ存スルトキハ之ニ由リテ證據力ヲ生シ又ハ其證據力ヲ増大セシム可キナリ。又斯ノ如ク始ヨリ證據物ト

シテ作製セラレタル物ニ非サル書類其他ノ物ト雖モ之ニ印章又ハ署名ノ存
スルト否トニ依リ其信據力ニ重大ノ關係ヲ有スルヲ常トス。

我國ニ於テハ印章ハ特ニ重大視セラレ書類ニ印章ナキトキハ草案ノ如ク
看做サル、ノ傾アリ。而シテ其書類ニ印章ノ押捺アルトキハ印章盜捺ノ事
實ニシテ證明セラレサル限りハ殆ト確定不動ノ證據力ヲ有スルモノト認め
ラル。故ニ印章偽造ノ罪ヲ特ニ重罰シ以テ交通取引ノ安全ヲ保護スル必要
アリ。我國ト歐米各國トノ交通取引益々頻繁トナルヤ歐米各國ニ於ケル慣
習特ニ署名ヲ以テ書類ノ作製又ハ承認ノ證據ト爲スノ慣習ハ之ヲ斟酌セサ
ル可カラサルニ至レリ。現行商法ニ於テハ從來ノ記名捺印ニ代フルニ署名
ヲ以テスルニ至レリ。我國ニ於テ久シク捺印ヲ重視シタル慣習アリテ署名
ノミヲ以テスルノ取引ヲ以テ不便トスル者多カリシニ依リ商法中署名ス可
キ場合ニ於テハ記名捺印ヲ以テ署名ニ代フルコトヲ得可キ旨ノ法律(三三三
號一七)ヲ見ルニ至レリ。又我國ノ法令中捺印ヲ要ス可キ旨ヲ規定シタルモノ

甚々尠カラス。此場合ニ於テ外國人ハ署名ヲ以テ署名捺印ニ代フルコトヲ
得可キモノトス(三三〇號法律)。

以上説明ノ如ク印章又ハ署名ハ交通取引ノ必要ナル媒介物タル文書ニ對
シ信據力ヲ與ヘ又ハ其信據力ヲ増大ナラシムルモノナレハ印章又ハ署名ノ
偽造ヲ罰シ以テ印章又ハ署名ノ信用ヲ保護スルハ交通取引ニ於ケル誠實及
ヒ信用ヲ保護スル所以ナリ。故ニ印章偽造ノ規定ニ依リ保護セラル、法益
ハ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ナリ。若シ此罪ノ規定ニ依リ保護セラル
ル法益ハ専ラ印主又ハ署名者タル個人ノ利益ナリト謂ハンカ本人ニハ何等
實害ナク専ラ第三者ヲ害スルカ爲メ他人ノ印章ヲ偽造スル罪及ヒ死者ノ印
章ヲ偽造又ハ盜用スル罪ニ關シテハ到底満足ナル説明ヲ爲ス能ハサル可シ。

第二款 客體

印章及ヒ署名ノ二者ハ印章偽造罪ノ客體ナリ。而シテ印章若クハ署名ノ
意義如何ハ一見明瞭ナルカ如クシテ然ラサルモノアリ。左ニ之ヲ略說セン。

第一 印章

第三編 交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ニ對スル罪

二七二

印章ハ之ヲ分テ御璽、國璽、公務所ノ印章、公務員ノ印章、公務所ノ記號及ヒ私人ノ印章ノ六ト爲スコトヲ得。而シテ此等ノ印章ノ各特質ニ付テハ之ヲ第二節以下ニ説明ス可シト雖モ茲ニハ一般ニ印章トハ如何ナル意義ヲ有スルカヲ説明ス可シ。

印章トハ眞確ヲ證明ス可キ影蹟ノ原體即チ印願ノミヲ稱スヘキモノナルヤ又ハ眞確ヲ證明ス可キ影蹟即チ印影ノミヲ稱ス可キモノナルヤ議論ノ岐ル、所ナリト雖モ余ヲ以テ之ヲ見レハ印願及ヒ印影ノ二者ヲ以テ法律ノ所謂印章ナリト解スルヲ以テ相當ナリト思考ス。印願及ヒ印影ハ共ニ之ヲ印章ナリトスル見解ハ從來ノ判例ニ於テ一般ニ認メラレタル所ニシテ我邦一般ニ使用セラル、用語ト一致ス。若シ夫レ獨リ印願ノミヲ以テ印章ナリト解スルカ如キハ印章ニ關スル法益ノ保護ヲ薄弱ナラシムルノ虞ナシトセス。此解釋ニ從ヘハ例ヘハ印願ニ依ラスシテ印影ヲ偽造スルノ所爲ハ之ヲ印章

偽造罪ニ非スシテ之ヲ不問ニ付セサル可カラス。例ヘハ行使ノ目的ヲ以テ朱肉ヲ使用シ一見眞物ト信セラル、カ如キ印影ヲ巧ミニ文書ニ描寫スル所爲ハ之ヲ無罪ナリト爲サ、ルヲ得サルニ至ル可シ。又獨リ印影ノミヲ以テ印章ナリトスル見解モ亦印章ニ關スル法益ノ保護ヲ薄弱ナラシムルノ嫌アリ。此解釋ニ從ヘハ印願ヲ偽造スルモ未タ押捺セサル間ハ之ヲ不問ニ付セサルヲ得ス。例ヘハ行使ノ目的ヲ以テ御璽、國璽ヲ偽造シ公然携帯シ居ル者在ルモ未タ之ヲ押捺セサル以上ハ之ヲ不問ニ付セサルヲ得サル結果ヲ生スルニ至ラン。學者或ハ信用ヲ害スルハ印願ノ偽造ニ非スシテ印影ノ偽造ニ在リ故ニ法文ニ所謂印章トハ印影ノミヲ指稱スト説明スルカ如キハ相當ナラス。一個ノ印影偽造ヨリハ一個ノ印願偽造ノ危險ノ遙ニ大ナルハ何人モ爭ハサル所ナル可シ。若シ夫レ單ニ實害發生ノ點ヨリ言ヘハ印章カ偽造セラレタルモ未タ之ニ由リテ現實ノ害惡ヲ生シタリト謂フニ足ラス。又偽造ノ印章カ押捺セラレタルモ未タ之ニ由リテ現實ノ害惡ヲ生シタリト謂フニ

足ラス。更ニ進テ偽造印章カ文章ニ使用セラレタルモ未タ之ニ由リテ現實ノ害惡ヲ生セス。其現實ノ害惡ヲ生シタリト稱シ得可キハ偽造印章ヲ使用セラレタル文書カ行使セラレタル場合ニアリ。故ニ論者カ實害發生ノ如何ヲ以テ最モ重要ナル根據ト爲シ印章トハ印影ノミナリト説明スルカ如キハ何等ノ理由ナキモノトス(註一八ノ二)。

(註一八ノ二) (一) 同趣旨 大審院判例、民刑局長回答。

判例ニ曰ク『印章ノ偽造(刑法第六十七條第一項)トハ管ニ其影跡ヲ現出シタル場合ノミナラス他人ノ事實證明ノ用ニ供スル文字又ハ符號ヲ刻セル印願其物ノ偽造ヲ完成シタル場合ヲモ包含スルモノトス(四四年大審院判決二〇九三頁)。又曰ク『稅務監督局織物査定濟ノ證ナル紙票ハ當局官吏カ納稅濟又ハ移出許可ノ證トシテ使用ス可キモノナルモ毛織物以外ノ織物ニ之ヲ貼用シ證印ニ代用スルモノナレハ刑法第六十六條ノ所謂官ノ記號ニ外ナラス(四二年八〇三頁)。民刑局長回答ニ曰ク『刑法ニ所謂印章トハ印願及ヒ印影ヲ包含ス但シ印願ヲ偽造シ印影ヲ現出セシメタル場合ハ單ニ印章偽造ノ一罪ヲ以テ處斷ス可キモノトス(四二年五月二七日民刑八五號回答)』。

(二) 第一異說 印章トハ印願ヲ謂フ。江木衷、勝本勘三郎、小崎傳藏氏。

江木衷氏曰ク『印章トハ信確ヲ證スル用ニ供スル記號ノ原體即チ印願ヲ謂フモノニシテ自署ノ氏名、花押其他既ニ文書ニ採用シタル影蹟ハ原體ニ非サルヲ以テ之ヲ印章ト謂フコトヲ得ス』(現行刑法原論一四三頁)。勝本勘三郎氏曰ク『印トハ或物體ノ表面ニ存スル一定ノ形狀ヲ他ノ物體ニ押捺シテ常ニ一定ノ影蹟ヲ永久的ニ現出セシメ以テ或

事實ヲ證明スルノ用ニ供スルモノニシテ濕用ノモノトアリ(刑法新義上卷四四七、四四八頁、刑法各論講義二五二頁)。小崎傳藏氏曰ク『印トハ或物體ノ一面ニ存在スル一定ノ形狀ヲ他ノ物體ニ押捺シテ常ニ一定ノ影蹟(印影)ヲ永久的ニ現出セシメ以テ或事實ヲ證明スル用ニ供セラル、モノ(印願)ニシテ(中略)一部ノ學者ハ印トハ印影ヲ指シ印願ノ偽造ハ未タ印ノ偽造ト謂フヲ得スト論スル者アルモ普通ノ用語ニ於テ印トハ印願ヲ指シ印願ハ影蹟ト區別ス可ク法文ニ於テモ影蹟ト列然ニ之ヲ區別シテ規定シタル(新法ニハ此區別ナシ)ニ依テ見レハ印トハ印願ヲ指シ印ノ偽造ハ印願ノ偽造ヲ以テ成立シ之ヲ押捺シタルト否トハ問フ所ニ非ス』(日本刑法論各論二八八、二八九頁)。

(三) 第二異說 印章トハ印影ヲ謂フ。岡田朝太郎、泉二新熊、牧野英一諸氏。

岡田朝太郎氏曰ク『官印若クハ私印ト謂ヘルハ印願ノ意味ナルヤ或ハ印影ノ意味ナルヤ、(中略)、法律カ官印又ハ私印ノ偽造行使ヲ罰スル所以ノ法理ニ遡リテ考フレハ寧ロ印影ヲ指スト解スルヲ正當ナリトセンカ。抑モ此等犯罪ハ入ノ信用ニ關スル實害又ハ其實害ノ危險ヲ豫防スルノ精神ニ出テタリ印願ハ之ヲ文書又ハ其他ノ物ニ押捺シ其文書又ハ物品ヲ行使スルニ由リ初メテ斯ノ如キ實害又ハ危險ヲ生ス可シ。故ニ影蹟ヲ現ハス材料ニ過キサル印願ノ如キハ之カ製造成ルモ印ノ偽造ハ尙ホ未タ成立シタリト謂フヲ得スト謂ハサル可カラズ』(刑法講義一〇六頁)。泉二新熊氏曰ク『印章トハ法律上ニ於テ關係アル事實證明ノ用ニ供スル爲メ一定ノ文字又ハ符號ヲ刻記シタル物體(印願)ヲ他ノ物體ニ押捺シテ現出セシムル影蹟(印影)ヲ謂フ。舊刑法ニ於テハ印トハ其影蹟トハ區別シタルカ故ニ印トハ即チ印願ヲ指スモノトシ印ノ偽造トハ即チ印願ノ偽造ニ外ナラズト解スルヲ通例トシタルトモ(中略)。信用ヲ害スルハ印願其モノ、偽造ニ非スシテ印影ノ偽造ニアリ。且ツ新刑法ニ於テハ印章ノ偽造ト署名ノ偽造トハ同一ニ處分スル點ヨリ觀察スルトキハ署名ノ偽造カ氏名ノ記載ニ依テ成立スルト等シク印章ノ偽造ハ印影ノ現出ニ依テ成立スルモ

第三章 印章偽造ノ罪 第一節 印章偽造罪ノ觀念

ノト解スルヲ穩當ナリトス。要スルニ印章偽造ノ罪ニ於ケル目的物ハ印類其モノニ非スシテ印影ナリ『日本刑法論
七〇二、七〇三頁。牧野英一氏曰ク『余輩ハ新刑法ノ解釋トシテハ印影ヲ探ラン。欲ス。夫レ文書偽造罪ニ關ス
ル第一五五條及ヒ一五九條ハ印章ニ關スル行爲ヲ伴フ場合ト否トニ依テ其刑ヲ異ニス。惟フニ其理由トスル所ハ印
影アル文書ヲ取引上其信用カ多キニ依ルト云フ點ニ在ル可シ(中略)。從テ余輩ハ本章ノ所謂印章モ亦之ヲ印影ノ義
ニ解スルヲ相當ト信スルナリ』(刑法通義二版二五五、二五六頁)。

第二 署名

署名トハ人格者ノ名稱ノ記載ナリ。之ヲ自然人ニ就テ言ヘハ其氏名ノ記
載ナリ。法人ニ就テ言ヘハ其名稱ノ記載ナリ。又公務所ニ就テ言ヘハ其公
務所ノ名稱ノ記載ナリ。公務員ニ就テ言ヘハ其職名並ニ氏名ノ記載ナリ。
然レトモ氏名、名稱又ハ職名等ハ必スシモ完全ニ之ヲ記載スルコトヲ要セス
其何人ヲ指稱スルヤヲ知ルヲ得ルヲ以テ充分ナリトス(註一八ノ二)。

(註一八ノ二) 同趣旨 大審院判例。判例ニ曰ク『荷モ一定ノ人カ自己ヲ表彰スル爲メ用フル名稱ナル以上ハ其氏名
ヲ記載スルト商號其他ノ符號ヲ記載スルトナ同ハス刑法上之ヲ署名ト認ムヘキナリ』(四三年大審院判決錄四一四
頁)。又曰ク『刑法ニ所謂署名トハ通例文字ヲ以テ氏名ヲ表記セルモノヲ指稱スルトモ單ニ片假名ヲ用ヒ其氏ノミヲ
表記シタル場合ニ於テ之ヲ署名ニ非スト謂フヲ得ス』(一定ノ關係アル者ノ間ニ於テハ單ニ氏若クハ名ノミヲ以テス

ルモ其人ヲ表彰スルニ足ルカ故ニ氏若クハ名ノミヲ表記スルモ之ヲ署名ト謂ハサルヲ得ス(同上七四頁)。

署名トハ自署ナリト解ス可キ場合アリ。例ヘハ商法ニ於テ外國人カ我法
律ニ於テ署名若クハ捺印ヲ要ス可キ場合ニ於ケル署名ノ如キ是ナリ(三三年
法律第五〇號)。又例ヘハ商法ニ從ヒ約束手形又ハ爲替手形ノ振出人、裏書人、
引受人トシテ署名スルカ如キ場合及ヒ刑事訴訟法ニ從ヒ官吏、公吏カ起訴狀
呼出狀ニ其作製者トシテ署名スルカ如キ場合ニ於テ振出人、裏書人、引受人又
ハ官吏、公吏ノ自署ヲ要スルカ如シ(刑訴二〇條)。又署名トハ其性質上單ニ名稱ノ
記載ニ過キサル場合アリ。法人若クハ公務所ノ如キハ其性質上其署名ニハ
名稱ノ記載アルノミ。自然人若クハ公務員ノ如ク其性質上自署ヲ爲シ得可
キモノニアリテモ自署ヲ要セサル場合甚タ少カラス。通常ノ往復文通ノ記
名ノ如キ又捺印アル證書ノ署名ノ如キハ其例ナリ。而シテ本罪ノ客體タル
可キ署名ハ自署ノミニ非スシテ一般ニ人格者ノ氏名又ハ名稱ノ記載ナリ。
署名ハ獨立シテ本罪ノ客體タルニトアリ。此場合ニ於テハ自署ノ偽造タ

ル場合最モ多カル可シ。署名ハ印章ト共ニ本罪ノ客體タルコトアル可シ。此場合ニ於テハ自署名ニ非サル署名ノ偽造タル場合少カラサル可シ。蓋シ前者ノ場合ニ在リテハ自署名ニ非サレハ信據力弱キヲ常トスレトモ後者ノ場合ニ在リテハ印章ヲ以テスル證明存スルヲ以テ必スシモ自署名アルヲ要セサル場合多ケレハナリ。

第三款 印章偽造罪ヲ構成ス可キ所爲

印章偽造
罪ヲ構成
ス可キ所
爲

印章偽造罪ヲ構成ス可キ所爲ハ之ヲ第一印章又ハ署名ヲ偽造スルノ行爲第二偽造ノ印章又ハ署名ヲ使用スル所爲第三真正ナル印章又ハ署名ヲ不正ニ使用スルノ所爲ノ三ト爲スコトヲ得。左ニ之カ略説ヲ試ム可シ。

第一 印章又ハ署名ノ偽造

印章又ハ
署名ノ偽
造

印章又ハ署名ノ偽造ハ行使ノ目的ヲ以テ之ヲ爲シタル場合ニ限り之ヲ罰ス可キモノトス。故ニ先ツ行使ノ目的ヲ以テスル印章又ハ署名ノ偽造トハ如何ナル意義ヲ有スルヤヲ明ニスル必要アリ。

行使ノ目
的ヲ以テ
スル偽造
ノ意義

(一) 行使ノ目的ヲ以テスル偽造ノ意義。印章又ハ署名カ書類ニ存スルトキハ之ニ由リテ書類ヲシテ其信據力ヲ生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシム可キコト前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。印章若クハ署名ノ偽造ハ之ヲ文書其他ノ物ニ使用スルノ目的アルニ非サレハ實害ヲ發生スト言フニ足ラス又之ヲ文書其他ノ物ニ使用スルモ之ヲ行使スルノ目的アルニ非サレハ實害ヲ發生スト言フニ足ラス。故ニ印章又ハ署名ハ之ヲ文書其他ノ物ニ使用シ之ヲ行使スル目的ヲ以テ偽造スル場合ニ限り實害ヲ發生ス可ク從テ之ヲ罰ス可キ必要アリト謂フ可シ。之ヲ我法文ノ上ヨリ言ヘハ印章又ハ署名ヲ文書其他ノ物ニ押捺若クハ記載スルノ行爲ハ之ヲ印章若クハ署名ノ使用ト謂ヒ(刑一六七條)印章又ハ署名ヲ使用シタル文書其他ノ物ヲ人ニ示シテ事實關係證明ノ用ニ供スルノ所爲ハ之ヲ行使ト謂フ。左レハ法文ニ所謂行使ノ目的ヲ以テ印章又ハ署名ヲ偽造ストアルハ之ヲ解シテ印章又ハ署名ヲ文書其他ノ物ニ使用シ之ヲ行使スルノ目的ヲ以テ之ヲ偽造シタル

場合ニ限り之ヲ罰ス可キ旨ヲ定メタルモノト認ム可キナリ。即チ印章偽造罪ハ虚偽ナル信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ偽印又ハ偽署ヲ書類其他ノ物ニ使用シ之ヲ行使スル目的ヲ以テ印章又ハ署名ヲ偽造スル場合ニ限り罪ト爲ルモノト解ス可キナリ。

印章偽造ノ意義

(二)

印章ヲ偽造ストハ人ヲシテ真正ナル印章ナリト信セシムル虞アル偽印ヲ作製スルヲ謂フ。偽印ニシテ人ヲシテ眞印ナリト信スルノ虞ナキモノタラシメハ之ヲ作製スルノ行爲ヲ以テ偽造ナリト謂フ能ハス。之ニ反シテ偽印ニシテ人ヲシテ眞印ナリト信セシムル虞アルモノタラシメハ眞印ニ類似セサルモ尙ホ之ヲ作製スル行爲ヲ以テ印章ヲ偽造スル行爲ナリト謂フ可シ。若シ夫レ印章偽造罪ヲ構成スルニハ偽印ニシテ眞印ニ類似スルコトヲ以テ必要條件ナリト爲サンカ印章ヲ所持セサル者ノ印章ヲ偽造スルノ行爲ハ之ヲ不問ニ付セサルヲ得サルニ至ル可シ。左レハ學者或ハ印章偽造罪ヲ構成スルニハ眞印ニ模擬スルヲ以テ必要ナ

リト論スルカ如キハ相當ナラス。又法文ニ御璽、國璽又ハ御名、署名トアルヲ以テ此罪ヲ構成スルニハ常ニ印章又ハ署名ニ依リ表示セラル可キ人格者ノ印章、署名ヲ偽造スルコトヲ必要ト爲シタルコト明ナリ。左レハ學者或ハ實在セサル人格者例へハ虚無ノ官署又ハ人ノ印章又ハ署名ヲ偽造スルモ尙ホ此罪ヲ構成スルカ如ク論スルハ相當ナラス。元來印章偽造罪ハ虚偽ナル信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ偽印ヲ書類其他ノ物ニ使用シ之ヲ行使スル目的ヲ以テ之ヲ偽造スル場合ニ限り罪ト爲ルモノナルコトハ前既ニ述ヘタルカ如シ。而シテ印章又ハ署名ニ依ル信據力ハ印章又ハ署名ニ依リ表示セラル、人格者カ實在シ又ハ實在シタルコトニ依リ生スルモノナレハ現ニ實在セス又ハ嘗テ實在シタルコトナキ人格者ノ印章又ハ署名ニ依リ何等信據力ヲ發生スル筈ナク更ニ極言スレハ實在セサル人格者ノ印章又ハ署名ノ如キハ之ヲ印章又ハ署名ト謂フ能ハサレハ論者カ虚無ノ人格者ノ印章又ハ署名ヲ偽造スルノ所爲モ亦犯罪

ヲ構成スト説明スルカ如キハ獨リ法文ニ矛盾スルノミナラス法理上何等ノ理由ナキモノトス。然レトモ茲ニ反覆シテ注意ス可キハ印章又ハ署名ニ依リ表示セラル、人格者アル以上ハ之ヲ表示スル印章又ハ署名ハ實在ノ人格者ノ名稱若クハ氏名ト正確ニ一致スルコトヲ要セス。人ヲシテ其人格者ノ印章若クハ署名ナリト誤信セシムルノ虞アルヲ以テ足ルノ一事是ナリ(註一九ノ一)。

一九ノ一(一) 同憲旨 大審院判例、勝本、泉二、牧野諸氏。

判例ニ曰ク『荷モ實在セル官署ノ印ナリトシテ人ヲ欺クニ足ル可キモノヲ偽造スルトキハ官印偽造罪ヲ構成ス。從テ眞印存在スルト否トハ犯罪ノ成立ニ何等ノ影響ナシ』(三八年大審院判決録二一七頁)ト。又曰ク『郵便電信局ノ印章ヲ偽造スルニ當リ電信ノ二字ヲ遺脱スルモ官印偽造罪ノ構成ヲ妨ケス』(三一年一〇卷一五頁)ト。又曰ク『官印偽造罪ノ成立ニハ其偽造印方眞印ニ模擬スルヲ必要トセス。官署ノ印章トシテ人ヲ欺クニ足ルヲ以テ十分ナリトス』(三三年三卷五一頁)ト。同主旨(二九年六卷一〇一頁)又曰ク『某村ノ戸籍吏ノ名稱ヲ冒シテ其印章ヲ偽造シタル以上ハ縱令同村所屬ノ行政區劃ノ表示ヲ誤リタル場合ト雖モ其所爲ハ實在セル公署ノ印ヲ偽造シタルモノニ該當シ刑法ノ制裁ヲ免レサルモノトス』(三九年五五二頁)ト。又曰ク『官ノ記號印章タル形體ヲ存スル以上ハ寸法文體ヲ模擬セサルモ其犯罪ヲ成立ス』(二九年二卷七二頁)ト。又曰ク『私印偽造行使罪ノ成立スルニハ偽造ニ係ル印章カ人ヲシ

テ眞印ナルコトヲ信セシム可キ程度ニ偽造セラレタルヲ以テ足ル。而シテ其偽印ノ眞印ニ酷似スルト否トハ之ヲ問フノ要ナシ』(三五年六卷二八頁)ト。勝本氏曰ク『官印ハ(中略)多クノ場合ニ於テハ私印ト同シク豫メ一定ノ形式ナキカ故ニソカ偽造ハ必シモ既存ノ物件ヲ模擬スルヲ要セス。私印、私文書ノ場合ト同シク官公印タルヲ信セシム可キ形式ニ從ヒ作製者ノ權利ヲ害シテ作製セラレ一見官公印タル可シト信セシム可キ程度ニ達シタルモノハ偽造タルモノトス』(刑法各論講義二五四、二五五頁)ト。泉二氏曰ク『實在ノ公務所名又ハ公務員職名ヲ表示スルニ足ルトキハ文字ニ多少ノ差異アルモ偽造罪ヲ構成スルコトヲ得可ク、又眞印ト偽印トハ形狀ニ於テ酷似スルコトヲ要セス、一般ノ人ヲシテ誤信セシムル程度ニ在ルヲ以テ足ル。私用ノ印章、署名ノ偽造ハ自己以外ノ實在ノ人格者ノ印章、署名ノ偽造ナリ。虛無ノ人格ヲ表章スルモノハ本罪ヲ構成セサルコト虛無ノ人格者ノ文書ヲ偽造スル場合ニ於テ犯罪ヲ認メサルニ同シ。然トモ偽造ニ係ルモノカ眞正ノモノニ酷似スルコトヲ要セス』(日本刑法論七〇八、七〇九頁)ト。牧野氏曰ク『官印偽造ハ必シモ實在セル官署ノ名義ヲ以テスルヲ要ナシ。官署ノ名稱ニ多少ノ相違アルモ苟モ實在セル官署ヨリ出テタルモノトシテ人ヲ欺クニ足ルトキハ官印偽造ナリ』(刑法通義二九八頁)ト。又曰ク『印章偽造ハ其印章カ實物ニ類似スルコトヲ必要トセス。一般ノ場合ニ於テ人ニ眞印ナリト信セシムル程度ノモノタルヲ以テ足ル。但シ印類其モノハ人ヲ錯誤ニ陥ル、ニ足ルモノタルコトヲ要セス』(同二九九頁)ト。

(二) 第一異説 眞印ニ模擬スルコトヲ要ス。

江木氏曰ク『所謂偽造ナルモノハ眞正ヲ模擬スルモノナレトモ貨幣ト異ニシテ各人ノ私印ハ實印ト否ヲサルモノトナ間ハ法律上致テ之ヲ公示セルモノニ非サレハ其眞正ヲ模擬センニハ先ツ本人ノ所持セル印章ノ形狀ヲ了知セルモノニ非サレハ到底之ヲ模擬スルコト能ハサルナリ。單ニ他人ノ名義アル印章ヲ偽造シタルハトテ其眞印ニ類似ス

ル所ナケレハ之ヲ以テ印章ノ偽造ト謂フコトヲ得サル可シ。現行刑法原論一四四頁。

(三) 第二異説 官印ノ方式カ法令ニ於テ定メラレタルトキハ眞物ニ酷似スルコトヲ要ス。然ラサルトキハ人ヲシテ眞印ナリト誤信セシムルニ足ルヲ以テ充分ナリ。私印ニ付テハ全ク存セサル人ノ印章、署名ハ偽造モ有罪ナリ。岡田朝太郎氏曰ク『管テ貨幣偽造罪ノ説明ニ於テ貨幣法ニ基キ現ニ存スル通貨ナラサル可カラスト述ヘタル所以ハ通貨カ一個ノ法令ニ依リ其形式カ國法上一定サル、ヲ以テナリ。若シ此論ニシテ誤ナシトスレハ官印ニ付テモ同一標準ニヨリ區別ヲ立テサル可カラス。今日我日本ニ於テ官署、公署等ニ使用スル印類ハ多クハ法令ニ依リ其形式ヲ定メラレタリト雖モ尙ホ然ラサルモノ抄シト爲サス。故ニ其大小、形状、文字、紋章等カ法令ニ依テ定メラレタルモノハ眞物ニ酷似スルコトヲ要シ、然ラサルモノハ人ヲシテ眞物タル如ク誤信セシムルニ足ルヲ以テ十分ナリト解釋セサル可カラサルニ似タリ』(刑法講義一〇八頁)。又曰ク『原來私文書ハ人ヲシテ其證據力ニ倚賴セシムルノ方法ニ因リ他人ヲ欺クモノナルカ故ニ之ヲ用ヒタル事實ハ作成者ノ名義ナルト又其内容タル事實タルトナ間ヘス其虛偽ナルコトヲ以テ本罪ノ特色トス。果シテ然ラハ全ク存セサル人ノ名義ヲ用フルト、使用者ノ生前ノ名義ヲ使用スルト、又管テ實際使用シタル印影ヲ使用スルト、全ク人ノ所持シタルコトナキ印影ヲ使用スルトナ間ハ悉ク有罪ナリト謂ハサル可カラス』(同一三六頁)。

(四) 第三異説 人ヲシテ眞物ナリト誤信セシムルニ足ルヲ以テ充分ナリト雖モ偽印ニ依リ表示セラルル者(官署若クハ人)ハ虚無ナルト否トハ之ヲ問フ所ニ非ス。小幡傳氏曰ク『偽造トハ真正ノ御璽、國璽又ハ官署ノ印ニ非サルモノヲ普通ニ人ヲシテ眞物ナリト誤信セシムルニ足ル所ノ影ヲ現出ス可キ印類ヲ新クニ作成スルコトヲ謂フ。(中略)苟クモ普通ニ人ヲシテ眞實ナル官署ノ印ナリト信セシムルニ足ル以上ハ其官署ハ實在スルコトヲ要セス』又偽印ニ依テ代表セラルヘキ人カ虚無ノ人ナルト否トハ問フ所ニ非ス』(日本刑法論各論二九三、二九四、三八二、三

署名偽造ノ意義

八三頁。

(三) 署名偽造ノ意義。署名ヲ偽造ストハ行使ノ目的ヲ以テ權限ナク又ハ承諾ナク人格者ノ氏名又ハ名稱ヲ記載スルヲ謂フ。行爲者自身ノ署名ヲ記載スル場合ト雖モ之ニ權限ナク又ハ承諾ナクシテ他ノ人格者ノ代理者タル資格ヲ冠セシムル如キハ等シク之ヲ署名偽造ナリト解スヘキナリ。何トナレハ此場合ニ於テモ權限ナク又ハ承諾ナクシテ他ノ人格者ノ署名ヲ濫用スル點及ヒ之ヨリ生スル效力ノ點ニ於テ單ニ他ノ人格者ノ署名ヲ記載スル場合ト異ナル所ナケレハナリ(註一九ノ二)。實際ニ於テ一個人ノ署名ヲ偽造スル場合ハ本人ノ筆蹟ニ模擬スルヲ通常トスレトモ本人ノ筆蹟ヲ模擬スルコトハ此罪ノ構成要件ニ非ス(公務所ノ署名ヲ偽造スル行爲ヲ罰一六五條參一項)。

(註一九ノ二) 同趣旨 大審院判例ニ曰ク『他人ノ代理人トシテ公正證書ニ署名スル場合ニ於テ其署名ハ代理者自身ノ爲メニ之ヲ爲スニ非スシテ本人ノ爲メニ之ヲ爲スモノナレハ本人ニ對シテ其效力ヲ生スルモノナリ故ニ他人ノ代理者タル資格ヲ冒シテ公正證書ニ署名シタルトキハ其效果ハ直接ニ其他人ノ署名ヲ之ニ冒用シタル場合ト擇ム所ナク所論ノ事實ニ對シテ第六十七條第一項ヲ適用シタルハ相當ナリ』(四四年大審院判決錄一二八三頁)。

偽造ノ印
章又ハ署
名ノ使用
ノ意義

第二 偽造ノ印章若クハ署名ノ使用

(一) 偽造ノ印章又ハ署名ノ使用ノ意義。印章若クハ署名ハ之ヲ書類其他ノ物ニ押捺シ又ハ書類ニ記載シテ其信據力ヲ生セシメ若クハ信據力ヲ増大ナラシムル用ニ供セラル、モノナリ。偽造ノ印章又ハ署名ヲ使用ストハ書類ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ増大ナラシムル爲メ之ヲ書類其物ニ使用スル意義ニ外ナラス。而シテ之ヲ使用スル方法ニ二アリ。其一ハ書類ヲ作製シ之ニ偽造ノ印章ヲ押捺シ以テ偽印ヲ使用スル場合ニシテ其二ハ豫メ紙其他ノ物體ニ偽造シ置キタル印影若クハ署名ヲ利用シテ書類ヲ作製シ以テ偽造ノ印章又ハ署名ヲ使用スル場合ナリ。而シテ偽造ノ印章又ハ署名ヲ使用スル場合ニ付キ文書偽造罪ヲ構成スル場合ト之ヲ構成セサル場合トノ二アリ。而シテ偽造ノ印章若クハ署名ヲ使用スル罪ヲ以テ論ス可キ場合ハ其文書偽造罪ヲ構成セサル場合ニ限ル(註二〇)。例へハ某年月日ニ郵便はかきヲ受領シタル事實ヲ證明センカ爲メ偽造ノ郵便日付印ヲは

かき面ニ押捺スルカ如キ又例へハ一定ノ書類カ當該官吏ノ閱覽若クハ検査ヲ經タルコトヲ證明センカ爲メ偽造ニ係ル當該官吏ノ官印若クハ私印ヲ之ニ押捺スル所爲ノ如キ例へハ検査済ノ商品タルコトヲ證明センカ爲メ偽造ノ記號ヲ押捺スルカ如キハ偽造ノ印章(記號ヲ包含ス)ヲ使用スルノ罪ヲ構成ス可キ場合ノ適例ナリトス。

(註二〇) 同題旨 大審院判例、牧野、泉二諸氏。

判例ニ曰ク『刑法第六十七條第二項ハ印章若クハ署名ノ不正使用又ハ偽造印章若クハ偽造署名ノ使用ノ所爲カ他ノ犯罪行爲中ニ包含處罰セラル、コトナク獨立シテ一ノ犯罪ヲ構成スル場合ノミヲ規定シタルモノトス』(四二年大審院判決録六一頁)ト。同主旨(四二年五三六頁)。又曰ク『刑法第六十二條ニハ第五十五條、第五十九條等ニ於ケル如ク特ニ他人ノ印章若クハ署名ヲ不正ニ使用シ又ハ偽造シタル印章若クハ署名ヲ使用シ云々ノ文詞ナキモ有價證券ノ偽造、變造等ノ場合ニ於テハ偽造印章使用等ノ所爲ハ自ラ證券偽造ノ所爲中ニ包含處罰セラル、コト明カナルヲ以テ特ニ其旨ヲ明揭セサリシモノトス』(四二年六一頁)ト。同主旨(四二年八四二頁)。牧野氏曰ク『印章ヲ偽造シ且ツ其偽印ヲ利用シテ文書ヲ偽造スル場合ハ第十七章ニ入ル(第一五四條以下)。本章ノ規定ハ文書ヲ偽造スルコトナク單ニ印章ヲ偽造シテ之ヲ使用スル場合ヲ問セリ』(刑法通義三〇二頁)ト。泉二氏曰ク『之ニ依テ(印章若クハ署名ノ偽用ニ依テ)文書ヲ偽造シタル場合ニハ文書偽造罪ヲ構成スルニ止マル』(日本刑法論七〇九頁)ト。

第三章 印章偽造ノ罪 第一節 印章偽造罪ノ觀念

然ルニ學者或ハ偽造ノ印章又ハ署名ノ使用トハ書類其他ノ物ニ印章又ハ署名ヲ使用スルヲ以テ足レリト爲サズ更ニ進テ其印章又ハ署名ヲ使用シタル書類其他ノ物ヲ行使スル行爲アルニ依リ始メテ偽印、偽署名ヲ使用スルノ罪ヲ構成スルカ如ク説明スト雖モ斯ノ如キハ法文ノ所謂使用ナル文字ト行使ナル文字トヲ混同シタル嫌アルモノニシテ相當ナル解釋ナリト謂フ能ハス。若シ斯ノ如キ解釋ヲ採用スルトキハ例ヘハ虚偽ノ信據力ヲ發生セシムル爲メ他人ノ偽造ニ係ル御璽、國璽、官印又ハ私印ヲ書類其他ノ物ニ押捺スル行爲ノ如キ又例ヘハ虚偽ノ信據力ヲ發生セシムル爲メ御璽、國璽、官印又ハ私印ヲ盗用シテ書類其他ノ物ニ押捺スル行爲ノ如キハ之ヲ偽印使用若クハ印章盗用ニ非ストシテ不問ニ付セサルヲ得サルニ至ラン。故ニ斯ノ如キ見解ハ法文ノ使用ト行使トノ文字ヲ混同シタル失當アルノミナラス法文ヲシテ實際ノ必要ヲ充サシムル能ハス。且ツ印章又ハ署名ヲ偽造スル罪ニ比シ甚タシク權衡ヲ失スル不完全ノ甚タシキモノタラシ

ムルモノナリ。是レ決シテ我刑法ノ正解ト謂フ能ハス(註二)。尙ホ行使ノ目的ヲ以テ白紙ニ偽印ヲ押捺スルノ行爲ハ偽印使用罪ノ未遂罪ヲ構成ス可キモノトス(二九七、二九八頁ノ說明)。

(註二) 泉二、岡田、牧野、勝本諸氏。

泉二氏曰ク『印章若クハ署名ノ偽用(不正使用及ヒ偽物ノ使用)トハ印類ノ押捺若クハ署名ノ記載ヲ謂フニ非ス。印章(即チ印影)若クハ署名ヲ存セル物ノ使用ニ依リ其印章若クハ署名ヲ真正ニ使用スルカ如ク偽擬スルコトヲ要件トス』日本刑法論七〇九頁ト。岡田氏曰ク『官印ノ場合ハ使用ナル文字ヲ用ヒ文書ノ場合ニハ行使ナル文書ヲ用フルトモ何カ故ニ此ノ如キ異ナリタル文字ヲ用フルヤト謂ヘハ現行刑法(舊)ハ起草者ノ意思ヲ繼受シテ官印ノ場合ノ使用ハ影蹟ヲ現出シタル書類其他ノ物ノ行使ヲ謂フモノニシテ偽文書ノ場合ニ單ニ行使ト謂ヘルハ直ニ其文書ノ用ヲ滿タスノ意味ニ用フルト謂フ普通ノ解釋ヲ正當トス』刑法講義一〇九頁ト。牧野氏曰ク『印章ノ使用トハ印類ヲ使用シテ印影ヲ現在セシムル謂ニ非ス現出シタル印影ヲ使用スルノ謂ナリ。換言スレハ印影ヲ押捺シタル物件ヲ行使スルヲ謂フ』刑法通義二九九頁ト。勝本氏曰ク『貨幣偽造罪及ヒ文書偽造罪ノ各條ニハ行使ナル文字ヲ用ヒ官私印偽造罪ノ各條ニハ使用ナル文字ヲ用フルニ依テ之ヲ觀レハ是レ性質上兩者ハ之ヲ第三者ニ交付又ハ提出スルニ因テ其使用ヲ致シ後者ハ書類其他適當ノ物件ニ影蹟ヲ現出セシムルニ因テ其使用了ルカ故ニ彼此用語ヲ異ニシテ之カ區別ヲ明ニシタルモノニシテ茲ニ使用トハ依テ第三者ヲ錯誤ニ陥ラシムル以前ノ所爲ノミヲ謂フ可キカ如キモ使用ノ文字ニ相當スル佛文第一草案第二二八乃至二三〇條云々(援用ノ文字ヲ略ス)等ノ文字アリテ使用ノ押捺以後ノ所爲

タルコトヲ明言セルノミナラス本罪ノ信用ヲ害スル罪ニシテ信用ヲ害スルノ結果ハ偽造ノ印章ヲ押捺シタル書類其他ノ物件ヲ使用スルニ非サレハ生ズルモノニ非サルニ依テ之ヲ觀レバ茲ニ使用トハ行使ト同シク之ヲ押捺シタル書類其他ノ物件ヲ使用シテ他人ヲ欺クノ用ニ供シタルコトヲ謂フモノトス(刑法新義上卷四五二、四五三頁、刑法各論講義二五五、二五六頁)ト。

(二) 偽造ノ印章若クハ署名ノ意義。之ヲ法文ノ文字ニ拘泥シテ解スレハ行使ノ目的ヲ以テ偽造シタル印章又ハ署名ノミヲ以テ法文ノ所謂偽造シタル印章若クハ署名ト稱スルヲ得可シ(主觀的)。此見解ニ從ヘハ最初行使ノ目的ナクシテ作製シタル偽印若クハ偽署名ハ勿論行使ノ目的ヲ以テ偽造シタル場合ト雖モ偽造者本人カ之ヲ使用スル場合ニ非サレハ之ヲ法文ノ所謂偽造シタル印章若クハ署名ヲ使用シタル者トアルニ該當スルモノト謂フコトヲ得ス。然レトモ之ヲ法律ノ精神ト實際ノ必要トヨリ言ヘハ眞正ナラサル印章又ハ署名ニシテ眞印若クハ眞署名トシテ使用セラル、場合ニ於テハ偽印又ハ偽署名ト擇ム所ナケレハ法文ノ所謂偽造シタル印章又ハ署名トハ本人ノ承諾ヲ得スシテ作製セラレタル印章又ハ署名ト解ス可キナ

リ(客觀的)。此見解ニ從フトキハ作製者カ行使ノ目的ヲ以テ作製シタルト否トヲ問ハス又之ヲ使用スル者ノ何人タルヲ問ハス苟モ眞正ナル印章ニ非サルコトヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ悉ク法文ノ所謂偽造シタル印章又ハ署名ヲ使用シタル者トアルニ該當スルモノトシテ處罰スルヲ得可シ。蓋シ此見解ヲ以テ相當ナリトス。若シ夫レ主觀的見解ノ如クナラシメハ法律ニ於テ印章又ハ署名ノ偽造ヲ罰スル規定(刑一六四條一項一六五條一項)ヲ設クルヲ以テ充分ナリト爲ス可ク之ニ加フルニ偽造ノ印章又ハ署名ノ使用ヲ罰スルニ前ト同一刑期ヲ以テシタル所以ノ理由ヲ發見スル能ハサルニ至ル可シ。之ニ反シテ客觀的見解ニ從ヒ本人ノ承諾ヲ經スシテ作製セラレタル印章又ハ署名ヲ以テ偽造ノ印章又ハ署名ト稱シ得可キモノト解スルトキハ行使ノ目的ナクシテ作製シタル偽印責任能力ナキ者ノ作製シタル偽印若クハ偽署名ヲ使用シ以テ虛偽ノ信據力ヲ發生又ハ増大セシメントスル行爲ヲ悉ク罰スルヲ得テ實際ノ必要ヲ充スコトヲ得可シ。又

本人ノ承諾ヲ經スシテ作製セラレタル印章ハ何人カニ依リ作製セラレタル偽印ナレハ法文ノ所謂偽造セラレタル印章ト解スルモ必スシモ失當ノ解釋ニ非サル可シ。既ニ上述ノ如キ見解ヲ採用スル以上ハ有合印若クハ同名異人ノ印章ト雖モ本人ノ印章トシテ使用セラル、場合ニ於テハ之ヲ偽造ノ印章ノ使用ナリト解スルヲ得キモノトス。何トナレハ有合印若クハ同名異人ノ印(同一ノ氏又ハ名ヲ刻)ニシテ人ヲシテ本人ノ眞印ナリト信セシムル處アルモノヲ使用スルニ於テハ實害ノ點ヨリスルモ他人(能力ナキ者又ハ行使)カ偽造シタル印章ヲ使用スル場合ト何等異ル所ナキノミナラス有合印若クハ同名異人ノ印章モ既ニ本人ノ印章トシテ使用セラル、以上ハ一種ノ偽印ニ外ナラス。左レハ之ト他人カ作製シタル偽印トラ間ニ差別ヲ立テントスルカ如キハ何等ノ根據ナキモノニ屬ス(註二二〇)。

(註二二〇) (一) 第一異説 有合印、同名異人ノ印章又ハ廢印ヲ本人ノ印章トシテ使用スルノ行爲ハ罪ト爲ラス。大審院判例。牧野氏。

判例ニ曰ク「有合印ヲ使用スルノ所爲ハ罪ト爲ラス」(三〇年大審院判決録六卷二七頁)ト。又曰ク「同氏名ナル甲乙兩者ノ存在スル場合ニ乙者ノ印章トシテ甲者ノ印影ヲ濫用スルモ乙者ノ印影濫用罪ヲ構成セサルハ勿論甲者ハ自己ノ名義ニ於テ其印影ヲ濫用セラレタル事實ナケレハ甲者ノ印影濫用罪ヲ構成スルコトナシ」(三九年二〇二頁)ト。又曰ク「現ニ使用セサル印影ヲ廢印後ノ年月日ヲ記載シタル文書ニ濫用スルモ捺印ノ効ナキヲ以テ印影濫用罪ヲ構成セス」(二九年二〇八頁)ト。前後ノ判例ニ付キ牧野氏曰ク「余輩ハ此判例ノ趣旨ニ疑テ有ス。印章偽造罪ニ於テ印章其モハ實在セル印章ニ類似スルコトヲ要セサルヲ以テ此趣旨ヨリ論スルトキハ印章カ有效ナリヤ否ヤニ依テ犯罪ノ成立スルヤ否ヤ別ツハ妥當ナラサルカ如シ」(刑法通義三〇〇頁)ト。

(二) 第二異説 有合印ヲ捺捺シテ眞印ヲ模擬スルハ印章偽造罪ナリ。泉二氏。

氏曰ク「印章ヲ偽造スルニハ印影ノ偽造ヲ伴フヲ通例トスルモ眞正ナル印影ヲ造出シタル場合ナモ包含ス可キコト當然ナリ。從テ所謂有合印ヲ捺捺シテ眞正ノ印章ヲ模擬スルモ印章偽造罪ナリト解スルコトヲ要ス。反對ノ判例(三〇年大審院判決録六卷二七頁參照)ハ新刑法ノ解釋ニ採用ス可キモノニ非サルナリ。而シテ印章偽造ハ印影ノ偽造ニ外ナラスト解スルトキハ印影ノ偽造ハ印章偽造ノ豫備ニ止マルモノト認メサル可カラズ。二者共ニ印章偽造罪ナリト爲スハ觀念ノ矛盾タリ」(日本刑法論七〇七、七〇八頁)ト。

第三 眞正ナル印章又ハ署名ノ不正使用

眞正ナル印章又ハ署名ヲ不正ニ使用ストハ虚偽ノ信據カヲ生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ眞正ナル印章又ハ署名ヲ使用スルヲ謂フ。而シテ

眞正ナル印章又ハ署名ノ不正使用

眞印ノ盗
用

眞正ナル印章又ハ署名ヲ不正ニ使用スル場合ハ之ヲ大別シテ(一)眞正ナル印章又ハ署名ノ盗用(二)眞正ナル印章又ハ署名ノ濫用ノ二ト爲スコトヲ得。而シテ前者ハ之ヲ假ニ眞印ノ盗用ト稱シ後者ハ之ヲ假ニ眞印ノ濫用ト稱シ以下單ニ印章ニ付キ説明シ以テ之ヲ署名ノ不正使用ニ類推スルヲ得セシム。

(一) 眞印ノ盗用。眞印ノ盗用ハ印章ノ所有者ノ承諾ナクシテ虚偽ノ信據力ヲ生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ之ヲ使用スルヲ謂フ。眞印ノ盗用ニ就テハ幾多ノ場合ヲ想像スルコトヲ得可ク其最モ普通ナル場合ヲ類別スレハ(甲)盗取ニ依ル眞印ノ盗用(乙)欺罔ニ依ル眞印ノ盗用(丙)權限濫用ニ依ル眞印ノ盗用(丁)其他ノ手段ニ依ル眞印ノ盗用ノ四種ト爲スコトヲ得。

例ヘハ他人ノ印章ヲ竊ニ取出シ書類其他ノ物件ニ盜捺スルカ如キハ(甲)ノ適例ナリ。又例ヘハ人ヲ欺罔シ別種ノ書類ナルカ如ク信セシメ之ニ捺印セシムルカ如キハ(乙)ノ適例ナリ。又例ヘハ官吏カ其職權ヲ超越シテ自己ノ利益ノ爲メ官ノ印章ヲ使用スルカ如キ又會社ノ役員カ其一己ノ利益ノ

爲メニスル書類ニ會社ノ印章ヲ使用スルカ如キ又代理人カ本人自ラ捺印シタル白紙ヲ擅ニ他ノ目的ニ使用スルカ如キハ(丙)ノ適例ナリ。又例ヘハ藥品ヲ使用シ廢紙ニ押捺シタル印影ヲ他ノ書類ニ轉寫シテ之ヲ使用スルカ如キ又正當ナル書類ニ存スル印影ヲ切取り之ヲ他ノ書類ニ貼付シテ之ヲ使用スルカ如キハ(丁)ノ適例ナリ。此等ノ場合ニ於テ眞印盗用ノ手段方法相同シカラスト雖モ(一)眞印カ他人ニ屬スルコト(二)印主ノ承諾ナキコト(三)虚偽ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ之ヲ使用スルコトノ三點ニ於テハ共通ナリト謂フ可シ(註二三)。

(註二三) 同題旨 大審院判例、勝本勘三郎、小嶋傳藏氏。

判例ニ曰ク「入ノ文官ナルニ乘シ證書ノ作成名義人ヲ欺罔シ之ヲ内容ヲ了知セシメスシテ其署名ノ下ニ捺印セシメ以テ其證書ヲ作成シタルトキハ文書偽造罪ヲ構成シ證書竊取罪ヲ構成スルモノニ非ス」(四四年大審院判決録一五三二頁)。同題旨(四四年八一八頁、四三年一六四七頁、三一年九卷二四頁、三〇年二卷六三頁、七卷三四頁)。又曰ク「文書偽造罪ニ於ケル文書ハ必スシモ偽造者若クハ情ヲ知ラサル第三者ニ於テ之ヲ作成スルヲ要セス署名者ヲシテ他ノ文書ナリト誤信セシメ又ハ其内容ヲ知悉セシメスシテ之ヲ作成スル場合ニ於テモ文書ノ偽造罪ノ成立ヲ妨ケス」(四

四年八一八頁。又曰ク『多額ノ證書ヲ作成シテ之ニ小額ノ證書ナリト欺キ調印セシメタル所爲ハ印影盗用罪ヲ構成ス』(三二年二卷三五頁)。尙ホ三二年五卷一頁、三二年八卷九頁、三〇年一〇卷一〇九頁等參照。勝本勘三郎氏曰ク『盗用トハ之ヲ節約シタル語ナルカ故ニ盗トハ不法ニ押捺スルノ義、用トハ惡意ヲ以テ使用スルノ義ナリ。(一)不法ニ押捺スルノ義ナルカ故ニ印影ヲ盗用ス可カラサル書類其他ノ物件ニ押用シ既ニ押捺シタル白紙ニ記載ス可カラサル事項ヲ記載シ又ハ既ニ正當ニ押用シタル印影ヲ切り取りテ押用ス可カラサル書類又ハ其他ノ物件ニ貼付スルハ勿論監守者ヲ欺罔シテ不法ニ押捺セシメタルモ亦押捺ナリ。(下略)』(刑法新義上卷四五六頁、刑法各論講義二五八頁)。小崎傳氏曰ク『盗用トハ職權ナキ者カ權限外ニ印影ヲ使用スルト云フノ義ニシテ(中略)(一)其ノ印影ヲ盗取又ハ騙取シテ之ヲ押用ス可カラサル書類其他ノ物件ニ押捺スルカ、又ハ既ニ押捺シタル白紙ニ記載ス可カラサル事項ヲ記載シ又ハ既ニ正當ニ押捺サレタル影蹟ヲ切り取りテ之ヲ使用ス可カラサル書類又ハ其他ノ物件ニ貼付スルヲ意味シ云々』(日本刑法論各論三〇一頁)。

真印ノ濫用

(二)

真印ノ濫用。行爲者カ虚偽ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ其所有ニ屬スル印章又ハ何人ノ所有ニモ屬セサル印章ヲ使用スルヲ謂フ。例ヘハ行爲者カ相續ニ因リ所有權ヲ取得シタル印章ヲ使用シ被相續人カ生前ニ於テ押捺シタルモノトシテ之ヲ使用スルカ如キハ行爲者カ其所有ニ屬スル印章ヲ不正ニ使用スルノ適例ナリ。又例ヘハ印主カ

廢物ナリトシテ遺棄シタル印章ヲ使用シ廢印前ノ年月日ヲ記載シタル書類ニ之ヲ押捺シテ之ヲ使用スルカ如キハ何人ノ所有ニモ屬セサル真印ノ不正使用ノ適例ナリ。之ヲ真印ノ濫用ニ比スレハ(一)印章カ真印ナルコト、(二)虚偽ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メニ使用スルコトノ二點ニ於テ二者同一ナリト雖モ其印章カ行爲者ノ所有ニ屬スルカ又ハ何人ニモ屬セサル點ハ之ト相違スル點ナリ(註二四)。

(註二四) 同憲官 大審院判例。判例二曰ク『印影ナル物體ハ相續ニ依リ相續人ノ所有トナルコトヲ得可キモ被相續人ノ實印トシテ之ヲ押捺使用スルノ權限ヲ取得スルモノニ非ス。從テ被相續人カ生前ニ押捺シタルモノトシテ之ヲ押捺使用スルニ於テハ盗用罪ヲ構成ス』(三五年大審院判決第一卷一六九頁)ト。又曰ク『他人ノ死亡後最早其人ノ印章トシテ使用ス可カラサル時期ニ於テ其印章ヲ盜捺スルモ之ヲ其人カ生前自己ノ印章トシテ使用セシ當時捺押セルモノトシテ行使スル以上ハ私印盗用罪ヲ構成ス。而シテ其盜捺ノ當時ニ於ケル印影ノ所有者若クハ占有者ノ何人タルヤハ之ヲ問フノ要ナシ』(三六年三八三頁)ト。又曰ク『人ノ死亡後ニ實印ヲ盜捺シタルトキト雖モ其生在中ノ日附ニ係ル文書ニ之ヲ盗用シタル場合ニ於テハ文書偽造罪ト共ニ印章盗用罪ヲ構成ス』(三六年四八五頁)ト。

印章又ハ署名ノ使用トハ書類ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ印章又ハ署名ヲ書類ニ使用スルコトヲ謂フモノナレハ行使ノ目的

又以テ文字ノ記載ナキ白紙ニ官印又ハ私印ヲ押捺(盗用者ク)スルカ如キハ之ヲ以テ印章ノ不正使用ノ罪ヲ完成シタリト謂フ能ハサレトモ印章ノ不正使用ノ未遂罪ヲ構成スルコトハ疑ナキ所ナリ。然ルニ若シ何事カ記載シアル書類ニ擅ニ官印若クハ私印ヲ押捺(盗用者ク)シ之ニ由リ虚偽ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシメタル場合ニ於テハ其未タ押捺シタル書類ヲ行使スルニ至ラサル場合ニ於テモ既ニ印章ノ不正使用ノ罪ヲ完成シタルモノト解ス可キコトハ前既ニ偽印使用ニ付キ述ヘタルカ如シ(九二九ニ乃至二)。然ルニ學者或ハ一般ニ印章ノ盜捺ヲ以テ無罪ナリト説明シ又ハ印章不正使用ノ罪ヲ構成セスト説明スルカ如キハ之ヲ相當ナル見解ナリト謂フ能ハス(註二五)。

(註二五) 異説 牧野、泉二諸氏。

牧野氏曰ク「不正ノ使用ノ場合ニ在リテハ單ニ盜捺ノ行爲ノミニテハ犯罪成立セス不正ニ使用シタルトキヲ以テ既送ト爲ル」(刑法通義三〇一頁)ト。泉二氏曰ク「真正ナル印願ノ影取ハ押捺カ不正ナルトキト雖モ尙ホ真正ナル印章ナリ。從テ真正ナル印願ヲ不法ニ押捺シテ印影ヲ現出セシムルハ印章偽造ニ非ス。又印章ノ不正使用ニ非ス。其影取

ヲ使用スルニ依リ初メテ不正使用罪ヲ構成スルモノト解セサル可カラズ」(日本刑法論七〇九、七一〇頁)ト。

第四 印章又ハ署名ノ偽造ト偽造ノ印章又ハ署名ノ使用トノ競合

行使ノ目的ヲ以テ印章又ハ署名ヲ偽造スルノ行爲及ヒ偽造シタル印章又ハ署名ヲ使用スルノ行爲ハ共ニ犯罪ヲ構成スルコト前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。而シテ此兩罪カ別人ニ依リ犯サレタルトキハ何等ノ疑問ヲ生セスト雖モ同一人ニシテ此兩罪ヲ犯シタルトキハ多少ノ疑問ヲ生スルコトナシト爲サス。例ヘハ行使ノ目的ヲ以テ他人ノ印章ヲ偽造シタル者カ之ヲ使用セントスル行爲ニ着手シタルモ之ヲ遂ケサリシ場合ノ如キハ如何ニ之ヲ處分ス可キカノ疑問是ナリ。之ヲ客觀的ニ觀察スレハ印章偽造罪ト偽造印章ノ使用未遂罪トノ二個ノ犯罪ヲ存スルヲ以テ此二罪ノ併合罪ナリトシテ之ヲ處斷スルヲ相當トス可キカ如シ。又之ヲ主觀的ニ觀察スルトキハ行爲者ハ使用スルノ意ヲ以テ印章ヲ偽造シタル者ニシテ印章偽造ノ如キハ其手段ニ

印章又ハ署名ノ偽造
署名又ハ印章ノ偽造
印章又ハ署名ノ偽造
署名又ハ印章ノ偽造

外ナラサレハ偽造印章使用ノ未遂罪ナリトシテ處斷スルヲ相當トス可キカ
 如シ。然レトモ此兩見解ハ或ハ客觀的觀察ニ偏シ或ハ主觀的觀察ニ偏スル
 モノニシテ共ニ相當ナリト謂フ能ハス。二個ノ罪カ獨立シテ成立スル點ニ
 於テ客觀的觀察ヲ採用セサル可カラス。又印章偽造ハ偽造印章行使ノ手段
 タル點ニ於テ主觀的觀察ヲ採用セサル可カラス。故ニ此兩觀察ヲ併用シ手
 段タル犯罪ト結果タル犯罪存スルモノト爲シ刑法第五十四條第一項後段ヲ
 適用シ其最モ重キ刑ヲ以テ處斷スルヲ相當ト思考ス。故ニ學者或ハ偽造使
 用ノ一罪ヲ構成スルカ如ク論スルハ相當ナラス。此說ノ如クスルトキハ偽
 造印章使用カ未遂(中止)ニ止マルトキト雖モ之ニ從ヒ處斷セサル可カラサル
 缺點アリ。又學者或ハ偽造罪ノ一罪ノミ構成スルカ如ク論スルハ相當ナラ
 ス。此說ノ如クスルトキハ偽造印章使用罪カ完成シ其情印章偽造ニ比シ重
 キ場合ト雖モ輕キ印章偽造罪ニ依リ處斷セサル可カラサルノミナラス印章
 偽造罪ニ付キ時効完成シタルトキハ假令偽造印章使用罪ニ付キ未タ時効完

成セサル場合ト雖モ之ヲ不問ニ付セサル可カラサル缺點アリ(註二六)。

(註二六) (一) 第一異說 偽造印章使用ノ一罪ヲ構成ス。泉二、岡田諸氏、大審院判決例(一)。

泉二氏曰ク『自己ノ偽造シタル印章若クハ署名ヲ使用スルハ別罪ヲ構成スルコトナク偽造使用ノ一罪ナリト解スル
 シ(日本刑法論七〇九頁)ト。岡田氏曰ク『物ノ偽造又ハ使用ニ因リ成立スル犯罪ハ現行法ニ於テ兩者相持テ既遂ト
 定メラントルモノアリ。例ハハ文書ノ如シ(新法ハ然ラス)。然レトモ官印ハ各所爲各一罪ト爲リ得ル規定ヲ設ケラ
 レタリ。故ニ(一)官印ヲ偽造セントシテ遂ケサルモノハ官印偽造未遂犯トシテ處分ス可ク偽造行使ノ未遂トス可カ
 ラス。(二)同一ノ理由ニ依リ偽印ヲ使用セントシテ遂ケサルモノハ偽印使用未遂犯トシテ處分ス可ク官印ノ偽造使用ト
 ス可カラス。(三)但シ偽造ト使用トハ官印ノ如キハ明文アルカ爲メニ別罪ト成リ得ルニ止マリ若シ同一人カ兩者ヲ
 兼犯シタルトキハ二罪俱發トセス單ニ一罪ノ偽造使用ト解スル既チ正當トス(刑法講義一一〇、一一一頁)ト。判例
 ニ曰ク『印章偽造ノ行爲ハ行使ノ手段ニ外ナラス。唯官印ニ付テハ特ニ手段タル偽造ノミナルモ之ヲ處罰ス可キコト
 ナ規定シタルニ過キサレハ官印ヲ偽造シテ行使シタル場合ニ於テハ其目的タル行使ノ所爲ニ付キ其罪ヲ論ス可キハ
 當然ナリ(三八年大審院判決錄二二七頁)ト。同志(三五年一〇卷九頁)。

(二) 第二異說 印章偽造罪ノミヲ構成ス。勝本、小崎諸氏。

勝本氏曰ク『本罪ハ貨幣偽造罪、文書偽造罪ト異ナリ偽造ト使用トハ各一罪ヲ爲スモノナルカ故ニ各自獨立シテ各
 共犯アリ、時効アリ、未遂犯アリト雖モ一人ニシテ二者ヲ兼犯シタルトキハ犯罪ノ性質上行使ハソレ自身偽造ノ
 中ニ包含セラル、カ故ニ偽造ノ一罪ノミナリトス(刑法新義上卷四五頁)ト。小崎氏曰ク『官印ノ偽造又ハ其使用
 ハ各獨立シテ一罪ヲ構成ス可キモノナルヲ以テ公訴ノ時効ハ偽造又ハ行使ノ各所爲ニ付テ起算ス可ク、各所爲ニ付
 第三章 印章偽造ノ罪 第一節 印章偽造罪ノ觀念 三〇一

テ各獨立シタル共犯者アリ同一人ニシテ二者ヲ兼テ犯シタルトキハ如何ニ處分ス可キカト謂フニ使用ノ目的ヲ以テ偽造スルコトハ官印偽造罪ノ成立ニ付テノ必要條件ニシテ其偽印ヲ犯人カ更ニ使用スルコトハ法律カ官印偽造罪ニ付テ既ニ豫期シタル當然ノ結果ニシテ其偽造ヲ終リタルトキハ更ニ進ンテ使用ニ着手スルト着手後中止スルト將タ使用ヲ遂クルトテ間ハ法律上一罪ト認メ公訴ノ時效ハ此一罪タル行爲ノ終リタルトキヨリ起算ス可ク此一罪ニ對シテハ常ニ官印偽造罪ヲ以テ論セサル可カラス(中略)。偽造使用罪ヲ以テ論ス可シトノ說アルモ此說ニ依レハ印ノ使用ニ着手シタルモ未ダ遂ケサルトキハ未遂罪ヲ以テ論ス可シトノ結論ヲ生シ若シ官印ノ偽造ニ止マルトキハ既遂トナルニ拘ラス更ニ使用ニ着手シタル爲メ未遂ノ刑ヲ以テ處罰セラルトニ至リ若シ使用ヲ中止スルトキハ無罪(新法ハ中止未遂)ト爲リ極メテ不權衡ノ結果ヲ生ス可ク又官印偽造ト偽印使用罪トハ各獨立シテ存在シ得可ク偽造罪ハ使用罪ニ對シテ未遂ノ程度ニアルモノニ非サルカ故ニ本間ニ對シテ未遂ト既遂ノ關係ヲ以テ推論スルコトヲ得サルナリ(但シ偽造行爲ニ付キ確定判決ヲ經タル後使用ノ所爲アルトキハ更ニ使用罪ヲ以テ論ス可キハ勿論ナリ)』日本刑法論各論二九五乃至二九七頁ト。

第二節 御璽、國璽、御名偽造ノ罪

第六十四條 行使ノ目的ヲ以テ御璽、國璽又ハ御名ヲ偽造シタル者ハ二年以上ノ有期懲役ニ處ス。
御璽、國璽又ハ御名ヲ不正ニ使用シ又ハ偽造シタル御璽、國璽又ハ御名ヲ使用シタル者亦同シ。

第六十八條 第六十四條第二項、第六十五條第二項、第六十六條第二項及ヒ前條第二項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス。

第一 客體

御璽トハ天皇ノ御印章ニシテ國璽トハ日本國ノ印章ナリ。御名トハ天皇ノ御署名ナリ。御璽ハ詔書、勅書、法令公布ニ關スル上諭、國際條約發表ニ關スル上諭、親任官及ヒ勅任官ノ爵記、四位以上ノ位記等ノ公事ニ使用セラル、外(明治一〇年勅令第六號公式令)天皇ノ御私事ニ使用セラル可キモノヲ謂フ。國璽ハ對外關係若クハ外國人ニ關係スルコトアル可キ事項ニ關シ日本國ヲ表示スル印章トシテ使用セラル、モノニシテ國書其他外交上ノ親書、條約批准書、全權委任狀、外國派遣官委任狀、名譽領事委任狀、外國領事認可狀、勳三等功五級以上ノ勳記ニ使用セラル可キモノヲ謂フ(同上公)。御名ハ必スシモ天皇ノ御親署ノミヲ稱ス可キモノニ非スト雖モ詔書、勅書、法令公布ニ關スル上諭、國際條約發表ニ關スル上諭、國書其他外交上ノ親書、條約批准書、全權委任狀、外國派遣官委任

御璽、國璽、御名

狀、名譽領事委任狀、親任官ノ官記、爵記、一位ノ位記、勳三等功五級以上ノ勳記等ハ親署タル可キ旨規定アリ(同上公)。

第二 所爲

御璽、國璽、御名ヲ偽造スル罪ハ之ヲ(一)御璽、國璽、御名ノ偽造、(二)偽造シタル御璽、國璽、御名ノ使用、(三)御璽、國璽、御名ノ不正使用ノ三ト爲スコトヲ得。

(一) 御璽、國璽、御名ノ偽造。御璽、國璽、御名ヲ書類其他ノ物ニ使用シ之ヲ行使スルノ目的ヲ以テ之ヲ偽造スルノ行爲アルニ依リ御璽、國璽、御名ヲ偽造スルノ罪ヲ構成スルモノトス。而シテ御璽、國璽、御名ノ偽造トハ人ヲシテ眞正ナル御璽、國璽、御名ナリト信セシムル虞アル印章若クハ署名ヲ作製スル行爲アルヲ以テ足ルモノニシテ敢テ眞物ト酷似スル印章又ハ署名ヲ作製スルコトヲ要セス。而シテ御璽、國璽トハ獨リ御璽、國璽ノ原體タル印類ノミナラス尙ホ其印影ヲモ併セ稱スルモノトス。尙ホ此點ニ關シテハ前ニ印章又ハ署名ノ偽造ニ付キ説明シタル所ヲ參酌ス可シ(二七八乃至二八〇)。

御璽、國璽、御名ノ偽造

偽造ノ御璽、國璽、御名ノ使用

(二) 偽造ノ御璽、國璽、御名ノ使用。

虛偽ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ書類其他ノ物ニ偽造ニ係ル御璽、國璽若クハ御名ヲ使用スル行爲アルニ依リ偽造ノ御璽、國璽、御名ヲ使用スルノ罪ヲ構成ス。故ニ此罪ヲ構成スルニハ偽璽又ハ偽署名ノ使用ノ行爲アルヲ以テ足ルモノニシテ偽璽又ハ偽署名ヲ使用シタル書類其他ノ物ヲ行使スルノ行爲アルヲ待テ此罪ヲ完成スルモノニ非ス。而シテ此罪ハ眞物ニ非サル御璽、國璽若クハ御名ヲ以テ虛偽ノ信據力ヲ發生又ハ増大ナラシムル爲メ之ヲ使用スルニ依リテ成立スルモノナリ。故ニ其使用セラレタル御璽、國璽、御名ノ作製者ニ偽造ノ罪責アル場合ニ限り此罪ヲ成立ス可キモノニ非ス。尙ホ此點ニ關シテハ偽造ノ印章若クハ署名ノ使用ニ付キ説明シタル所ヲ參酌ス可シ(二八二乃至二八九)。尙ホ自己ノ偽造シタル御璽、國璽、御名ヲ使用スル行爲ハ如何ニ之ヲ處分ス可キヤニ就テハ偽造ノ印章又ハ署名ノ使用罪ト印章又ハ署名ノ偽造罪トノ競合ニ付キ説明シタル所ヲ參酌ス可シ(二八九乃至三〇〇)。

御璽、國璽、御名、不正使用

第三編 交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ニ對スル罪

御璽、國璽、御名、不正使用、偽署、未遂

(三) 御璽、國璽、御名ノ不正使用。虚偽ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ眞正ナル御璽、國璽又ハ御名ヲ書類其他ノ物ニ使用スルニ依リ御璽、國璽若クハ御名ヲ不正ニ使用スル罪ヲ構成スルモノトス。故ニ本罪モ亦御璽、國璽若クハ御名ヲ使用シタル書類其他ノ物ヲ行使スルヲ待テ其罪ヲ構成ス可キモノニ非スシテ使用ノ行爲アルニ依リ本罪ヲ構成スルモノトシ(二)ノ場合ト異ナル所ナシ。尙ホ此點ニ關シテハ眞正ナル印章又ハ署名ノ不正使用ニ付キ説明シタル所ヲ參酌ス可シ(九九三乃至九九四)。

(四) 御璽、國璽、御名ノ不正使用又ハ偽署、偽署ノ使用ヲ未遂罪。御璽、國璽、御名ノ不正使用又ハ偽署、偽署ノ使用ノ未遂ハ之ヲ罰ス可キ旨ヲ定ム。行使スルノ目的ヲ以テ御璽、國璽、御名ヲ偽造スル罪ノ未遂ヲ罰スルノ舊刑法ノ規定ヲ改メ何故ニ斯ノ如キ大罪ノ未遂罪ヲ罰セスト爲シタルカ余ハ其理由ヲ發見スルニ苦ム。

第三節 公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署

名偽造ノ罪

第六十五條 行使ノ目的ヲ以テ公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ偽造シタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス。

公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ不正ニ使用シ又ハ偽造シタル公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ使用シタル者亦同シ。

第六十八條 (第六十四條第二項)第六十五條第二項(第六十六條第二項)及ヒ前條第二項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス。

第一 客體

(一) 公務所ノ印章。廣ク公務所ノ印章ト謂フトキハ本罪ノ所謂公務所ノ印章ト公務所ノ記號トヲ併稱ス。茲ニハ單ニ前者ヲ指シテ公務所ノ印章ト稱ス。而シテ公務所ノ印章ト公務所ノ記號トノ區別ハ之ヲ次節ニ於テ説明セシム。

公務所ノ印章トハ公務所カ其事務實行ニ付キ使用スル印章ナリ。左レハ官廳若クハ公署ヲ表示スル應印若クハ署印ハ勿論官廳若クハ公署ニ於

第三章 印章偽造ノ罪 第三節 公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名偽造ノ罪

公務所ノ印章

テ公務實行ノ爲メニ使用スル各種ノ印章モ亦公務所ノ印章ナリ。故ニ例ヘハ郵便局ノ日附印其他官廳ノ使用スル契印ノ如キモ亦公務所ノ印章ナリ。故ニ學者或ハ公務所ノ印章トハ公務所ノ名ヲ表示セル印章ナリト謂フカ如キ又或ハ公務所タルコトヲ表示スル印章(即チ同一格 Identical)ヲ表示スル印章ノミヲ指稱スト説クカ如キハ共ニ狹キニ失ス(註二七)。

(註二七) (一) 同趣旨 大審院判例、小崎氏。

判例ニ曰ク「官署ノ用ニ供スル印類ハ總令官署又ハ官吏ノ官職氏名ヲ表示セシモノニ非サルモ官印ナリ」(三九年大審院判決九頁)ト。又曰ク「裁判所ノ廳印ハ其如何ナル種類ヲ問ハス官署ノ印ナリ」(三二年三卷九七頁)ト。又曰ク「法律命令ニ特別ノ委任ナキモ公署、官署ニ於テ其職務執行ニ付キ慣例上使用する印類ハ公署、官署ノ印ナリ」(三九年二二四八頁)ト。又曰ク「郵便局ノ日附印ハ郵便局ヲ表示シ且ツ郵便物ノ發着日時、印紙ノ消印等ヲ證明スルモノナレハ懲刑法ニ在テハ官署ノ印ニ該當シ刑法ニ在テハ公務所ノ印章ニ該當ス」(四二年八四八頁)ト。又曰ク「官署ノ契印ハ官印ナリ」(三四年二卷二頁)ト。尙ホ小崎氏ハ郵便局ノ日附印、官署ノ契印ヲ以テ官印ナリト爲シタル判例ヲ以テ相當ナリト說明セリ(日本刑法論各論二一九、二九二頁)ト。尙ホ(註二九)ノ内小崎氏ノ說明參照。

(二) 第一異議 公務所ノ名ヲ表示スル印章ナリ。勝本氏。

氏曰ク「官署ノ印トハ各官府カ國家爲政ノ機關トシテ爲シタル行爲ヲ證明スルモノヲ謂フモノハ何者、何院、何廳、何

裁判所ノ印ト謂フカ如ク其官署ノ名ノミヲ刻セラレタルモノニシテ其官廳ヲ代表スルモノヲ謂フ」(刑法概論上卷四四八、四四九頁、刑法各論講義二五二頁)ト。

(三) 第二異議 公務所ノ同一格ヲ表示スル爲メ使用ス可キ公務所名ヲ表示シタル印章ナリ。泉二氏。

氏曰ク「公成文書ニ押捺シテ作成者ノ同一格ヲ表示ス可キモノハ公用印章ニシテ云々」(日本刑法論七〇五頁)ト。又曰ク「公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ヲ僞用シタルト謂フニハ其僞印ハ法律上認めラレタル公務所名又ハ公務員ノ職名ヲ表示スルヲ要ス」(同七〇八頁)ト。

公務員ノ印章

(二)

公務員ノ印章。公務員ノ印章トハ公務員カ公務實行ノ爲メ使用スル職印ヲ謂フ。官氏名ヲ表示シタル方形印章若クハ官名ノミヲ表示シタル方形印章ナルヲ通常トス。官吏カ公務ニ關シ長官或ハ主任ノ名ヲ以テ上申、下達及ヒ往復ニ使用スル印章ニ就テハ勅任官印章ハ方九分、奏任官印章ハ方七分、判任官印章ハ方六分ニシテ官名ノミノ表示アルヲ以テ成規ト爲ス。但シ同令ニ従前ヨリ使用シタル分ハ改刻ニ及ハサル旨ノ規定アルヲ以テ明治三十一年前ヨリ官印トシテ使用セラレタルモノハ上述ノ成規ニ合セサルモ依然上申、下達及ヒ往復ニ使用シ得可キ官印タルコト論ヲ俟タス(明治

第三編 交通取引ニ於テ誠實及ヒ信用ニ對スル罪 三二〇
令三一年閣。...

公務員ノ印章ハ専ラ公務員ノ使用ヲ爲メニ用ルコトナラシメテ私事ノ爲メニ使用セラルルコトヲ禁ズ

公務員カ假令公務員ノ爲メニ使用スルモ専ラ公務員ノ爲メニ使用セラルル職印ニ非ズルモ之ヲ公務員ノ印章ナリト謂フ能ハス。故ニ公務員カ公務員ノ爲メニ使用スル印章ト雖モ其印章ニシテ専ラ公務員ノ爲メニ使用セラルル可キ職印ニ非ズシテ私事ノ爲メニ使用シ得キトモ其印章ハ之ヲ公務員ノ印章ナリト謂フ能ハス(註二八)。

(註二八) 同題旨 大審院判例、第三新熊、牧野英一、小幡傳氏、...

判例ニ曰ク「官吏、公吏ノ用フル印類カ私印ナルヲ將テ職印ナルトシハ其印類ノ性質如何ニ依リテ定ム可キモノニシテ之ヲ押捺セル文書ノ性質ニ據リテ定ム可キモノニ非ズ」(三八年大審院判決第一〇八一頁)。又曰ク「村長ノ認印ハ公署ノ印ニ非ズ(三二年四卷八七頁)。泉三新熊氏日本刑法論七〇六頁、牧野英一氏刑法通義二九七頁、小幡傳氏日本刑法論各論二九〇頁參照。

異議 大審院判例、判例ニ曰ク「刑法第五十五條ニ所謂公務員ノ印章トハ公文書ヲ作成スルニ當リ之ヲ公務員ノ印トシテ使用スル一切ノ印章ヲ汎稱シ其本來ノ性質カ私印ナルト否トハ之ヲ區別セサルノ法意ナリ」(四四年大審院判決四二七頁)。

公務所又ハ公務員ノ署名

(三) 公務所又ハ公務員ノ署名。公務所ノ署名トハ公務所ノ名稱ヲ記載ナル

ハ公務員ノ署名

コト公務員ノ署名トハ公務員ノ職名及ヒ氏名ノ記載ナルコト又公務員ノ署名ニハ自署ニ係ル場合ト否トノ區別アルコト及ヒ其執レノ場合ナルヲ問ハス公務所又ハ公務員ノ署名ハ本罪ノ客體タルコトヲ得可キコトハ前既ニ述タルカ如シ(二七六乃至二七八頁參照)。

第二 所爲

公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ヲ偽造スルノ罪ハ(一)公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ノ偽造、(二)偽造シタル公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ノ使用、(三)公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ノ不正使用ノ内其一ノ行爲アルニ依リ成立ス。

(一) 公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ノ偽造。公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ヲ書類又ハ其他ノ物ニ使用シ之ヲ行使スル目的ヲ以テ印章又ハ署名ヲ偽造スルニ依リ公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ヲ偽造スルノ罪ヲ構成スルモノトス。而シテ公務所又ハ公務員ノ作製ス可キ文書ニシテ公

公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ノ偽造

偽造ノ公務員ノ印章又ハ公務所ノ印章又ハ署名ノ使用

務所又ハ公務員ノ署名捺印ヲ要スル場合アリ。例ヘハ判決書其他多數ノ官公文書ハ之ニ屬ス。又之ニ反シテ單ニ公務所又ハ公務員ノ署名ノミヲ使用スル場合アリ。例ヘハ俸給下賜ノ辭令書又ハ官選辯護人ノ選定書ノ如キハ之ニ屬ス。斯ル書類ヲ作製シ之ヲ行使センカ爲メ公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ヲ偽造スルトキハ本罪ヲ構成ス可キナリ。而シテ印章ハ印類ト印影ノ兩者ヲ併稱ス可キト及ヒ偽造トハ必スシモ真物ニ模擬スルヲ要セサルコトハ既ニ之ヲ説明シタルカ如シ(二七〇乃至二七六頁)。

(二) 偽造ノ公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ノ使用。虚偽ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ書類其他ノ物ニ偽造ノ公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ヲ使用スル行爲アルニ依リ公務所又ハ公務員ノ偽印又ハ偽署ヲ使用スルノ罪ヲ構成ス。而シテ偽印又ハ偽署ヲ使用スルニ依リ本罪ヲ構成スル場合ハ之ニ依リテ文書偽造罪ヲ構成セサル場合ニ限ル可キコトハ既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ(二八三乃至二八六頁)。又偽造シタル公務所又

公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ノ不正使用

ハ公務員ノ印章又ハ署名トハ其印章又ハ署名ノ作製者ニ偽造ノ罪責アル場合ノミニ限ラス真物ニ非サル公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ハ悉ク之ヲ法文ノ所謂偽造シタル公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ト稱ス可キコトモ亦既ニ之ヲ偽造ノ印章又ハ署名ニ付キ説明シタルカ如シ(二八六乃至二八九頁)。尙ホ公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ヲ偽造シタル者カ之ヲ使用スル行爲ニ對スル處分ニ關シテハ偽造ノ印章又ハ署名ノ使用罪ト印章又ハ署名偽造罪トノ競合ニ付キ既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ(二九〇乃至二九三頁)。

(三) 公務所又ハ公務員ノ印章又ハ署名ノ不正使用。公務所又ハ公務員ノ眞正ナル印章又ハ署名ヲ不正ニ使用スル行爲ハ或ハ眞印又ハ眞署ノ盗用ニ依リ之ヲ爲スコトヲ得可ク或ハ眞印又ハ眞署ノ濫用ニ依リ之ヲ爲スコトヲ得可シ。盗取ニ依リ眞印ヲ盗用スルカ如キ欺罔ニ依リ眞印ヲ盗用スルカ如キ權限濫用ニ依リ眞印ヲ盗用スルカ如キハ前者ノ場合ニシテ又何人ノ所有ニ屬セサル眞印例ヘハ廢物トシテ投棄セラレタル眞印ヲ濫用スル

カ如キハ後者ノ場合ナリ(三九三乃至三九八頁)。

(四) 公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名ノ不正使用又ハ偽印若クハ偽署名ノ使用ノ未遂罪。法律ハ公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名偽造ノ未遂ヲ罰セスシテ偽造ノ公印若クハ公署名ノ使用若クハ眞印眞署名ノ不正使用ノ未遂ヲ罰ス可キ旨ヲ定ム。余ハ(一)何故ニ此兩者ノ間ニ區別ヲ爲シタルカ(二)何故ニ舊刑法ヲ罰シタル公印偽造ノ未遂ヲ不問ニ付シタルカノ理由ヲ解スル能ハス。

第四節 公務所ノ記號偽造ノ罪

第六十六條 行使ノ目的ヲ以テ公務所ノ記號ヲ偽造シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス。

公務所ノ記號ヲ不正ニ使用シ又ハ偽造シタル公務所ノ記號ヲ使用シタル者亦同シ。

第六十八條 (第六十四條第二項、第六十五條第二項、第六十六條第二項及ヒ前條第二項)ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス。

公務所ノ記號

第一 客體

之ヲ廣義ニ解スレハ公務所ノ記號モ亦公務所ノ印章ニ屬ス可キコトハ前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。而シテ公務所ノ印章ト公務所ノ記號トノ區別ハ其形體ノ如何ニ依リ之ヲ區別ス可キモノニ非スシテ其使用ノ目的如何ニ依リ之ヲ定ム可キモノナリ。公務所ノ一定ノ印章ニシテ書類ニ押捺シテ證明ノ用ニ供セラレトモ少ナルニ於テハ之ヲ公務所ノ印章ナリト謂フ可ク若シ公務所ノ一定ノ印章ニシテ專ラ產物、商品、書籍、什物等ニ使用セラレトモノナルニ於テハ之ヲ記號ト解ス可キナリ。故ニ書類ニ押捺シテ證明ノ用ニ供セラル、公務所ノ印章ナルニ於テハ其印章中公務所ヲ表示ス可キ文字ノ有無如何ヲ問ハス之ヲ公務所ノ印章ナリト解ス可キモノトス。之ニ反シテ專ラ產物、商品、書類、什物等ニ使用スル公務所ノ印章ナルニ於テハ其印章中ニ公務所ヲ表示ス可キ文字ノ有無如何ヲ問ハス之ヲ記號ナリト解ス可キナリ。蓋シ法文ノ所謂公務所ノ記號トハ舊刑法第九十六條ノ所謂產物、商品等ニ押

用スル官ノ記號印章又ハ書籍什物等ニ押用スル官ノ記號印章ナル文字ニ換ヘテ簡潔ナル文字ヲ選ミタルモノニシテ敢テ其意義ヲ變更シタリト認ム可キモノナシ。又法律カ公務所ノ印章ノ偽造ヲ重ク罰シ公務所ノ記號ノ偽造ヲ比較的輕ク罰スル所以ノ理由ハ書類ニ使用ス可キ印章ノ偽造ハ之ヲ專ラ產物、商品、書籍、什物等ニ使用ス可キ記號ノ偽造ニ比スレハ其害惡遙ニ大ナリト認メタルニ因ルナラン。此二點ハ余カ印章ノ形體如何ニ依リ印章ト記號トノ區別ヲ爲サス其使用ノ目的如何ニ依リ兩者ヲ區別スルヲ以テ可ナリトスル見解ヲ以テ相當トスル所以ナリ。若シ夫レ形體ニ依リ兩者ノ區別ヲ設ケテ印章中公務所ヲ表示ス可キ文字アルトキハ公務所ノ印章ニシテ記號ニ非スト解センカ公務所ノ名稱ヲ刻ミタル燒判ノ如キ專ラ什器ニ燒印シテ其公務所ノ所有タルコトヲ明カニスルモノヲモ亦之ヲ記號ト解スル能ハスシテ印章ナリト解セサル可カラサルニ至ラン。又學者或ハ印章ニ文字ヲ以テ表示スルト符號ヲ以テ之ヲ表示スルトニ依リ此兩者ヲ區別セント欲スル者

在レトモ若シ斯ノ如ク解スルトキハ產物、商品、書籍、什物等ニ使用セラル、大
多數ノ記號ハ悉ク印章ナリト解セラル、ニ至ル可シ。又法文ノ沿革論及ヒ
刑ノ權衡論ヲ離レテ專ラ我邦一般ニ使用セラル、用語ノ上ヨリ之ヲ觀ルモ
書類ニ押捺シテ證明ノ用ニ供セラル、印章ヲ以テ從來記號ナリト指稱セラ
レタル例アルコトナク又獨リ產物、商品、書籍、什物等ニ使用セラル、印章モ亦
一般ニ使用セラル、用語ノ上ヨリ言ヘハ之ハ記號ト指稱セラレタル例ナシ。
然ルニ之ヲ記號ト稱スルニ至リタルハ前掲舊刑法第九十六條ノ法文ニ淵
源スルモノナレハ記號ナル文字ノ意義ヲ更ニ擴張シテ書類ニ押捺シテ證明
ノ用ニ供スル印章ト雖モ署名ニ代ヘ又ハ署名ト共ニ之ヲ表彰スル爲メ使用
セラル、印章ニ非サレハ之ヲ悉ク記號ナリト論スルカ如キ又書類ニ押捺シ
テ證明ノ用ニ供セラル、印章ト雖モ其印章中ニ官署ヲ示ス可キ文字ナキト
キハ印章ニ非スシテ記號ナリト謂フカ如キハ孰レモ之ヲ相當ナル見解ト謂
フ能ハス(註二九)。

(註二九) (一) 同趣旨 (註二七) ナ参照ス可シ。同趣旨ニ近シ。泉二氏曰ク「公務所ノ印章ニハ狹義ノ印章ト記號トノ區別アリ。如何ナル標準ニ依リ區別スルカハ疑問ナリ。一説ニ依レハ印順ノ影蹟カ發音シ得キ文字ナルトキハ印章(狹義)ニシテ發音シ得カラサル符號ナルトキハ記號ナリト爲ス。然レトモ舊刑法第百九十六條、第百九十七條ニ所謂記號印章トハ記號ト印章トノ對別ニ非シテ記號印章ト謂フ一個ノ概念ナリ。換言スレハ官印ト官ノ記號印章トノ對別ナリ。而シテ官文書ニ押捺ス可キモノハ官印ニシテ產物、商品、書籍、什物等ニ押用ス可キモノハ記號印章ナリ。新刑法ニ於ケル印章ト記號トノ對別モ亦此趣旨ノ擴張ニ外ナラス。即チ公文書ニ押捺シテ作成者ノ同一格ヲ表章ス可キモノハ公用印章ニシテ產物、商品、書籍、什物其他ノ文書又ハ有價證券以外ノ物ニ一定ノ文字又ハ符合ヲ押捺シ其物ノ上ニ附着セル位置、狀態ニ依リ一定ノ證明ヲ認識セシムルモノハ公用記號ナリ。而シテ記號ハ文字ニ依リ公務所ノ同一格 (Identical) ナ明示シ得ルモノタルコトヲ必要トセス。例ハ林區署ノ用ニ供スル^④又ハ^⑤印ノ如キモ亦記號ナリ」(日本刑法論七〇五頁)ト。

(二) 第一要説 印順ニ依リ現出スル影蹟カ文字ナルトキハ印章ニシテ符號ナルトキハ記號ナリ。勝本、小崎、牧野諸氏。

勝本氏曰ク「印章トハ前ニ所謂印 (官署ノ印トハ各官府カ國家爲政ノ機關トシテ爲シタル行爲ヲ證明スルモノヲ詳言スレハ何者、何院、何廳、何裁判所ノ印ト謂フカ如ク其官署ノ名ノミヲ刻セラレタルモノニシテ其官府ヲ代表スルモノ)ニシテ記號トハ印順ヲ用ヒスシテ筆寫シタルモノヲ指スカ如キモ押用スル記號印章トアルニ依テ之ヲ觀レハ畢竟廣キ意味ニ於ケル印ヲ發音シ得キ文字即チ普通ニ所謂文字ヲ現出シ得キモノト、發音シ得カラサル文字即チ三角形、十字形ノ如キ符號ヲ現出シ得キモノニ種別シ、前者ヲ印章トシ後者ヲ記號トシタルモノニシテ、筆寫ニ

依ルモノハ假令發音ス可カラサル符號タリトモ茲ニ所謂記號ニ非ス」(刑法新義上卷四四九、四五〇頁、刑法各論講義二五三頁)ト。小崎氏曰ク「記號印章トアルモノ何レモ印順ヲ指スモノニシテ其印順ニ依テ現出スル影蹟カ發音シ得キカラサル符號(記號)ナルト發音シ得キ文字(印章)ナルトニ依テ此區別ヲ設ケタルニ過キス」(日本刑法論各論二九二頁)ト。牧野氏曰ク「公ノ印章ト公ノ記號トノ區別ハ文字ヲ以テ表明セラル、ト否ヤニアリ。公務所ヲ表明スルニ方リ文字ヲ以テセラル、モノナラハ常ニ之ヲ印章ト稱スルコトヲ得ルモ文字以外ノ符號ヲ以テセラル、トキハ記號ナリ」(刑法通義二九八頁)ト。

(三) 第二要説 署名ニ代ヘ又ハ署名ト共ニ之ヲ表彰スル爲メニ使用スル印章ト其他ノ印章トニ依リ之ヲ區別ス。小崎氏曰ク「刑法第百六十六條ニ於テ公務所ノ記號ニ關スル規定ヲ設ケ同法第百六十五條ニ規定スル公務所ノ印章ト區別シ其刑ニ輕重ノ區別ヲ設ケタル所以ハ二者共ニ公務所ニ於テ使用スル印章ニシテ廣義ニ於ケル公務所ノ印章ト云ヒ得キモ公務所ノ署名ニ代ヘ若クハ署名ト共ニ之ヲ表彰スル爲メニ押用セラル、印章即チ同法第百六十五條ニ規定セル狹義ノ公務所ノ印章ト其他ノ印章ニシテ公務所ニ於テ使用スルモノ即チ同法第百六十六條ニ規定スル公務所ノ記號トハ其目的用法ニ於テ自ラ異ナル所アルヲ以テナリ」(大審院新刑法判例要旨六六頁)ト。

(四) 第三要説 公務所ヲ表示スル文字ナキ公務所ノ印章ハ公務所ノ記號ナリ。大審院判例。

判例ニ曰ク「税關ノ日附印ナルモノハ税關カ關稅其他ノ諸收入ヲ證スル爲メ使用スル所ノモノナルモ圓形ノ輪廓内ニ單ニ年月日ノ數字ヲ西洋數字ヲ以テ現ハシタルノミニシテ一定ノ税關ヲ表示スル文字ナキモノナレハ税關ノ記號ニ過キスシテ其印章ニ非ス」(四二年九月二三日宣旨大審院判決)ト。

所爲

第二 所爲

公務所ノ記號ヲ偽造スルノ罪ハ(一)公務所ノ記號ヲ押捺シタル物ヲ行使スルノ目的ヲ以テ之ヲ偽造スルノ行爲、(二)真正ナラサル公務所ノ記號ヲ以テ虛偽ナル信據力ヲ發生セシメ又ハ増大ナラシムル爲メ之ヲ使用スルノ行爲、(三)真正ナル公務所ノ記號ヲ以テ虛偽ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ増大ナラシムル爲メ之ヲ盜用又ハ濫用スルノ行爲ノ三ノ中其一アルニ依リ成立ス。其詳細ハ公務所又ハ公務員ノ印章ヲ偽造スルノ罪ニ付キ説明シタル所ニ依リ之ヲ了解シ得可キモノト認ムルヲ以テ之ヲ再說セス。

第五節 私印、私署偽造ノ罪

第六十七條

行使ノ目的ヲ以テ他人ノ印章若クハ署名ヲ偽造シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス。

他人ノ印章若クハ署名ヲ不正ニ使用シ又ハ偽造シタル印章若クハ署名ヲ使用シタル者亦同シ。

第六十八條 (第六十四條第二項、第六十五條第二項、第六十六條第二項及ヒ)

私人ノ印章

第一 客體

前條第二項ノ未遂罪ハ之ヲ圖ス。

(一) 私人ノ印章。私人ノ印章トハ自然人ノ印章及ヒ法人ニシテ公務所ニ非サル者ノ印章ヲ總稱ス。苟モ證明ノ用ニ供セラル、私人ノ印章タル以上ハ總テ私印偽造罪ノ客體タルヲ得ルモノトス。故ニ公務所ニ届出タル印鑑ニ符合スル印章ハ勿論認印、仕切判等ノ如キ證明ノ爲メ押捺ス可キ印章ハ總テ之ヲ法文ノ所謂他人ノ印章中ニ包含スルモノト解釋スルヲ相當トス。單ニ書類ニ押捺ス可キ印章ノミナラス貨物、什器等ニ押捺ス可キ印章(公務所ノ肥)モ亦私人ノ印章タルヲ失ハス。然ルニ學者或ハ私人ノ印章トハ署名者ノ同一格ヲ表章スル印章ニ非サレハ印章偽造罪ノ目的タルヲ得スト論スルカ如キハ誤レリ。若シ斯ノ如クスルトキハ普通商家ニ於テ取引關係證明ノ爲メニ使用スル受取、相濟ト刻ミタル印章ノ如キ又銀行、會社等ニ於テ使用スル印章中銀行、會社ノ同一格ヲ表章セサル各種ノ印章ノ如

キ又製造會社、營業組合等ニ於テ製造品ノ等級ヲ定メ又検査濟ヲ證明スル爲メニ使用スル印章(公務所ノ記號ニ相當ス)ヲ偽造スル行爲ノ如キハ悉ク之ヲ無罪ナリト爲サ、ルヲ得サルニ至ル可シ(註三〇〇)。

(註三〇〇) (一) 同趣旨 大審院判例、勝本、小崎諸氏。

判例ニ曰ク『印章ニハ必スシモ氏名ヲ表彰スル要ナシ從テ「相濟」ト刻ミタル印類ト雖モ押捺者ノ承諾ヲ證スル爲メ其名下ニ押捺スルニ於テハ調印ニ外ナラス』(三五年大審院判決錄六卷一六八頁)ト。勝本氏曰ク『法律ハ單ニ印ト稱シ別ニ制限スル所ナシ。故ニ印トシテ文書等ニ記載シタル事實ヲ證明スルモノタルトキハ實印タルト仕切判タルトニ論ナク罪ヲ構成ス』(刑法新義上卷五五九頁、刑法各論講義三二二頁)ト。小崎氏曰ク『私印トハ私人力使用スル所ノ印ト謂フノ儀ニシテ其實印タルト認印タルト仕切判タルト問ハサルナリ』(日本刑法論各論三八二頁)ト。

(二) 異議 署名者ノ同一格ヲ表彰スル印章ニ非サレハ本罪ノ客體タルヲ得ス。泉二氏。氏曰ク『印章ニ付テハ必スシモ氏名ヲ表彰スル文字ヲ使用スルノ要ナシト雖モ署名者ノ同一格ヲ表彰スルモノニ非サレハ偽造ノ目的タルヲ得サルモノトス』(日本刑法論七〇九頁)ト。

(二) 私人ノ署名。私人ノ署名トハ自然人ノ氏名ノ記載若クハ公務所ニ非サル法人ノ名稱ノ記載ヲ謂フ。本罪ノ客體タル可キ署名ハ自署ノミニ限ラスシテ氏名又ハ名稱ノ記載ナルコト前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。

私人ノ署名

第二 所爲

私印、私署偽造罪ハ(一)私人ノ印章又ハ署名ノ偽造、(二)偽造ノ私人ノ印章又ハ署名ノ使用、(三)私人ノ真正ナル印章又ハ署名ノ不正使用ノ三ノ中其ノ一ノ行爲アルニ依テ成立ス。

所爲

私人ノ印章又ハ署名ノ偽造

(一) 私人ノ印章又ハ署名ノ偽造。私人ノ印章又ハ署名ヲ書類其他ノ物ニ使用シ之ヲ行使スルノ目的ヲ以テ印章又ハ署名ヲ偽造スルニ依リ私印又ハ私署ノ偽造罪ヲ構成スルモノトス。私人ノ印章偽造ハ必スシモ本人ノ所有スル眞印ニ酷似スル印章ヲ作製スルヲ要セス。更ニ極言スレハ本人ノ眞印ト全然相同シカラサル印章ヲ作製シ又ハ本人カ印章ヲ所持セサル場合ニ於テ之ヲ作製スルノ行爲アリタルトキモ亦此罪アリト謂フヲ得可キコト前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ(二七八乃至二八二頁參照)。

(二) 偽造ノ私人ノ印章又ハ署名ノ使用。虛偽ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ書類其他ノ物ニ偽造ニ係ル私印又ハ私署ヲ使用ス

偽造ノ印章又ハ署名ノ使用

私人ノ眞
正ナル印
章又ハ眞
正ナル署
名ノ不正
使用

ル行爲アルニ依リ偽印又ハ偽署名ヲ使用スルノ罪ヲ構成ス。而シテ偽印又ハ偽署名ヲ使用スルニ依リ文書偽造罪ヲ以テ論ス可キ場合ニ於テハ本罪ヲ構成セサルコト前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ(二八六乃至二九三頁參照)。本罪ハ眞物ニ非サル私人ノ印章若クハ署名ヲ眞物ナリトシテ使用スル場合ニ於テ成立スルモノニシテ必スシモ眞物ニ非サル印章又ハ署名カ罪責アル者ニ依リ偽造セラレタルコトヲ必要トセサルコト前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。尙ホ此罪ニ付キ偽造ノ印章又ハ署名ノ使用罪ト印章又ハ署名偽造罪トノ競合ニ付キ説明シタル所ヲ參照ス可シ(三九九乃至四〇三頁參照)。

(三) 私人ノ眞正ナル印章又ハ署名ノ不正使用。私人ノ印章又ハ署名ヲ不正ニ使用スル罪ハ虚偽ノ信據力ヲ發生セシメ又ハ之ヲ増大ナラシムル爲メ或ハ他人ノ印章又ハ署名ヲ盗用シ之ヲ書類其他ノ物ニ押捺スルニ依リ之ヲ構成スルヲ得可ク或ハ自己ノ所有ニ係リ又ハ何人ノ所有ニモ屬セサル眞印又ハ眞署名ヲ濫用スルニ依リ構成スルヲ得可キコトハ前既ニ之ヲ述ヘ

私印、私署名ノ未遂罪

タルカ如シ(二九六乃至三〇三頁參照)。

(四) 私印、私署名偽造罪ノ未遂。法律ハ行使ノ目的ヲ以テスル他人ノ印章又ハ署名偽造ノ未遂ハ之ヲ罰セサルモ偽造ノ印章又ハ署名ノ使用又ハ眞印、眞署名ノ不正使用ノ未遂ハ之ヲ罰ス可キ旨ヲ定ム。然レトモ余ハ何故ニ前者ヲ不問ニ付シ後者ヲ罰セントスルカ其趣意ヲ見出スニ苦シムモノナリ。

第六節 刑罰

(一) 御璽、國璽、御名偽造ハ二年以上ノ有期懲役、(二) 公務所ノ印章又ハ署名偽造ハ三月以上五年以下ノ懲役、(三) 公務所ノ記號偽造及ヒ(四) 私印、私署名偽造ハ三年以下ノ懲役ヲ以テ處斷ス可ク以上ノ各行爲ニ付キ偽印、偽署名ノ使用及ヒ印章若クハ署名ノ不正使用ノ未遂ハ總則ノ規定ヲ適用處斷ス可キモノトス。

第四章 文書偽造ノ罪

第一節 文書偽造罪ノ觀念

文書偽造ノ各罪ニ對スル説明ニ入ルニ先チ第一文書偽造罪ノ法益ヲ論シ次ニ文書偽造ノ各罪ニ共通ナル所爲及ヒ客體ニ付キ略説ヲ試ム可シ。

第一款 文書偽造罪ノ法益

吾人ノ交通取引ニ關シ文書ニ依ル意思表示カ重大ナル任務ヲ有シ少シク確實ヲ貴ヒ又ハ後日ノ證據ヲ保存スルコトヲ必要トスル事項ニ就テハ其公事ニ關スルト私事ニ關スルトヲ問ハス必ス書面ヲ以テ意思表示ヲ爲スヲ以テ常トスルニ至レル所以ノ一理由ハ文書ニ對スル一般ノ信認存スルカ爲メナリ。即チ文書ハ真物ニシテ偽物ニ非ストノ信認存スルハ文書カ吾人ノ交通取引ニ於テ重大ナル任務ヲ有スル所以ノ一大理由ナリトス。

近時世運ノ進歩發達スルニ伴ヒ交通ノ範圍ハ益々擴大セラレ取引關係ハ愈々複雑ニ赴クニ從ヒ文書ヲ以テ意思ヲ表示シ取引關係ヲ明確ニシ交通上ヨリ生スル紛亂ヲ未萌ニ防クノ必要ノ大ナルハ昔日ノ比ニ非ス。加之古代ニ存セサリシ有價證券ハ盛ニ發行セラレ交通取引ニ於ケル必要缺ク可カラ

文書偽造
罪ノ法益

ナル媒介物ト爲リテ敏活ニ流通スルヲ見ル。是ニ於テカ交通取引ニ於ケル文書ノ地位ノ重要ナルコトハ昔日ノ比ニ非ス。從テ法律カ文書ニ對スル一般ノ信認ヲ保護スルノ必要ノ大ナルコトハ之ヲ往時ニ比スレハ雲泥月鼈ノ差アルニ至レリ。

今日ノ交通取引ニ於ケル文書ノ地位斯ノ如シ。然ルニ其使用セラル、文書ニシテ往々真物ニ非スシテ偽物ナルコト屢次ナリトセンカ社會一般ハ文書ヲ以テスル取引ヲ危險ナリト感スルニ至ル可ク從テ文書ニ對スル一般ノ信認ハ地ヲ拂テ消滅スルニ至ラン。若シ斯ノ如ク吾人ノ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用カ甚シク害セラル、ニ至ラハ圓滿ナル交通取引ハ之ヲ望ム能ハサル可シ。故ニ文書ノ偽造ヲ嚴罰シ以テ文書ニ對スル一般ノ信認ヲ保護スルハ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ヲ維持スル所以ニシテ即チ圓滿ナル交通取引ヲ保護スル所以タルコトヲ知ル可キナリ。

法律カ文書偽造罪ヲ規定シ之ニ依リテ保護セントスル法益ハ交通取引ニ

於ケル誠實及ヒ信用ナリ。法律カ行使ノ目的ヲ以テスル文書偽造ノ行爲ヲ罰スルハ交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ニ危害ヲ加フルカ爲メナリ。交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用ハ我判例ノ所謂公ノ信用ト其意義ヲ同ウス。行使ノ目的ヲ以テ文書ヲ偽造變造シ又ハ偽書ヲ行使スルカ如キハ之ニ依リテ今日ノ交通取引ト分離ス可カラサル關係ヲ有スル文書ニ對スル一般ノ信認ニ危害ヲ加フルモノ即チ所謂公ノ信用(交通取引ニ於ケル誠實及ヒ信用)ニ危害ヲ加フルモノナリ。此罪ハ文書ノ作製名義ヲ濫用セラレタル者ノ方面ニ於テ實體上何等ノ損害ヲ生シ又ハ生スル恐ナキ場合ト雖モ成立スルモノナルカ故ニ(頁三七)此罪ヲ以テ作製名義ヲ濫用セラレタル者ノ法益ニ對スル罪ト爲スコトヲ得ス。又此罪ハ行使ノ目的ヲ以テスル文書偽造ノ行爲アル以上ハ未タ何人ニ對シテ偽造文書ヲ行使スルヤ明カナラサル場合ト雖モ構成スルヲ以テ(三三)此罪ヲ以テ特定ノ一個人ノ法益ヲ害スル罪ト爲スコトヲ得ス(註三三)。

(註三三) 略亦同趣旨 大審院判例、泉二、小野謙氏。

判例ニ曰ク『文書偽造罪ノ成立ニハ法律ノ保護スル文書ノ真正ヲ詐ハルニ因リ公ノ信認力ヲ害スル危険アルヲ以テ足り更ニ之ニ由リテ文書ノ作成名義ヲ冒サレタル者若クハ偽造文書ノ行使ヲ受クヘキ者ニ對シテ特別ノ法益侵害アルコトヲ必要トセス』(四四年大審院判決録一五三二頁參照)。同趣旨(四四年二八二頁、四三年七二二頁、四二年一七二四頁)。又曰ク『文書偽造罪ハ偽造文書ニ署名ヲ濫用セラレタル者ノ方面ニ於テ實體上何等ノ損害ヲ生シ又ハ生スル恐ナキ場合ト雖モ其證書ノ提示ヲ受ケテ之ヲ信シテ取引ヲ爲シタル第三者ノ方面ニ於テ損害ヲ生シ又ハ之ヲ生スル恐アルトキハ完全ニ成立スルモノニシテ其損害ノ個人ノ私益ニ關スルト國家ノ公益ニ關スルトハ之ヲ問ハズ』(三七年一九〇頁)ト。同旨(三九年一三二八頁)。又曰ク『文書偽造行使罪ハ信用ヲ害スルノ罪ニシテ財產ニ對スル罪ニ非ス。故ニ金錢ヲ私スルト否トハ犯罪ノ構成ニ何等ノ影響ナシ』(三六年一八五六頁)ト。泉二氏曰ク『文書偽造ノ罪ヲ構成スル所爲ハ文書名義人又ハ文書ノ行使ヲ受クル者ニ對シテ財產上ノ損害ヲ加フルノ危険ヲ伴フ場合少カラスト雖モ文書ハ獨リ財產關係ノミニ限ラズ社會的關係ノ各種ノ方面ニ於テ使用セラレ、モノナルカ故ニ本罪ノ性質ヲ財產的概念ニ求ムルハ狹キニ失ス。是ヲ以テ舊刑法ハ信用ヲ害スル罪ノ一種トシテ分類シ新刑法モ亦信用危害ノ性質ヲ有スル他ノ罪種ト相前後シテ配置シタリ。然ラハ如何ナル信用ヲ害スルカ、特定ノ人ノ經濟的方面ニ於テ社會ヨリ與ヘラル、信用 (Kredit) ヲ侵スニ非スシテ法律上ノ關係アル事實ニ關シ文書ノ真正ナルコトニ付テ不定多衆ノ人若クハ特定ノ人カ文書ノ上ニ與フル信賴 (Anvertrauen) ヲ危害スルモノト認ムルヲ可トス。或ハ本罪ノ規定ヲ以テ文書ノ證據能力 (Beweisfähigkeit) ヲ保護スルモノナリト解スルモノアリ。趣意ニ於テハ大同小異ナリ』(日本刑法論六七二、六七三頁)ト。小野氏曰ク『刑法ニ於テ文書偽造罪ヲ認メ文書ヲ保護スル所以ハ文書ニ依テ表示セラタル意思ノ表示(權利義務)ニ關スル事實ニ關スルト若クハ單純ナル事實ニ屬スルモノトヲ包含ス』ハ文書ニ依テ之ヲ證

(註三三) 同條旨ノ註明 フォンリス、フランク諸氏(Fontenay, a. a. O.; Frank, a. a. O.)

圖畫ノ意

(二) 法文ニ所謂圖畫ノ意義。之ヲ學理上ヨリスレハ文書ノ意義中ニハ法文ノ所謂文書及セ圖畫ノ兩者ヲ包含ス。何等ノ意思ノ表示ノ記載ナキ圖畫例ヘハ人體圖、地圖ノ如キハ文書偽造罪ノ客體タル法文ノ所謂圖畫ニ非サル可シ。法文ノ所謂圖畫トハ圖畫ニ加フルニ文字若クハ之ニ代ル可キ符號ヲ以テ一定ノ意思ヲ表示セラレタル物ニ限ルモノト解セサル可カラス。即チ其畫カレタル圖面若クハ畫像ハ意思ヲ表示スル手段トシテ作ラレタル場合ニ限リ文書偽造罪ノ客體タル法文ノ所謂圖畫タルヲ得可キモノトス。例ヘハ境界ヲ明カニスル爲メ作製セラレタル圖面ノ如キ又傷害セラレタル創傷ノ個所部位ヲ明カニスルカ爲メ作ラレタル人體圖ハ孰レモ之ニ附屬スル文字其他文字ニ代ル可キ符號ト合セテ境界圖若クハ人體圖カ如何ナル意思ヲ表示スルヤヲ明カニスルモノナリ。左レハ法文ニ所謂圖畫トハ上述文書ノ意義中ニ包含スルモノト解ス可キナリ。此解釋ノ誤ラ

文書ニハ
作成者ノ
名義アル
ヲ要スル

サルコトハ我法律ニ文書偽造罪ノ章ニ圖畫ノ偽造ヲモ規定シタルニ依リ知ルニ足ラン。以下本書ニ於テ單ニ文書ト稱スルハ法文ニ所謂文書及セ圖畫ヲ併稱スルモノトス。

(三) 文書ニハ作製者ノ名義アルヲ要スルヤ。文書ハ人ノ意思表示ヲ保有スル物タルコトヲ要スルヲ以テ其意思ヲ表示シタル本人即チ作製名義者アルヲ要スルハ勿論ナリ。然レトモ意思ヲ表示シタル本人即チ作製名義者ハ文書中ニ於テ明カニ署名セラレタルコトヲ要セス。其文意ニ依リ又ハ其性質ニ依リ若クハ附屬書類其他ノ附屬物ニ依リ何人ノ意思表示ニ係ルヤ即チ何人ノ作製ニ係ルヤヲ認メ得可キトキハ之ヲ文書ナリト解スルヲ得。例ヘハ鐵道乗車券ニハ或ハ帝國鐵道應ノ文字ノ印刷アルモノアリ又ハ斯ル文字ノ印刷ナキモノアリ。斯ル文字ノ印刷ナキ場合ト雖モ鐵道ニ於テル乗車券タル性質ヨリ鐵道應ノ發行ニ係ルコトヲ認ム可キ場合ノ如キハ物ノ性質ニ依リ何人ノ意思表示ニ係ルヤヲ認メ得可キ例ナリトス。

又封書ヲ以テ意思ノ表示ヲ爲ス者カ封中ノ書類ニ署名ヲ爲サス封皮ニ署名ヲ爲シタル場合ニ於テハ封中ノ文書ハ封皮記載ノ人ニ依リ作製セラレタルモノト認め得可キカ如キハ附屬物ニ依リ何人ノ意思表示ニ係ルヤヲ認め得可キ例ナリ(註三四)。

(註三四) 略本同趣旨 フォンリス博士(F. F. F. O.)大審院判例、小嶋、泉二諸氏。

判例ニ曰ク「文書ノ署名トハ文書自體ニ爲シタル署名ノ謂ナレハ文書ヲ離レテ他ノ物體ニ爲シタル署名ハ縱シヤ其物體カ該文書ニ添付セラレ又ハ之ヲ封入スルノ用ニ供セラレタル場合ト雖モ文書ノ一部分ヲ爲ス可キモノニ非ス。從テ該文書ト他ノ物體ニ爲シタル署名トハ各々獨立シテ其效力ヲ有スルモノトス。而シテ本件文書ハ文書其レ自體ニアリテ何人ノ作成ニ係ルモノナルヤ之ヲ知ルニ由ナシト雖モ之ヲ封入シタル封筒面ノ署名ハ其文書ヲ作成シタル者ノ誰ナルヤヲ知ラシムルノ具ト爲ルモノナレハ本件被告ノ如ク右封筒面ノ書面ヲ偽造シテ其封筒ニ文書ヲ封入シ以テ其文書カ右署名者ニ依リ作成セラレタルモノナルカ如ク裝ヒ共ニ行使シタル所爲ハ舊刑法ニ從ハハ第二百十條第二項第二百十二條ニ依リ處分ス可ク云々(四二年大審院判決録三二二頁)ト。小嶋氏曰ク「文書ハ意思ノ表示ナルカ故ニ其思想ハ何人ニ依テ表示セラレタルヤ換言スレハ其文書ハ何人ニ依テ作成セラレタルヤハ文書自體ニ於テ(明示又ハ文書ト他ノ事情トノ補助ニ依リ)之ヲ認識シ得可キコトヲ要ス。然ラサレハ證據文書ノ性質(證據力 Beweishilichkeit) ナク除ス可シ。然レトモ之ヲ認識シ得セシムル形式ハ署名ニ限ル可キ理由ナク花押、押印、姓又ハ名ノミノ記載ヲ以テ足レリ。又ハ特別ノ書風ニ依テ何人ノ作製ニ係ルカヲ當事者間ニ於テ判定シ得可キ場合

文書ノ記
載ハ符號
ヲ以テス
ルヲ得ル

或ハ署名ニ代フルニ略號ヲ用ヒタル場合ヲモ包含ス可キナリ(日本刑法論各論三二二頁)ト。泉二氏曰ク「意思表示ハ特定ノ表意者アルコトヲ前提トス。從テ表意者ノ何人タルカヲ認知ス可カラサル書類ハ文書タルヲ得ス。然レトモ署名又ハ捺印ハ文書ノ要件ニ非ス(刑、一五五條三項、一五九條三項參照)。文書其モノ、内容、形式等ヨリ(文書以外ニ存スル諸種ノ事情ヲ附加スルコトナク)表意者ヲ認識スルコトヲ得ルヲ以テ足ル」(日本刑法論六七三、六七四頁)ト。

(四) 文書ノ記載ハ記號ヲ以テスルヲ得ルヤ。文書ハ表示セラレタル意思ヲ保有スル各種ノ物ヲ指稱スルコトハ前既ニ一言シタルカ如シ。而シテ文書ヲ以テスル意思表示ハ文字ヲ使用シテ之ヲ爲スヲ通常トスト雖モ文字ニ代ル可キ記號ヲ使用シテ之ヲ爲シタル物モ亦文書タルヲ失ハス。文字ハ元來意思ヲ表示スル一種ノ符號ニ外ナラス。而シテ國ヲ異ニスルニ從ヒ文字モ多數ノ種類ニ分割セラレ。如何ナル種類ノ文字タルヲ問ハス苟モ之ヲ以テ意思ノ表示ヲ記載セラレタル物カ文書タルコトニ付テハ何人モ爭ハサル所ナル可シ。假令其文字カ絶海ノ一孤島ニ於ケル蠻民ニ依リ使用セラレ、モノナルト否トハ之ヲ擇ムコトナシ。又其文字ヲ了解スル

者ノ少ナキヤ否ヤハ之ヲ問フ所ニ非ス。此趣旨ヨリスレハ文字ト同シク意思ヲ表示スル手段トシテ使用セラル、符號ハ之ヲ文字ト同一視セサル可カラス。故ニ電信ノ符號、盲者用ノ突起符號等ハ之ヲ文字ト同一視ス可ク從テ此等符號ニ依リ爲サレタル意思ノ表示ヲ保有スル物ハ之ヲ文書ナリト解ス可キモノトス。又之ト同一理ニ依リ意思表示ヲ補足センカ爲メ畫カレタル圖畫等モ亦其使用セラレタル文字ト相待テ文書ノ一部ヲ爲スモノト解セサルヲ得ス(註三五)。

(註三五) (一) 同趣旨 大審院判例、岡田、勝本、小崎、泉二、牧野諸氏。

判例ニ曰ク「電信中繼紙ハ官文書ナリ」(三年大審院判決第一〇卷八頁)ト。岡田氏曰ク「文書ハ言語又ハ言語ニ代ル可キ符號ヲ以テ或物品ノ上ニ附着セシメタル思想ノ説明ナリ。文字ニ代ル可キ符號ハ電信符號或ハ盲者ニ使用セラル、符號ノニカ現時度ク人ノ使用スル所ナリ。此等ノ符號ノ如キハ其使用ヲ爲ス人ノ區域餘リ廣カラスト雖モ直ニ文字ニ代ル可キモノニシテ思想ヲ表白スル上ニ於テハ敢テ文字自體ト區別ナキカ故ニ之ト同一ニ論セサル可カラス。尙ホ速記文字ノ如キモ之ト全ク相等シキナリ」(刑法講義一一五、一一六頁)ト。勝本氏曰ク「表音的文字ヲ以テ記載シタルト形象的文字ヲ以テ記載セラレタルモノトナ間ハズ專ラ或ル事實又ハ思想ヲ表示スルカ爲メニ記載セラレタルモノ即チ書證ト爲リ得可キモノヲ總稱スルモノトス」(刑法析義上卷四八三、四八四頁、刑法各論講義二七六頁)ト。小崎氏曰ク「文字又ハ文字ニ代ル可キ符號ヲ記載シタルモノト雖モ此等ノ文字ハ符號自體ニ依リテ直ニ一定ノ意思ヲ了解シ得可キ場合ニ限リ文書ト謂フコトヲ得可キナリ」(日本刑法論各論三二八、三二九頁)ト。泉二氏日本刑法論六七四頁、牧野氏刑法通義二六六、二六七頁參照。

(二) 異説 符號又ハ暗號ヲ以テ作りタル物ハ文書ニ非ス。大審院判例、谷野氏。判例ニ曰ク「凡ソ文書トハ符號又ハ暗號ノ如キモノヲ謂フニ非ス。故ニ電機ヲ使用シ現字紙ニ虛偽ノ電報符號ヲ現出セシムルモ官文書偽造ト謂フヲ得ス」(二五年大審院判決第四卷一五頁)ト。谷野氏曰ク「文書ト謂フ以上ハ必ず主トシテ文字ニ依リタルモノナラサル可カラス。繪畫又ハ記號カ文字ニ依ル意思表示中ニ散見スルコトハ文書タルコトヲ害セサル可シト雖モ單ニ繪畫又ハ記號ノミニ依ル意思表示ハ文書ト謂フヲ得サル可シ」(刑法各論講義二九八頁)ト。

(五) 文書ハ法律上ノ事項ヲ包含スルモノタルヲ要スルヤ。廣ク文書ト謂フトキハ意思表示ヲ保有スル各種ノ物ハ之ヲ文書ナリト指稱ス可キコト前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。然レトモ文書偽造罪ノ客體タルヲ得可キ文書ハ獨リ法律上ノ事項ヲ包含スル文書ニ限ルヤ更ニ詳言スレハ法律上ノ事項自體ヲ包含シ又ハ之ニ影響ヲ生ス可キ内容ヲ包含スル文書ナラサル可カラサルヤ否ヤノ疑問ニ至リテハ之ヲ區別シテ解答ヲ與ヘサル可カラス。

文書ハ法律上ノ事項ヲ包含スルモノタルヲ要スルヤ

文書偽造罪ノ客體タル文書ハ第一詔書其他天皇ノ文書第二公務所若クハ公務員ノ文書第三私人ノ文書及ヒ第四醫師ノ文書ノ四種ナリ。此種ノ文書ノ中公務所若クハ公務員ノ文書ハ公務實行ノ爲メ作製セラレ、文書ナレハ法律上ノ事項ヲ包含スル文書タルコト疑ナク、第三私人ノ文書ハ權利義務又ハ事實證明ニ關スル文書ノミカ此罪ノ客體タル可キ旨ノ明文アリ。又醫師ノ文書ハ之ヲ公務所ニ提出ス可キモノニ限り此罪ノ客體タル可キモノナレハ此等三種ノ文書ハ孰レモ法律上ノ事項自體又ハ之ニ影響ヲ及ホス可キ内容ヲ包含セサル可カラスト解スルヲ得可シ。然レトモ天皇ノ文書中殊ニ宸翰中ニハ法律上ノ事項自體又ハ之ニ影響ヲ生ス可キ内容有セサルモノナシト爲サス。而シテ行使ノ目的ヲ以テスル斯ル文書ノ偽造ハ天皇ノ文書ノ偽造罪ヲ構成ス可キコト一點ノ疑ナシ。故ニ文書偽造罪ノ客體タル可キ文書ハ法律上ノ事項自體又ハ之ニ影響ヲ生ス可キ内容ヲ包含スルモノタルヲ要スルヤ否ヤノ疑問ニ關シテハ天皇ノ文書ニ關シ

故意ニ基
ク文書及
ヒ偶然文
書

テハ消極ノ解答ヲ爲シ公務所若クハ公務員ノ文書私人ノ文書及ヒ醫師ノ文書ニ關シテハ積極ノ解答ヲ與フ可キモノトス。

法律上ノ事項ヲ包含スル文書ニニアリ。其一ハ權利ノ設定移轉變更等法律行為ヲ爲スカ爲メ又ハ事實ノ言明ノ爲メ作ラレタルモノニシテ、其二ハ作製ノ當時ニ於テハ法律上ノ事項ニ付キ作製セラレタルニ非サルモ後日法律上ノ事項ヲ證明スル爲メニ使用スルコトヲ得可キモノ是ナリ。前者ハ法律上ノ事項自體ヲ包含スル文書ニシテ學者之ヲ稱シテ故意ニ基ク文書 (Absichtsurkunde) ト謂ヒ後者ハ法律上ノ事項ニ影響ヲ生ス可キ内容ヲ包含スル文書ニシテ學者之ヲ偶然文書 (Zufallsurkunde) ト稱ス。然ルニ學者或ハ文書偽造罪ノ客體タル可キ文書ハ事實ノ存在ヲ證明スル爲メ作製セラレタルコトヲ要スト論スルカ如キハ狹キニ失ス (註三六)。

(註三六) (一) 同前註 フランク、フオンリス、(Frank, a. a. O.; v. Listz, a. a. O.) 及ヒ岡田、泉二、小崎、

牧野諸氏。

ヲ敗リタル結果ヲ指シ書ヲ生シ得キモノトハ單ニ信據力ヲ敗ルモ未タ其結果ヲ見サル場合ニ符合セリ(現行刑法原論一三三、一三四頁)ト。

(二) 對照不可判例及ヒ學說 書ヲ生シ又ハ生シ得キコトヲ要ス。大審院判例、勝本、泉二、小崎、岡田諸氏。判例ニ曰ク『文書偽造行使罪ヲ構成スルニハ其文書ヲ偽造行使シタルニ因リ他人ニ害ヲ生シ又ハ生シ得キコトヲ要ス。從テ他人名義ノ文書ヲ偽造行使スルモ其著ノ爲メ必ス利益ヲ生シ損害ヲ生ス可カラサルトキハ犯罪ヲ構成セズ(三五年大審院判決録四卷一七三頁)ト。又曰ク『尙モ文書ヲ偽造行使スルニ於テハ其文書カ絕對ニ實害ヲ生セシメ能ハサルモノニ非サルヨリハ文書偽造罪ヲ構成ス。而シテ其程度ヲ決定スルハ一ニ事實裁判所ノ職權ニ屬ス(三六年一四一五頁)ト。勝本氏曰ク『文書カ證明セント欲スル所ノ事實ニ關スルコトヲ要ス。是レ文書ノ偽造カ罪トシ罰セラル、爲メニハ害ヲ生シ得キコトヲ要スト謂フヨリ當然生スル所ノモノタリ。蓋シ法律上所謂文書ナルモノハ證據即チ事實ヲ證明スルノ用ニ供スルモノニシテ、其偽造又ハ變造ハ證據ヲ偽ハルニ存ス(刑法折衷上卷五〇三頁、刑法各論講義二八八頁)ト。泉二氏曰ク『文書偽造ノ罪ニ於ケル行爲ハ法律上ニ於テ關係アル事實ニ付テ不法ナル影響ヲ生セシメ得ルモノナルコトヲ要スルハ本罪ノ性質上否定ス可カラサル條件ナリ。此意味ニ於テハ實害ヲ生スル虞アルコトヲ要件ナリトスル見解チ是認セサル可カラズ(日本刑法論六九三頁)ト。小崎氏曰ク『文書偽造(變造)行使スルトキハ不正文書ニ依テ他人ヲ欺罔スルノ危險ヲ生ス可キニ依リ茲ニ本罪ヲ完成スルモノニシテ從來我大審院判例ニ於テ採ル所ノ條件即チ文書ヲ偽造行使スルコトニ依テ他人ニ害ヲ生シ又ハ生シ得キコトヲ要スルハ明文ニ依ラザル獨斷的條件ヲ附加シタルモノニシテ不當ナリト謂ハサル可カラズ(日本刑法論各論三四四頁)ト。岡田氏刑法講義一二五、一二六頁參照。

略式文書
ハ之ヲ文書
ト稱スル
ヤルヲ得ル

(七)

署式文書ハ之ヲ文書ト稱スルヲ得ルヤ。文書トハ意思表示ヲ保有スル各種ノ物ヲ指稱ス可キコトハ前既ニ之ヲ説明シタルカ如シ。故ニ文字又ハ之ニ代用ス可キ符號ニ依リ表意者カ如何ナル意思ヲ表示シタルヤヲ了解シ得キトキハ之ヲ文書ト稱シ得キコトハ爭ナキ所ナリ。茲ニ爭ノ存スルハ物自體ニ於ケル文字若クハ符號ヲ以テスル表示カ完全ナラスシテ其物自體ニ存スル文字又ハ符號ノミニ依ルトキハ果シテ如何ナル意思ヲ表示シタルヤ之ヲ知ル能ハサルモ慣習又ハ周圍ノ事情ニ依リ其物ニ存スル文字又ハ符號ハ如何ナル意思表示ナルヤヲ知リ得キトキハ之ヲ文書ト稱スルヲ得ルヤ否ヤノ點是ナリ。例ヘハ記名株券ヲ賣買スル者ノ間ニ存スル慣習ニ從ヒ記名株券ト共ニ交付シタル白紙委任狀帝國鐵道廳カ手荷物ト引換ニ交付スル合札(チエツキ)ノ如キハ之ヲ一定ノ範圍内ニ於ケル權利ヲ付與シタル文書若クハ手荷物ノ引換ノ證タル免責證券ト解シ得可キヤ否ヤノ疑問是ナリ。余ヲ以テ之ヲ觀レハ元來文書ニ於ケル文字又

ハ符號ハ表意者ノ意思ヲ表示スル一方法ニ過キサルヲ以テ表意者ニシテ一定ノ意思ヲ表示スル爲メ簡單ナル文字又ハ符號ヲ使用シタル場合ニ於テ何人モ之ニ依リ表意者カ如何ナル意思ヲ表示シタルヤヲ知リ得可キトキハ斯ノ如キ文字又ハ符號ノ記載アルモノハ之ヲ文書ナリト解釋ス可キモノト信ス。記名株券ニ添付セル白紙委任狀ノ如キ既ニ委任狀ト記シ作成者ニ於テ記名捺印ヲ爲シタル以上ハ記名者カ株券ニ關シ一定ノ權利ヲ付與シタル意思ヲ表示シタルモノト看做ス可ク第三者モ亦白紙委任狀ノ授受ヲ以テ一定ノ範圍ニ於ケル權利ノ付與アリタルモノト解釋シ得可キモノナレハ假令委任事項ノ記入ナキモ之ヲ文書ナリト指稱スルニ何等ノ妨アルヲ見ス。又鐵道應カ手荷物ノ引換證トシテ交付スル合札(チエツキ)ノ如キハ鐵道應ニ於テ其預リタル手荷物ヲ合札持參人ニ交付ス可キ旨ヲ表示シタル一種ノ免責證券ト解ス可ク又何人モ此合札ヲ以テ一種ノ免責證券ト解スルモノナレハ單ニ番號記章アルニ過キサルニモセヨ之ヲ一種

ノ文書ト解釋スルモ失當ニ非サル可シ。若シ白紙委任狀ヲ以テ或權限ヲ付與スルノ意思ヲ表示シタル文書ト解シ得可カラストスルトキハ記名株券ヲ買受ケ之ト共ニ株券ノ名義者ノ白紙委任狀ヲ受取リタル者ハ其株券ニ對シ何等ノ處分ヲ爲ス能ハサル可シ。又鐵道應ノ合札(チエツキ)ヲ以テ免責證券ヲ效力アル一種ノ文書ナリト解スル能ハサルモノトスルトキハ鐵道應カ合札ト引換ニ荷物ヲ合札ノ持參人ニ引渡シタル場合ニ於テモ鐵道應ハ後日荷物ヲ真正ノ所有者ノ請求ニ應シ之カ引渡ヲ爲スノ義務アルモノトセサルヲ得サルニ至ル可シ。斯ノ如キ解釋ハ慣習ニ矛盾スルモノニシテ常識ニ反スルコト甚シ。之ヲ要スルニ假令物自體ニ存スル文字符號等ノミニ依ルトキハ如何ナル意思ノ表示ナルヤ之ヲ知ル能ハサル場合ト雖モ之ト慣習又ハ周圍ノ事情等ニ依リ如何ナル意思ヲ表示シタルヤヲ知リ得可キ場合ニハ之ヲ文書ナリト解ス可キナリ。故ニ現今行ハル、鐵道乗車券中ニハ長方形ノ厚紙ニ年月日ニ相當スル數字、發驛、著驛、番號、等號、

賃錢ノ記入アルノミニテ乗車券タルヲ示ス可キ文字又ハ何人カ發行者タルヤヲ示ス可キ文字ナキ札モ之ヲ文書ト稱シ得可ク又殆ト之ト同様ノ記載アル電車乗車券ノ如キモ亦鐵道乗車券ト同一ニ論ス可キモノトス。又判例カ認ムル如ク或樹木ノ拂下木ナルヤ否ヤヲ證明スル爲メ當該官吏カ記載シタル番號ノ如キ又帝國鐵道應カ小荷物ノ發送ニ付キ使用スル驛名札ノ如キモ上述ノ理由ニ依リ之ヲ文書ナリト解ス可キナリ(註三八)。又名刺ノ如キハ其性質上其差出人カ其名刺ノ本人タルコトヲ示ス文書ナレトモ法律上ノ事項ヲ包含スルモノニ非サレハ文書偽造罪ノ客體タル可キモノニ非ス。

(註三八) (一) 同趣旨 獨逸帝國裁判所判例、ヨーン、リーテル氏等及ヒ我大審院判例。

獨逸帝國裁判所ノ判決ニ曰ク『之ヲ一定ノ作業ヲ爲シタル證トシテ交付セラル可キ番號ヲ記載シタル眞餘札ハ文書ナリ』(E. 4. 3.)。『モーハ、リーテル兩氏ハ此判決ニ賛成ヲ表セリ』(John, Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft, O. 64, Heft 2, Gerichtssaal 38, 552.)。判例ニ曰ク『白紙委任狀ナルモノハ委任事項ノ記載ナキモ一定ノ範圍ニ於テ權利ヲ付與スルノ意思ヲ表示スルモノナル以上ハ其實質ニ於テハ權利付與ノ文書ナリトス。從テ刑

法ニ所謂權利義務ニ關スル證書ニ外ナラズ』(三六年大審院判決第一三六五頁)ト。又曰ク『白紙委任狀ナルモノハ明カニ委任事項ノ記載ナキモ主タル文書ノ處分ヲ目的トスル範圍ニ於テ權利ヲ付與スル意思ヲ表示セル以上ハ一種ノ文書ニシテ權利義務ニ關スル證書ナリトス』(三九年九七八頁)ト。同主旨(二九年八卷六頁、九卷一二五頁、一〇卷四〇頁、三三年六卷一八頁、一〇卷四三頁)。又曰ク『或樹木ノ拂下木タルヤ否ヤヲ證明スル爲メ之ニ記載シタル番號ハ當該官吏カ職務上記載セル文書ニシテ刑法第九十六條、第九十七條(舊)等ノ所謂記號ニ非ズ』(四〇年五九頁)ト。又曰ク『帝國鐵道應カ手荷物ノ發送ニ付キ使用シタル驛名札ハ舊刑法ニ在テハ其第二百三條ニ所謂官ノ文書ニシテ現行刑法ニ於テハ第五十五條第三項ニ所謂公務所ノ作ル可キ文書ニ該當ス』(四二年八七七頁)ト。又曰ク『鐵道乘車券ハ權利義務ニ關スル證書ナリ』(三三年九卷三頁)ト。同主旨(三四年一卷五二頁)。

(二) 異説 物自體ニ存スル文字、番號ニ依リ意思表示ヲ知ル能ハサルモノハ文書ニ非ス。フランク氏其他ノ學者(Vergl. Frank, III. 3. zu § 267.)。岡田・泉二・小崎・牧野諸氏。

岡田氏曰ク『文字及ヒ文字ニ代ル可キ符號ノ附著セラレテ成立シタル所ノ物カ一定ノ思想ヲ示スニ足ル可キ章句ヲ爲スニ非サレハ文書ト謂フヲ得ス。故ニ名刺若クハ下足札ノ類ハ氏名又ハ番號ヲ表ハシタルノミニシテ其氏名又ハ番號ノ文字カ何等ノ思想ヲモ發表スルコトナシ。或ハ此等ノ物ハ他ノ狀況ニ合併スレハ固ヨリ一定ノ事實證明ノ用ニ供セラレサルニ非スト雖モ是レ其狀況ト文字トノ集合ニヨリテ唯々或事實ノ判斷ヲ輪クルノミニテ文字自體ニ依リテ何等ノ思想ヲモ説明セス。故ニ此等ノモノハ文書ニ非スト謂ハサル可カラス』(刑法講義一一七頁)ト。泉二氏曰ク『文字(之ニ代ル可キ符號モ含ム)ヲ以テ記載シタル意思表示タルコトヲ要スルカ故ニ文書其物ニヨリ認知スルコトヲ得サル意思表示ハ文書タルヲ得ス。例ハ名刺ノ交付ハ紹介、訪問又ハ用向等ヲ意味シ、門札ノ掲示ハ住居

第四章 文書偽造ノ罪 第一節 文書偽造罪ノ概念

者ノ何人タルカ示スルコトヲ得可シト雖モ其等ノ文字ハ何等ノ意思表示ヲ包含セサルカ故ニ文書ニ非ス。又境界標石ハ之ヲ境界ニ建設スルニ因リ境界ヲ説明スルコトヲ得ルモ土地トノ關係ヲ離ル、トキハ何等具體的ノ意思ヲ表示セサルカ故ニ文書タルヲ得ス。要スルニ周圍ノ狀況ヲ綜合シテノ一定ノ意味ヲ表ハスモノハ文書ニ非サルナリ。然レトモ一般ニ通用スル略文式ニ依ル意思表示ハ尙ホ文書タルヲ得可シ。例ヘハ鐵道乘車券、電車回數乘車券、同乘換券ノ如キモ其性質上ニ於テハ文書ナリ。日本刑法論六七五頁。小崎氏曰ク「株券ノ賣買ニ於テ普通賣渡人ノ署名ノミアル白紙委任狀ト稱スルモノヲ添付スルコトアルモ、所謂白紙委任狀ナルモノハ委任事項ニ付キ何等ノ記載ナキカ故ニ假令賣買ヲ證ス可キ物件ト謂フコトヲ得可キモ文書ト謂フヲ得ス」日本刑法論各論三二〇頁、尙ホ三一八、三一九頁參照。牧野氏刑法通義二六七頁參照。

(八) 文書ハ永久ニ存在ス可キコトヲ要スルヤ。人ノ意思表示ヲ保有スル物

自體カ永久ニ存在ス可キ性質ヲ有セサルモ亦物ノ上ニ存スル意思表示ニシテ永久ニ存在ス可キ性質ヲ有セサルモ未タ其存在ヲ失ハサル以上ハ之ヲ文書ナリト解スルニ何等妨ナキモノトス。人ノ意思表示ヲ保有スル物ノ中ニ就テ比較的永久存續シ得可キ物ノミヲ以テ文書ナリト解シ然ラサル物ハ文書ニ非スト解セントスルカ如キハ何等ノ根據ナキモノトス。若シ意思表示ヲ保有スル物自體カ消滅スルカ又ハ物ノ上ニ存スル意思表示

文書ハ永久ニ存在ス可キコトヲ要スルヤ

カ消失シテ之ヲ認ムルコト能ハサルニ至リタルトキハ文書ハ其存在ヲ失ヒタルモノト謂ハサル可カラス。然レトモ未タ其存在ヲ失ハサル間ハ依然文書タルヲ失ハサルコトハ論ヲ俟タサル所ナル可シ。故ニ鉛筆ヲ以テ記シタル意思表示ノ如キ又ハ塗板ノ上ニ白墨ヲ以テ申込及ヒ之ニ對スル承諾ヲ記シタル筆談ノ如キハ完全ナル文書ナリト解スルヲ得可シ。故ニ其未タ存在ヲ失ハサルニ先チ之ヲ文書タル性質ヲ有セサルモノナリト論スルカ如キハ相當ナラス(註三九)。

(註三九) 異説 文書トハ比較的永久保存シ得可キ體裁ヲ以テ作ラレタルヲ要ス。岡田、小崎、牧野諸氏。

岡田氏曰ク「論者ノ中思想ノ説明ハ或ル物ノ上ニ永著サル、コトヲ必要トズルカ故ニ塗板ノ面ニ白墨ヲ以テ或ル事項ヲ印シタルカ如キハ證據文書ニ非スト論スル者アリ。而シテ永久附着スルカ單ニ一時ノ爲メナルカハ圓ヨリ程度ノ問題ニシテ時間ノ觀念ヲ離レテ説明スルコトヲ得スト雖モ書類ハ證據物中ニ於テ信用ノ關係上重キキ置カル、所以カ比較的永久其思想ノ説明ヲ保存セラル、ニ在リ此事實ヨリ推測シテ刑法ニ所謂證據文書ハ少クトモ比較的永久之ヲ保存シ得ル體裁ヲ以テシタルモノナラサル可カラスト信ス」刑法講義一一九、一二〇頁。ト。小崎氏曰ク「刑法ニ所謂文書トハ永続的ニ結合スルコトニ依テ形ヲ與ヘラレタル文字又ハ代用文字ニ依ル意思ノ表示ニシテ證據力アルモノヲ謂フ爰ニ永続的トハ直チニ消滅スル場合ノ反對ニシテ例ヘハ水ヲ以テ板ノ上ニ文字ヲ書スルカ如キ場合ヲ

包含セサルノ謂ニシテ自墨ヲ以テ書スル場合ハ時トシテ永続的ト謂フコトヲ得可シ(日本刑法論各論三一六頁)ト。
牧野氏曰ク「記載ハ一時的ナルモノアリ繼續的ナルモノアリ通常ノ意義ニ於テハ文書ハ此後者ヲ指稱ス故ニ砂上ノ文字ノ如キハ文書ト稱スルコト得サルナリ(刑法通義二六六頁)ト。

文書ノ贋
寫物ハ贋
物ト稱ス
ルコトナ
得ルナリ

(九)

文書ノ贋寫物ハ之ヲ文書ト稱スルヲ得ルヤ。文書ノ贋寫物ハ必スシモ
原本ノ作製者ノ意思ノ表示自體ヲ保有スル物ト謂フヲ得サルカ故ニ原本
ヲ寫シ取リタルモノナリト稱シ寫本ヲ偽作シタル一事ヲ以テ文書ノ偽造
アリト謂フ能ハス。然レトモ文書ノ贋寫物ハ原本ト同一ナル内容ヲ保有
スル物ナリトノ贋寫者ノ意思表示ヲ保有スル一種ノ文書ナリ。故ニ第三
者カ贋寫者カ寫シ取リタル物ナリト偽リ贋寫物ヲ作製スルトキハ文書ノ
偽造アリタルモノト謂フヲ得可シ。故ニ學者或ハ贋寫物ノ偽造ヲ以テ罪
ト爲ラスト論シ獨リ公務員ノ職務上作製スル贋本抄本ヲ偽造スル場合ニ
於テノミ罪ト爲ルカ如ク論スルハ相當ナラス(註四〇)。

(註四〇) (一) 同題旨ノ註明 Frank, III, p. 21 § 267.
(二) 異説ナルカ如シ 小崎、泉二諸氏。

草案ハ之
ヲ文書ト
稱スルコ
トナ得ル

(十)

草案ハ之ヲ文書ト稱スルヲ得ルヤ。文書ハ意思ノ表示ヲ保有スル物タ
ルヲ以テ足ル可キモノニシテ其表示セラレタル意思ハ敢テ確定不動ノモ
ノタルヲ要セス。故ニ表意者カ一時有シタリシ意思又ハ假リニ表示シタ
ル意思ヲ保有スル文書例ヘハ草案ノ如キモ亦一種ノ文書タルヲ失ハス。
草案ノ如キモ之ニ依リ表意者ノ意思表示ノ經過及ヒ變遷ヲ認ム可キ最モ
必要ナル證據方法トシテ使用シ得可キモノニシテ之ヲ文書ニ非スト解ス
ルカ如キハ何等ノ根據ナシ。若シ文書ヲ以テ表示セラレタル意思カ確定

小崎氏曰ク「贋寫ハ意思表示ノ複製ニシテ意思表示自身ニ非ス。從テ原ニ贋寫トシテ之ヲ偽造、變遷シ之ヲ行使スル
モ文書ニ關スル罪ヲ構成セスト雖モ(イ)之ヲ贋寫シタル者ニ於テ原本ト相違ナキコトニ關シ意思ノ表示ヲ爲シタル
トキハ此範圍ニ於テ文書ト謂フコトヲ得可シ。(ロ)作製者ニ於テ複製物ヲ原本トシテ行使スルノ意思ヲ有スルトキ
ハ此場合ニハ贋寫アレタルモノ即チ原本ニシテ元ヨリ文書ト謂フコトヲ得可シ(日本刑法論各論三一七、三一八頁)
ト。泉二氏曰ク「文書ノ偽造變遷ハ真正ナル文書其ノモノナルカ如ク偽リテ不真正ナル文書ヲ造成スルコトヲ要件
トスルモノニシテ真正ナル文書ノ草案又ハ贋寫ナルカ如ク偽擬シタル書面ノ作成ヲ包含セス。然レトモ公務員ノ職
務上作成スル贋本、抄本ノ類ハ其自身ニ於テ公成文書タルコト疑ナキカ故ニ其贋本、抄本其モノニ偽擬シテ書面ヲ
作成スルハ文書偽造ノ罪ヲ構成ス可シ(日本刑法論六八七頁)ト。

不動ノモノタルヲ要スト爲サハ例ヘハ假契約ヲ記載シタル文書ノ如キハ之ヲ文書ニ非スト解セサル可カラサルニ至ラン。學者或ハ草案ノ如キハ意思表示ノ準備ナレトモ意思表示自體ニ非サルカ如ク論スルモノアレトモ確定意思ヲ表示スルノ準備トシテ表示セラレタル意思ヲ保有スル物ハ何故ニ文書ナリト解スル能ハサルヤハ余ノ了解ニ苦ム所ナリ(註四一)。

(註四一) 異説 フランク氏其他獨逸ノ學者及ヒ小崎、牧野、泉ニ諸氏。

フランク氏ハ文書ノ草案ハ文書ニ非ス。草案ハ意思表示ノ準備ナレトモ意思ノ表示自身ニ非ス。文書ノ草案ヲ草案トシテ偽造シ又草案トシテ使用シタル場合ニ於テハ文書偽造罪ヲ構成セスト論ス。尙ホ獨逸ニ於テ之ニ賛成スル論者ナキニ非ス(Frank, III. 1. zu § 367)。小崎氏曰ク「草案ハ意思表示ノ準備ニ止マリ意思表示自體ニ非サルカ故ニ文書ニ非ス。從テ草案トシテ之ヲ偽造、變造シ之ヲ行使シタルノミニテハ未タ文書ニ關スル罪ヲ構成セス」(日本刑法論各論三一六、三一七頁)ト。牧野氏曰ク「文書ノ偽造ハ一定ノ人カ一定ノ意識ヲ有セザリシニ拘ラス之ヲ有シタルモノナリトスルニ在ルカ故ニ意識ノ表明トシテ確定的ニ記載セラレタルモノナラサル可カラサルナリ。故ニ草案ヲ偽造スルカ如キハ文書偽造ニ非ス。草案ハ一ノ文書ナリ。然レトモ草案ハ本人ノ意識ノ眞正ナル表明トシテ本人カ確定シタル所ノモノニ非ス。故ニ草案ヲ草案トシテ偽造スルハ罪ト爲ラズト解スルナリ」(刑法通義二六八頁)ト。尙ホ泉二氏ノ所説ニ關シテハ(註四〇)ノ中同氏ノ所説ヲ參照ス可シ。

第三款 文書偽造罪ヲ構成ス可キ所爲

文書偽造罪ヲ構成ス可キ所爲

文書偽造罪ハ第一文書ノ偽造、第二文書ノ變造、第三文書ノ偽作、第四偽造、變造又ハ偽作ニ係ル文書ノ行使ノ四ノ中其一アルニ依リ構成スルモノトス。此等各行爲ニ付キ之ヲ説明スルニ先チ注意ス可キモノアリ。其ハ文書ハ行使ノ目的ヲ以テ偽造セラレタル場合ニ限り犯罪ヲ構成ス可キモノニシテ行使ノ目的ヲ有セサル文書ノ偽造ハ罪ト爲ラサルコト是ナリ(刑一五四、一五五前段)。

第一 文書ノ偽造

文書ノ偽造

文書ヲ偽造ストハ一定ノ人カ元來文書ヲ以テ意思ノ表示ヲ爲シタルコトナキニ拘ラス外觀上恰モ之ヲ爲シタルカ如ク其人ノ意思ノ表示ヲ保有スル文書ヲ作製スルヲ謂フ。故ニ文書偽造ハ常ニ文書ニ於ケル作製名義者ノ人格ヲ僞ルモノナリ。例ヘハ行爲者カ新ニ他人ノ名義ノ金子借用證ヲ作製スルカ如キ又他人ノ署名捺印アル白紙ヲ濫用シテ契約書ヲ作製スルカ如キ又

自己ノ名義ノ金子借用證又ハ契約書ヲ他人名義ニ變更スルカ如キ孰レモ文書ノ偽造ニシテ其特質トスル所ハ其文書ニ存スル作製名義者ノ人格ヲ偽ル點ニ在リ。

文書ハ之ニ依リ意思ヲ表示シタル本人即チ作製名義者ヲ文書面ニ明示スルコトアリ又之ヲ明示セサルコトアルハ前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。其之カ明示アリタルトキ殊ニ作製名義者ノ署名若クハ印章ニ依リ之カ表示アリタルトキハ其文書ノ信據力ハ其然ラサルモノニ比シ大ナルハ言フヲ俟タス。左レハ法律ハ文書偽造罪ヲ分テ(甲)印章若クハ署名アル文書ノ偽造ト(乙)印章若クハ署名ナキ文書偽造トノ二ニ大別シ前者ニ對スル刑罰ハ後者ノ夫レニ比シ著シク之ヲ重カラシメタリ。茲ニ疑問トス可キハ印章又ハ署名ヲ偽造シタル者カ之ヲ使用シ文書ヲ作製シタル場合ニ於テハ印章若クハ署名ヲ偽造スル罪ト印章若クハ署名アル文書ヲ偽造スル罪トノ二罪ヲ構成スルヤ若クハ單ニ其一罪ヲ構成スルヤノ一事ナリ。此點ニ付テハ便宜上後段文書ノ

眞實ナル
内容ヲ有
スル文書
ノ爲ト爲
ルハ書

偽造、變造若クハ偽作ト偽書ノ行使トノ競合ニ關スル説明ヲ爲ス際ニ讓ラン
(以下參照)

(一) 眞實ナル内容ヲ有スル文書ノ偽造ハ罪ト爲ルヤ。元來文書ノ眞偽ハ其内容ノ眞偽ニ非スシテ文書ニ於ケル意思表示者ノ人格ノ眞偽ニ在リ。換言スレバ文書ノ作製名義者カ其文書ニ依リ意思ヲ表示シタリヤ否ヤニ在リ。文書ノ作製者トシテ表示セラレタル者カ其文書ニ依リ其意思ヲ表示シタルトキハ其文書ノ内容カ虛偽ナル場合ト雖モ其文書ハ偽造文書ニ非スシテ眞正ノ文書ナリ。之ト同一理ニ依リ眞正ナル事實ニ合スル内容ヲ有スル文書モ之ニ表示セラレタル作製者カ之ニ依リ意思ヲ表示シタルコトナキトキハ偽造文書ナリト謂ハサル可カラス。事實ニ反スル文書ヲ作製スルノ所爲ハ之ヲ文書ノ偽作(Falschekundigung)ト謂フ。之ヲ作製者ノ名義ヲ詐リテ文書ヲ作製スル行爲即チ文書偽造(Urkundenfalschung)ト區別ス。例ヘハ眞ニ金員ヲ貸與シタル者カ貸金請求ヲ爲サンカ爲メ嘗テ紛失シタ

ル證書ト同一内容ヲ有スル證書ヲ作製シタルカ如キハ其作製シタル文書ノ内容ハ真正ナル事實ニ合スルニ拘ラス偽造文書ナリ。又例ヘハ事實ニ反シテ人ノ惡事醜行ヲ記シタル投書ヲ作製スルカ如キハ文書ノ内容虚偽ナルニ拘ラス真正ナル文書ナリ。我刑法ニ於テハ文書ノ偽作ハ或ハ虚偽ノ文書ヲ作ルト謂ヒ(刑一五)或ハ文書ニ虚偽ノ記載若クハ虚偽ノ記入ヲ爲スト稱シ(刑二條二項)以テ之ヲ文書ノ偽造(刑一五四、一五五、一)ト區別ス。而シテ行使ノ目的ヲ以テスル文書偽造ハ常ニ之ヲ罰シ文書偽作ハ特定ノ場合ノ外ハ之ヲ罰セス(刑參七)。然ルニ學者或ハ偽造ト偽作トヲ混合シテ共ニ之ヲ偽造ナリト主張スルカ如キハ決シテ相當ナル見解ナリト謂フ能ハス(註四一)。

(註四二) (一) 同題旨 フランク、フォン・リスト諸氏(Frank, I. zu § 269, v. List, § 101)及ヒ大審院判例、江木、小崎諸氏。

判例ニ曰ク「文書ノ偽造、變造罪ハ正當ノ權限ナクシテ他人名義ノ文書ヲ作成シ又ハ之ヲ増減變更スルニ因リテ成立ス。從テ偽造、變造ノ文書カ眞實ニ合スルト否トハ犯罪ノ成否ニ何等ノ關係ナシ」(三九年大審院判決錄八八八頁)ト。

又曰ク「文書ノ偽造トハ文書ノ作成名義ヲ詐ルノ義ニシテ其内容ハ必シモ眞實ニ違フコトヲ要セス」(四〇年一三二九頁)ト。同主旨(三八年三九三頁)。江木氏曰ク「文書ヲシテ偽造ノ文書タラシムルニハ文書中包含スル所ノ事項ノ信實ヲ變スルニ非スシテ其文書ノ記録者タル資格ヲ偽ルニ在リ故ニ文書偽造ハ事實ノ眞實ヲ變セサル可カラストスルノ説ハ誤レリ」(現行刑法原論一三四頁)ト。小崎氏曰ク「文書ノ偽造又ハ變造ト謂フハ文書ノ作成者トシテ表示セラレタル者ニ於テ全然斯ノ如キ意思表示ヲ爲サ、ルカ若クハ其文書ノ表示セラレタルトキ若クハ場所ニ於テ全然斯ノ如キ意思表示ヲ爲サ、ルニ拘ラス文書ノ外觀ニ於テ恰モ斯ノ如キ意思表示アリタルカ如キ形式ヲ與フルコトヲ意味ス。斯ノ如ク文書ノ偽造、變造ト謂フハ文書ノ形式(外觀)ニ關スルモノニシテ其文書ノ内容カ假令眞實ニ符合スルトモ苟モ其文書ノ作製ニ關シテ詐リナル以上ハ其偽造、變造タルニ於テ缺クル所ナシ。之ニ反シテ文書ノ作成者トシテ表示セラレタル者ニ於テ眞ニ其時、場所ニ於テ其文書ニ依リ意思表示ヲ爲シタル以上ハ其内容カ眞實ト符合セサルモ文書ノ偽造、變造ト謂フコトヲ得ス」(日本刑法論各論三二二、三二三頁)ト。

(二) 第一異説 文書ノ内容眞實ニ合スルトキハ文書偽造罪ヲ構成セス。牧野氏。氏曰ク「余輩ハ第二説(文書偽造罪ヲ以テ文書ニ依リ表示セラレタル事實又ハ思想ノ眞正ヲ保護スルモノト解シ文書其モノヲ偽ルモ其内容ヲ偽リテ事實又ハ思想ノ眞正ヲ害スルニ非サレハ罪ト爲ラス)ヲ採ル。蓋シ文書ノ偽造ヲ問フルノ趣旨ハ偽造ノ文書ニ依テ眞實ナラサル事實カ眞實ナリトノ證據ヲ得以テ事實ノ真相ヲ害スル虞アレハナリ。文書カ事實ノ眞正ト合一スルトキハ文書偽造當然ノ實害ヲ生スル虞ナキモノナルカ故ニ之ヲ犯罪トス可キモノニ非スト解ス」(刑法通義二六〇頁)ト。尙ホ勝本氏ハ「刑法ノ解釋トシテ牧野氏ト同一ノ結論ヲ爲セリ」(刑法新義上卷四七九乃至四八一頁)。

(三) 第二異説 官公文書ニ付テハ文書ノ作製者ノ名義ヲ詐ルトキハ罪ト爲ルモ私文書ニ付テハ作製者ノ名義ヲ詐ルモ害ヲ生シ得キ場合ニ非サレハ罪ト爲ラス。岡田氏(但シ懲罰法ニ對スル見解)。

兵曰ク「文書ノ偽造、變造ハ文書自體ノ真正ヲ模擬變更スルニ因テ罪ト爲ルカ文書ノ指定スル事項ノ真正ヲ害ス可キ體裁アルニ因テ罪ト爲ルカ。蓋シ官公文書ハ各其權限内ニ於テ之ヲ調成スルコトヲ要スルノミナラス亦其程式ヲ遵守シ一旦成立シタル文書ノ現狀ヲ保持ス可キモノナルカ故ニ(例登記、訴訟記録ノ類皆然リ)文書自體ノ真正ヲ模擬變更スルニ因テ罪ト爲ル可キモ私文書ニ至テハ却テ其示定スル事項ノ真正ヲ證明スルヲ主眼トスルカ故ニ之ヲ害ス可キ體裁アルニ因テ罪ト爲ル可シ(刑法講義二二三、二四頁)ト。

虚無ノ人ノ名義ノ爲ルハ罪ト爲ルヤ

(二) 虚無ノ人ノ名義ノ文書ノ偽造ハ罪ト爲ルヤ。今日ノ交通取引ハ自然人相互ノ間ノミナラス公法人ナルト私法人ナルトヲ問ハス總テノ人格者間ニ行ハル、モノニシテ總テノ人格者ノ名義ヲ以テ文書ヲ偽造スルコトヲ得ルモノト謂ハサルヲ得ス。從テ文書ノ定義ヲ改メ文書トハ人格者ノ意思ノ表示ヲ保有スル物ヲ謂フト爲スモ誤レリト爲ス能ハス。虚無ノ人ハ人格者ニ非サルノミナラス虚無ノ人ノ意思ナルモノ存スルコトナケレハ虚無ノ人ノ名義ヲ以テ作製シタル文書ノ如キハ之ヲ文書ト稱スル能ハス。

又文書偽造罪ノ客體タル可キ文書ハ極メテ僅少ナル例外ヲ除ク外法律上ノ事項自體ヲ包含スルカ又ハ法律上ノ事項ニ影響ヲ及ホス可キ内容ヲ包含スル文書ニ限ル。而シテ文書カ法律上ノ事項ヲ包含スル所以ハ文書ノ作製者タル人格者アルカ爲メナリ。故ニ虚無ノ人ノ名義ノ文書ハ其内容如何ニ拘ラス法律上ノ事項其モノ又ハ之ニ影響ヲ及ホス可キ内容ヲ包含スル文書ナリト謂フ能ハス。從テ虚無ノ人ノ名義ヲ以テ文書ヲ偽造スルモ文書偽造罪ヲ構成セサルモノト解セサルヲ得ス。我法文ニ或ハ公務所又ハ公務員ノ作ル可キ文書ト記シ或ハ他人ノ文書ト記スルカ故ニ虚無ノ人ノ名義ノ文書ノ如キハ我法律ニ於テ文書偽造罪ノ客體ニ非スト解ス可キモノトス(註四三)。

(註四三) (一) 同趣旨 大審院判例、江木、勝本、泉二諸氏。

判例ニ曰ク「虚無ノ名義ヲ以テ私書ヲ偽造スルモ法律上罪ト爲ラス」(三〇年大審院判決録九卷八二頁)ト。江木氏

曰ク「記録者タル資格ヲ僞ルモ其記録者ニシテ現在セサル虚無ノ人ナルトキハ他ノ犯罪トシテハ格別文書偽造罪トシテハ之ヲ論スル能ハストスル佛國學者ノ所論ハ能ク此理ニ暗合スルモノト謂フ可ク、英國法律ノ尙ホ文書偽造